仙台市文化財調査報告書第373集

宮城県仙台市

郡山遺跡 30

―― 平成21年度発掘調査概報 ――
郡山遺跡・大野田官衙遺跡

2010.3

仙台市教育委員会

『郡山遺跡』30正誤表

	誤	正
巻末報告書抄録 大野田官衙遺跡の「コード 遺跡番号」	1361	1566

仙台市文化財調査報告書第373集

宮城県仙台市

郡山遺跡 30

―― 平成21年度発掘調査概報 ――
郡山遺跡・大野田官衙遺跡

2010.3

仙台市教育委員会

序　文

郡山遺跡の発掘調査事業は、昭和55年の国庫補助事業による確認調査を開始して以来30年目となりました。平成18年７月に「仙台郡山官衙遺跡群　郡山官衙遺跡　郡山廃寺跡」として国史跡に指定され、今後の歴史公園を中心とした街づくりに大きな一歩を踏み出すところです。30年のながきにわたり、発掘調査の継続が出来ましたのも遺跡の究明にご助言をいただいた先学の諸氏や、地元の地権者の皆様からのご協力があったからと感じております。

本年度は郡山遺跡の個人住宅建設に伴う調査と、郡山遺跡との関連が考えられる大野田官衙遺跡での調査を実施し、その成果をまとめたものです。郡山遺跡の調査では、方四町Ⅱ期官衙北辺の大溝を確認し、住宅密集地の中でも遺構が残っていることが明らかとなりました。大野田官衙遺跡では官衙中央部と、官衙の西辺、南辺でその解明に進展があったものと考えております。

なお本書の刊行前に調査開始以来、ご指導を賜っていた工藤雅樹委員長（「郡山遺跡・陸奥国分寺等調査指導委員会」）の訃報を受け、哀悼と感謝の意を表すものです。これまでの委員長からの指導を旨に、遺跡の解明と保護にむけて努力を誓うものであります。

今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒井　　崇

例　言

1．本書は国庫補助事業による市内遺跡調査のうち、大野田官衙遺跡の範囲確認調査に対応した概報と個人住宅建築に対応した郡山遺跡の調査報告書である。

2．本概報は調査速報を目的としている。執筆は以下のように分担した。

第１章　長島栄一

第２章　森田賢司、森田義史

第３章　長島栄一、森田賢司、齋藤義彦

第４章　長島栄一

遺物写真撮影は森田賢司、佐々木匠が、遺物観察表、遺構註記表の作成は森田賢司、齋藤義彦、森田義史、図版作成は廣瀬真理子、菊地貴博、千葉恭彦、編集は長島栄一が行った。

3．本調査に係わる出土遺物、実測図、写真などの遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．平面図に示した座標系については、第２章の図は任意に設定した（X＝０、Y＝０）を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から６°44′７″西傾）を基準にしたものであり、第３章の図は平面直角座標系X（旧測地系）である。

2．文中および図中の方位は真北を基準としている。但し、第２章の図のみ磁北を示す。

3．遺構の略称は次のとおりで、遺構番号は遺跡全体の通しである。但し、ピットは除く。

SA：柱列　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SI：竪穴住居跡　SK：土坑

SX：性格不明遺構　P：ピット

4．遺物の略号は次のとおりで、登録番号は遺跡全体の通しである。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ調整）　D：土師器（ロクロ調整）

E：須恵器　F：丸瓦・軒丸瓦　G：平瓦・軒平瓦　I：陶器

L：木製品　N：金属製品

5．土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原1989）を使用した。

6．表中の（　）が付いた数字は図上復元した推定値である。

7．本書中の地形図は、国土地理院発行の1：25000『仙台西南部』、『仙台東南部』と1：10000『長町』、『西多賀』の一部を使用している。

目　次

第１章　はじめに

Ⅰ．調査体制 …… 1

Ⅱ．調査計画と実績 …… 1

１．調査計画 …… 1

２．調査実績 …… 2

第２章　郡山遺跡

Ⅰ．第194次発掘調査

１．調査にいたる経過と調査方法 …… 4

２．基本層序 …… 4

３．遺構と遺物 …… 5

４．まとめ …… 7

Ⅱ．第195次発掘調査

１．調査にいたる経過と調査方法 …… 16

２．基本層序 …… 16

３．遺構と遺物 …… 17

４．まとめ …… 19

Ⅲ．第197次発掘調査

１．調査経過 …… 24

２．調査方法 …… 24

３．基本層序 …… 25

４．まとめ …… 25

Ⅳ．第198次発掘調査

１．調査経過 …… 26

２．調査方法 …… 26

３．基本層序 …… 27

４．遺構と遺物 …… 27

５．まとめ …… 32

Ⅴ．第199次発掘調査

１．調査経過 …… 40

２．調査方法 …… 41

３．基本層序 …… 40

４．遺構と遺物 …… 41

５．まとめ …… 41

第３章　大野田官衙遺跡

Ⅰ．大野田官衙遺跡の調査計画と実績

１．これまでの調査経過 …… 45

２．調査計画 …… 46

３．遺跡の概要 …… 46

4．調査方法 …… 50
Ⅱ．a区の調査
1．調査概要 …… 51
2．基本層序 …… 51
3．遺構と遺物 …… 51
4．まとめ …… 51
Ⅲ．b区の調査
1．調査概要 …… 55
2．基本層序 …… 55
3．遺構と遺物 …… 55
4．まとめ …… 59
Ⅳ．c区の調査
1．調査概要 …… 62
2．基本層序 …… 62
3．遺構と遺物 …… 62
4．まとめ …… 64
Ⅴ．g区の調査
1．調査概要 …… 68
2．基本層序 …… 68
3．遺構と遺物 …… 68
4．まとめ …… 72
Ⅵ．h区の調査
1．調査概要 …… 75
2．基本層序 …… 75
3．遺構と遺物 …… 75
4．まとめ …… 81
Ⅶ．i区の調査
1．調査概要 …… 82
2．基本層序 …… 82
3．遺構と遺物 …… 82
4．まとめ …… 82
Ⅷ．j区の調査
1．調査概要 …… 85
2．基本層序 …… 85
3．遺構と遺物 …… 85
4．まとめ …… 85
第4章　総括
Ⅰ．郡山遺跡 …… 88
Ⅱ．大野田官衙遺跡 …… 89

第１章　はじめに

Ⅰ．郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　文化財課長　田中則和

整備活用係　主幹兼係長　吉岡恭平、主査　木村浩二、主査　長島栄一、主事　宮田晋、
主事　森田賢司、文化財教諭　工藤慶次郎、文化財教諭　齋藤義彦

調査係　主査　平間亮輔、主事　廣瀬真理子、主事　森田義史、文化財教諭　佐藤正弥、
文化財教諭　佐々木匠、文化財教諭　菊地貴博、臨時職員　千葉恭彦

調査担当職員　○郡山遺跡　長島栄一、森田賢司、森田義史、佐藤正弥、佐々木匠、菊地貴博、千葉恭彦
○大野田官衙遺跡　長島栄一、齋藤義彦、森田賢司、平間亮輔、廣瀬真理子

発掘調査、整理作業を適正に実施するため、「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導員会」を設置し、指導・助言を受けた。

委員長　工藤雅樹（福島大学名誉教授　考古学・故人）、副委員長　今泉隆雄（東北大学文学部教授　古代史）

委　員　岡田茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授　考古学）、進藤秋輝（東北歴史博物館館長　考古学）
桑原滋郎（多賀城市文化財保護委員会会長　考古学）、須藤　隆（東北大学名誉教授　考古学）
宮本長二郎（別府大学非常勤教授　建築学）、渡部育子（秋田大学教育文化学部教授　古代史）

発掘調査にあたり次の方からご協力をいただいた。

協　力　調査にあたり富沢駅周辺区画整理事業地内の地権者より、協力を得たことを感謝申し上げる次第である。また地権者の方々のほかに、NTT東日本財務部不動産企画室、NTT東日本宮城支店総務課、大野田たんぽぽホーム、社会福祉法人仙台市手をつなぐ育成会大野田はぎの苑からも協力を得た。

Ⅱ．調査計画と実績

１．調査計画

平成21年度に計画された本書掲載の調査は、国庫補助事業である『市内遺跡発掘調査』の一部として計画され、郡山遺跡、大野田官衙遺跡を対象としている。このうち郡山遺跡については、個人住宅の建築に対応した調査の報告である。郡山遺跡では第５次５ヶ年計画終了後に、平成17年度から補足調査を実施してきたが、昨年度から郡山遺跡の西南1.5kmにある大野田官衙遺跡で、郡山遺跡Ⅱ期官衙と同時代の官衙が発見された。その範囲と性格究明が急務となったため、郡山遺跡の補足調査を休止して調査を実施した。さらに平成18年度以降実施していた陸奥国分寺跡の整備計画策定のための調査も、今年度は中止し、大野田官衙遺跡の調査に集中する調査計画を立案したものである。今年度の内容については平成21年3月4日に開催された郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会において審議がなされ、了承を得ている。

発掘調査総経費は37,695,000円、国庫補助金額18,847,000円の予算で計画し、当初は大野田官衙遺跡発掘調査に8,462,140円、郡山遺跡の個人住宅対応に5,604,860円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に7,430,000円、仙台城跡に16,198,000円とした。これによって、本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を以下のように立案した。

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡	官衙中心部など８箇所	400㎡	４月～12月	個人住宅
大野田官衙遺跡	官衙内中央	1000㎡	４月～12月	範囲確認

表１　平成21年度発掘調査計画

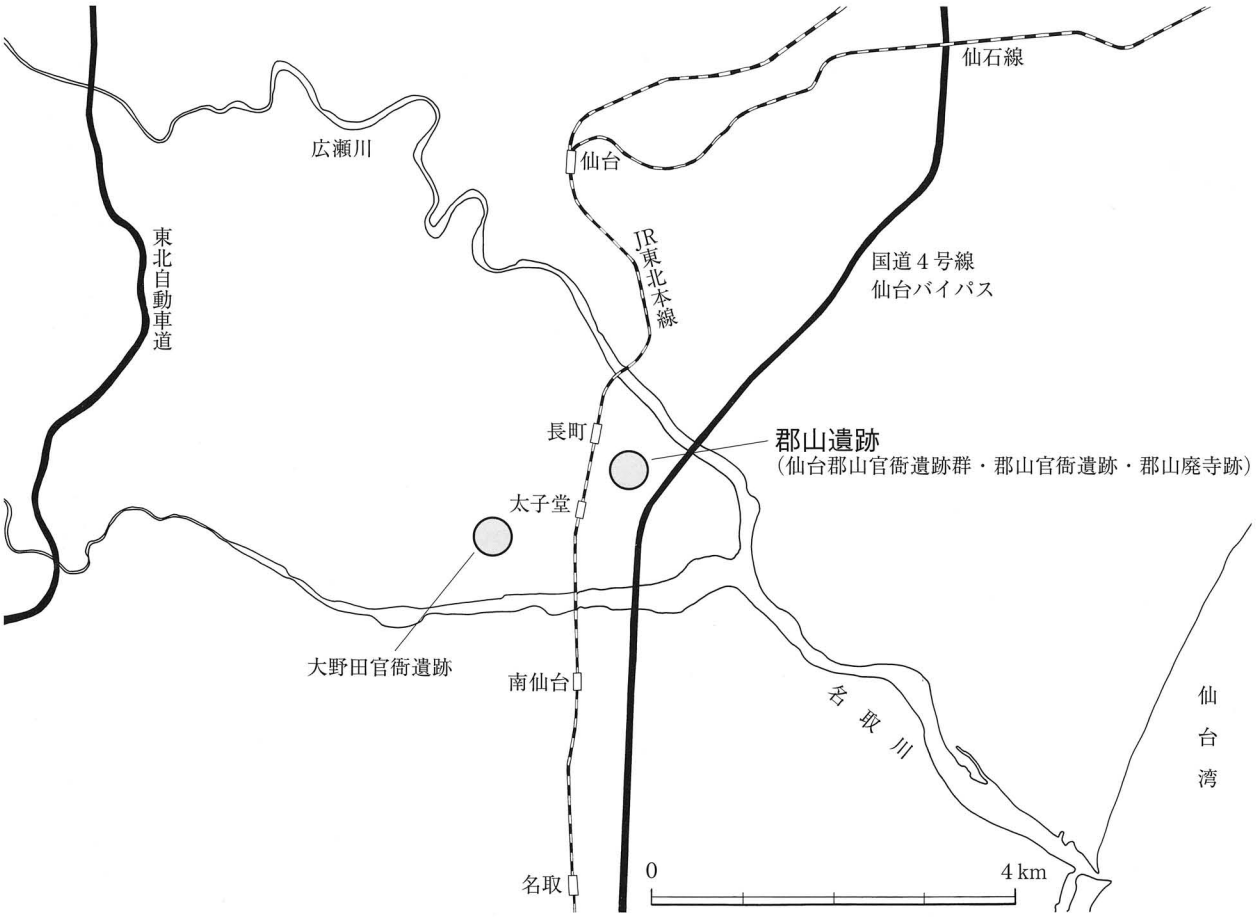
2．調査実績

上記の予定した発掘調査では、年度途中で大野田官衙遺跡の調査地点の変更に伴い、予算の変更が必要となったため、郡山遺跡内での個人住宅への対応は、「仙台平野の遺跡群」として発掘調査を実施した。報告については5箇所の調査の詳細を当初の予定通り本書に掲載したものである。

大野田官衙遺跡については、当初計画したａ区からｆ区までのうち、区画整理事業の進捗からｄ、ｅ、ｆ区の３箇所をはずし、あらたにｇ、ｈ、ｉ、ｊ区の４箇所を追加して調査を行った。

遺跡名・調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第194次	南方官衙東地区	32.4㎡	４月20日～４月28日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第195次	南方官衙西地区	20㎡	６月22日～６月24日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第197次	Ⅱ期官衙外溝東辺	18㎡	11月30日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第198次	Ⅱ期官衙東部	30㎡	12月2日～12月11日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第199次	Ⅱ期官衙大溝北辺	70㎡	12月14日～12月18日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
大野田官衙遺跡	官衙内部a,b,c,g,h,i区 官衙外j区	689㎡	４月20日～12月９日	範囲確認	

表２　平成21年度発掘調査実績

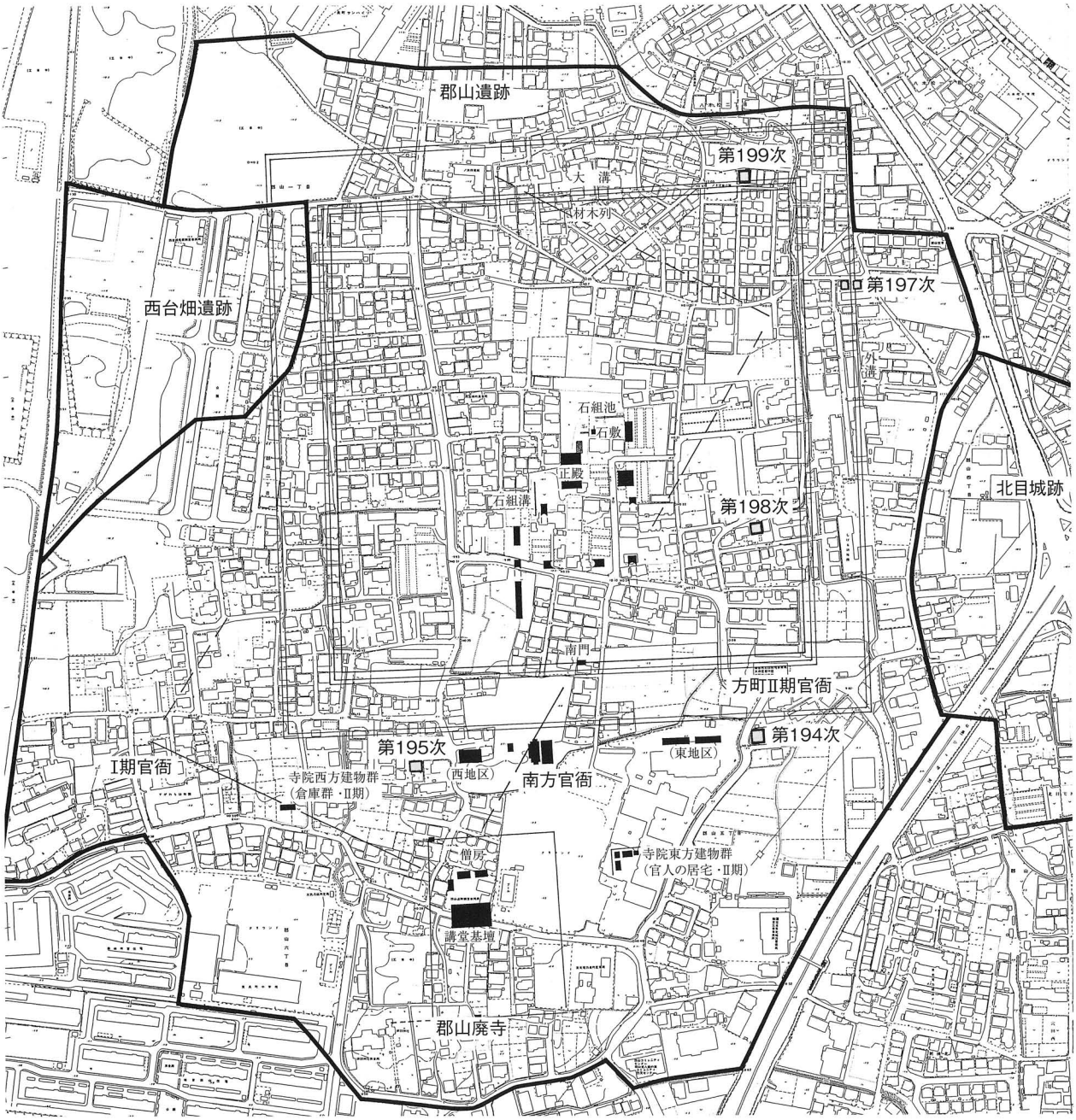


第１図　調査遺跡位置図

第２章　郡山遺跡

郡山遺跡では、補足調査として方四町Ⅱ期官衙域中央部などでの調査を予定していたが、大野田官衙遺跡での性格究明等が急がれたため、今年度予定していた調査を休止した。しかし、個人住宅の建築に伴って発掘調査の必要があったため、第194次、第195次、第197次、第198次、第199次調査を実施した。

調査は「仙台平野の遺跡群」において実施されたが、調査の成果が上がったので、これまで通り「郡山遺跡」の調査報告書で詳細を載せている。以下にそれらを報告することにする。



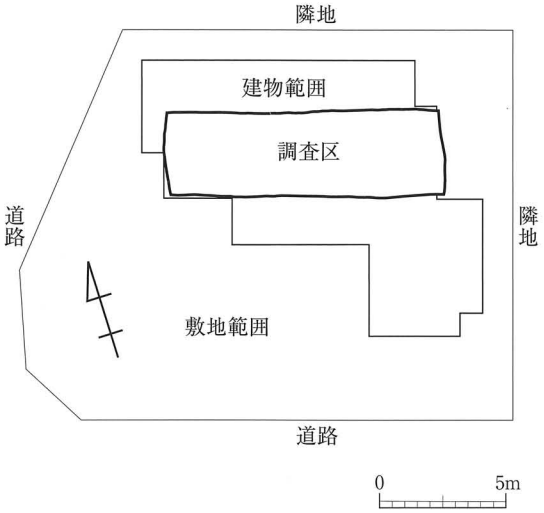
第２図　郡山遺跡全体図

Ⅰ．第194次発掘調査

1．調査にいたる経過と調査方法

今回の調査は平成21年３月３日付で、地権者より提出された、個人住宅建築工事に係る発掘届に基づき実施した。確認調査は平成21年４月20日より着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

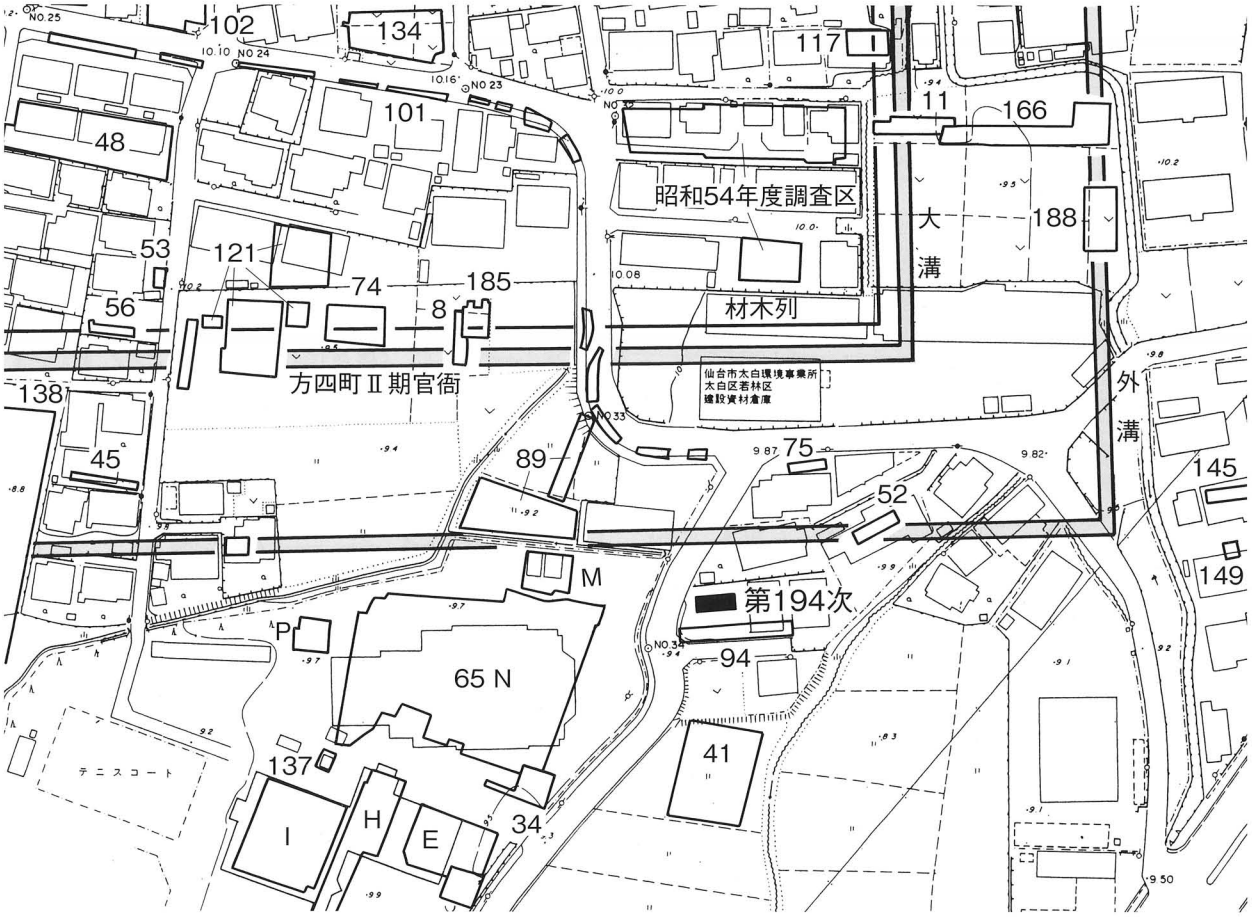
調査区は南北３ｍ×東西12mに設定し、重機により盛土およびⅠ層を掘削している。Ⅱ層上面で人力による遺構検出作業を行い、検出状況を写真に記録し、掘削後に写真、図面による記録をした。



第３図　調査区配置図（S=1/300）

2. 基本層序

調査地点の盛土は80cm～１ｍで、基本層は３層に大別された。Ⅰ層は耕作土であり、厚さは約20cmである。Ⅱ層は明黄褐色砂質シルトで、上面が遺構検出面である。Ⅲ層は明黄褐色粘土質シルトで、溝跡の底面のみで検出されている。



第４図　第194次調査区位置図（S=1/2000）

3．遺構と遺物

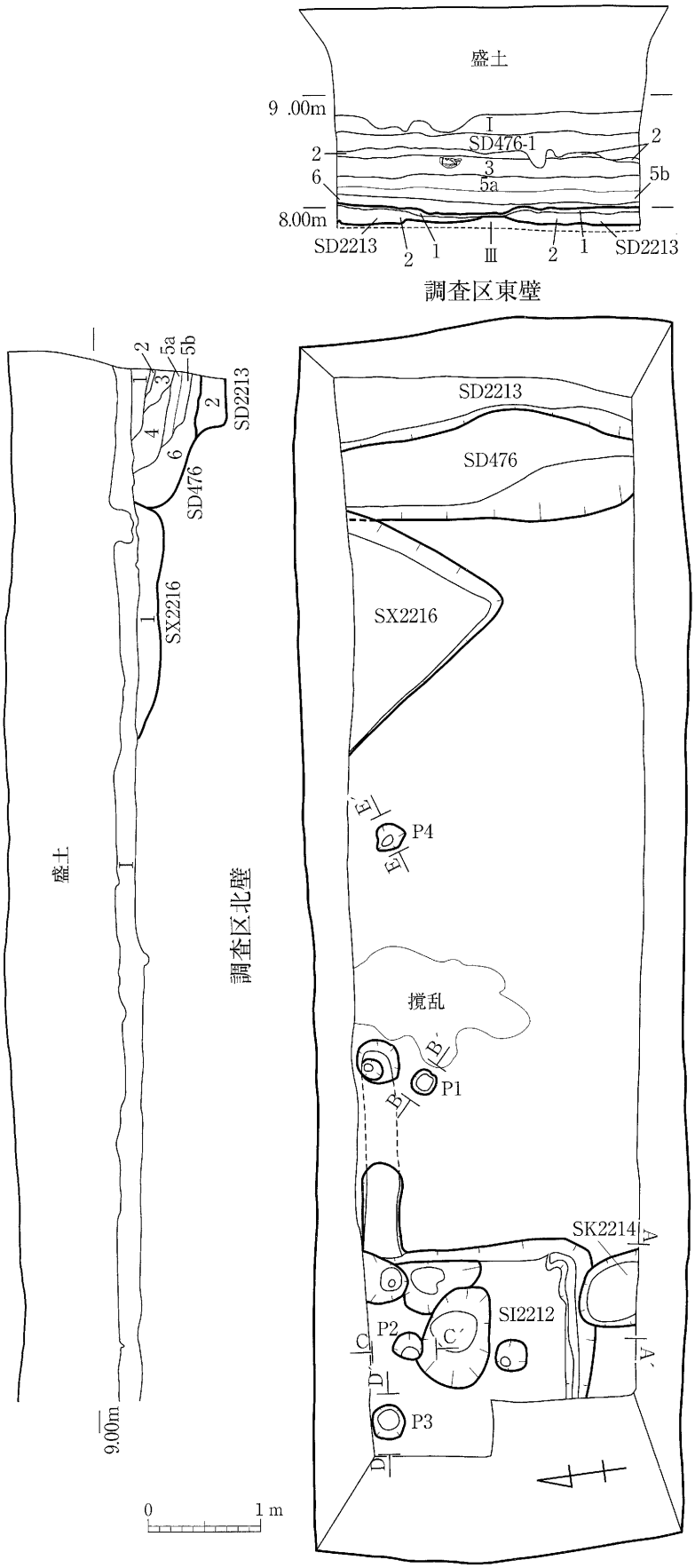
Ⅱ層上面において、調査区の東端で溝跡2条、西側に竪穴住居跡１軒のほか性格不明遺構１基、土坑１基、ピットなどが検出された。

1）竪穴住居跡

SI2212竪穴住居跡　調査区西側に位置し、北と西の調査区外に延びている。部分的な検出に留まるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さは40～50cmほどである。床面は調査区西端部分がより明確で、炭化物の広がりや貼床状の堆積が一部捉えられる。堆積土は10層に分かれ、第５層はカマド内堆積土であるが、灰の集積は顕著ではない。カマドの袖は、SI2212-P3（第6図の「P3」）が位置しているため、不明瞭であり、床面も検出できなかった。床面からはピットが３基検出された。SI2212-P1は径28cmの円形を呈し、深さは18cmである。堆積土は３層であり、堆積状況から柱穴の可能性がある。SI2212-P2は長軸90cm×短軸60cmの楕円形を呈する。深さは20cmで堆積土は１層であり、土師器甕片が３点出土している。SI2212-P3は長軸70cm×短軸45cmの楕円形を呈する。深さは16cmで、堆積土は１層であり、土師器甕片が３点出土している。SI2212-P2に切られている。SI2212竪穴住居跡から出土した遺物は、土師器甕片50点、土師器坏片18点、須恵器甕片３点である。遺構の重複はSK2214土坑、ピット２、３に切られている。

2）溝跡

SD476溝跡　調査区東端に位置し、調査区を縦断するように南北方向に延びている。調査区の北側に撹乱があ



第５図　遺構配置図（S=1/60）

り、溝跡の上面が失われていた。東側が調査区外のため不明であるが、上幅は132cm以上、下幅は108cm以上と推定される。検出面からの深さは約60cmで、堆積土は大別して６層に分けられる。第１層に灰白色火山灰（註）が帯状に含まれる。出土遺物は第３層から須恵器壺片が２点（第８図５、６）、土師器甕片18点（同図４他）、第４層中から土師器甕片４点、第５層から土師器甕片１点、第６層から土師器坏片３点、土師器甕片２点が出土している。

SD2213溝跡　SD476溝跡の直下に位置し、調査区を南北に縦走する。検出面からの深さは30cmほどである。調査区東側に広がるため詳細は不明であるが、上幅は50cm以上、下幅は40cm以上と推定される。堆積土は２層確認され、第２層から土師器甕片５点、土師器坏片１点が出土している。SD476溝跡に上部が切られていると考えられる。

3）土坑

SK2214土坑　調査区南西に位置している。平面形は楕円形を呈し、70cm×50cm以上の規模である。検出面からの深さは52cmで、堆積土は2層である。1、２層中から土師器甕片が１点ずつ出土している。遺構の重複はSI2212竪穴住居跡の南辺を切っている。

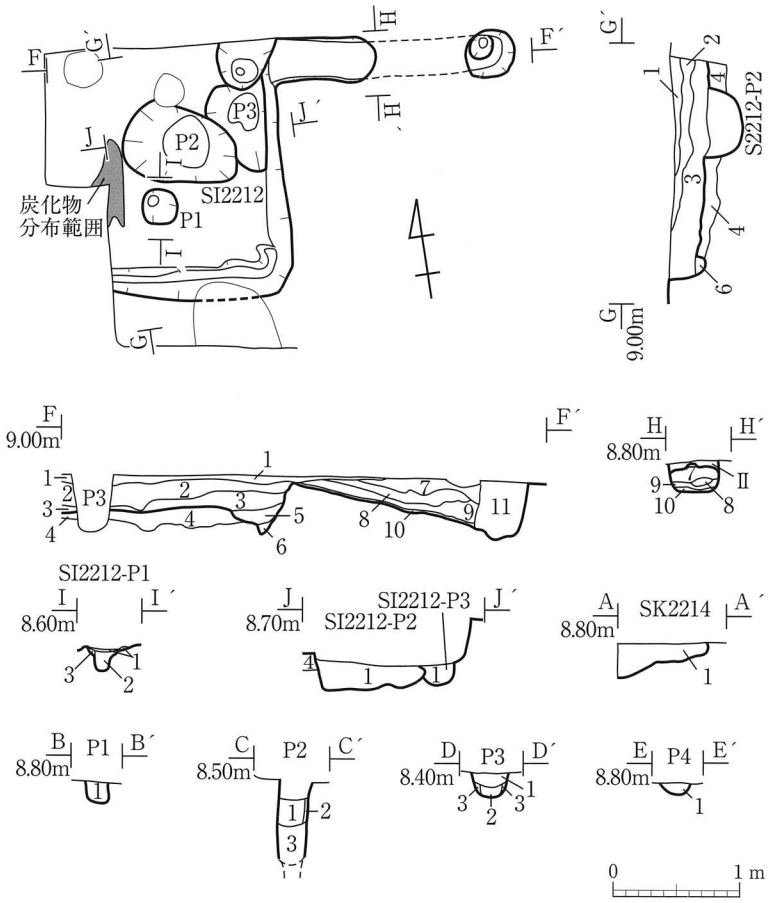
4）性格不明遺構

SX2216性格不明遺構　調査区北東部に位置している。調査区北側へ延びており、平面形は不明である。検出面からの深さは20cm程である。遺物は出土していない。東半上部は撹乱によって削平されている。遺構の重複関係はSD476溝跡を切っている。

5）ピット

P1　SI2212竪穴住居跡の煙出しの南側

基本層	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	10YR3/1　黒褐色	粘土	
Ⅱ	10YR6/6　明黄褐色	砂質シルト	調査区北側Ⅱ層上面に酸化鉄多量含む。
Ⅲ	10YR7/6　明黄褐色	粘土質シルト	
SD476-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	中層に灰白色火山灰を帯状に含む。
2	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
4	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	炭化物を斑状に微量に含む。
5a	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
5b	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	上面に炭化物を含む。
6	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	
SD2213-1	10YR3/2　黒褐色	粘土	
2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
層位	土　色	土　性	備　考
SK2214-1	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	10YR7/2にぶい黄橙粘土質、酸化鉄を粒状に少量含む。
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	
SX2216-1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
P1-1	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	
P2-1	10YR5/1　褐灰色	粘土	
2	10YR3/2　黒褐色	粘土	
P3-1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
2	10YR5/1　褐灰色	シルト質粘土	10YR3/1ブロック少量、酸化鉄粒少量含む。 外側に酸化鉄層状に入る。柱痕跡か。
3	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	10YR5/6ブロック少量、酸化鉄粒少量含む。柱掘り方か。
P4-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅱ層土を多量に含む。



層　位	土　色	土　性	備　考
SI2212-1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	住居内堆積土。
2	10YR6/5　明黄褐色	シルト	住居内堆積土。
3	10YR6/6　明黄褐色	シルト	住居内堆積土。
4	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	粒状に酸化鉄を含む。掘り方埋め土。
5	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	下層に微量の酸化鉄を含む。カマド内堆積土。
6	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	微量の酸化鉄を含む。
7	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
8	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層土をφ3～10cmのブロック状に多量含む。
9	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層土をφ5～10mmの粒状に多量含む。 炭化物、焼土を少量含む。
10	10YR2/1　黒色	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を多量含む。
11	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	下層に炭化物を含む。
SI2212P1-1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR6/4ブロック、酸化鉄ブロック少量含む。柱抜き取り穴か。
2	10YR7/1　灰白色	シルト質粘土	10YR5/1ブロック少量含む。酸化鉄下層に含む。柱痕跡。
3	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	10YR5/4ブロック中量含む。柱掘り方か。
SI2212P2-1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR6/4ブロック、10YR4/6ブロック少量含む。 10YR3/1ブロック、酸化鉄ブロック少量含む。
SI2212P3-1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/6ブロック多量含む。 10YR3/1ブロック、酸化鉄ブロック少量含む。

第６図　SI2212竪穴住居跡（S=1/60）

に位置し、径20cmの円形を呈する。検出面からの深さは16cmで堆積土は１層である。遺物は出土していない。

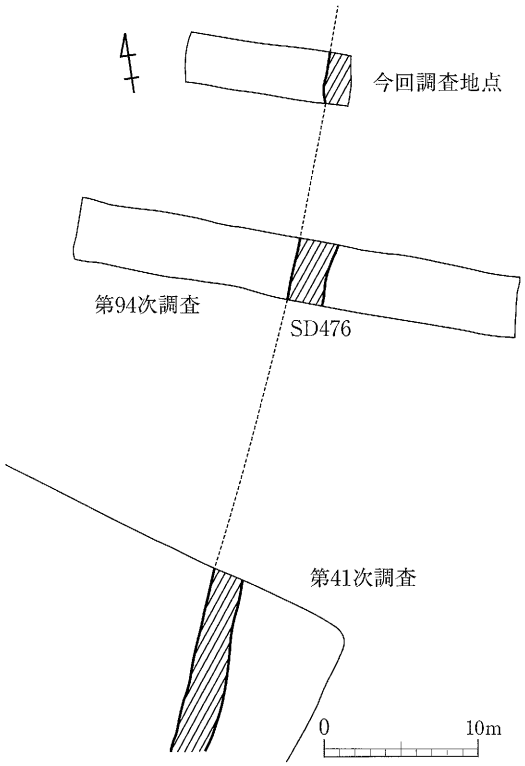
P2　SI2212竪穴住居跡の堆積土上面で検出された。平面形は南北40cm、東西40cm以上の不整楕円形を呈すると考えられるが、北側は調査区外へ延びている。検出面からの深さは60cm以上である。堆積土は２層である。遺物は出土していない。

P3　調査区北西隅に位置している。平面形は径16cmの円形を呈し、検出面からの深さは22cmである。堆積土は３層で、柱穴の可能性がある。遺物は第３層から土師器坏片１点、土師器甕片１点が出土している。遺構の重複はSI2212竪穴住居跡を切っている。

P4　調査区中央やや北寄りに位置する。平面形は径14cmのいびつな円形を呈する。検出面からの深さは8cm程で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

6）出土遺物

今回の調査では土師器壺、甕片84点、坏23点、須恵器壺、甕片６点が出土している。



第７図　過去の調査区との位置関係（S=1/500）

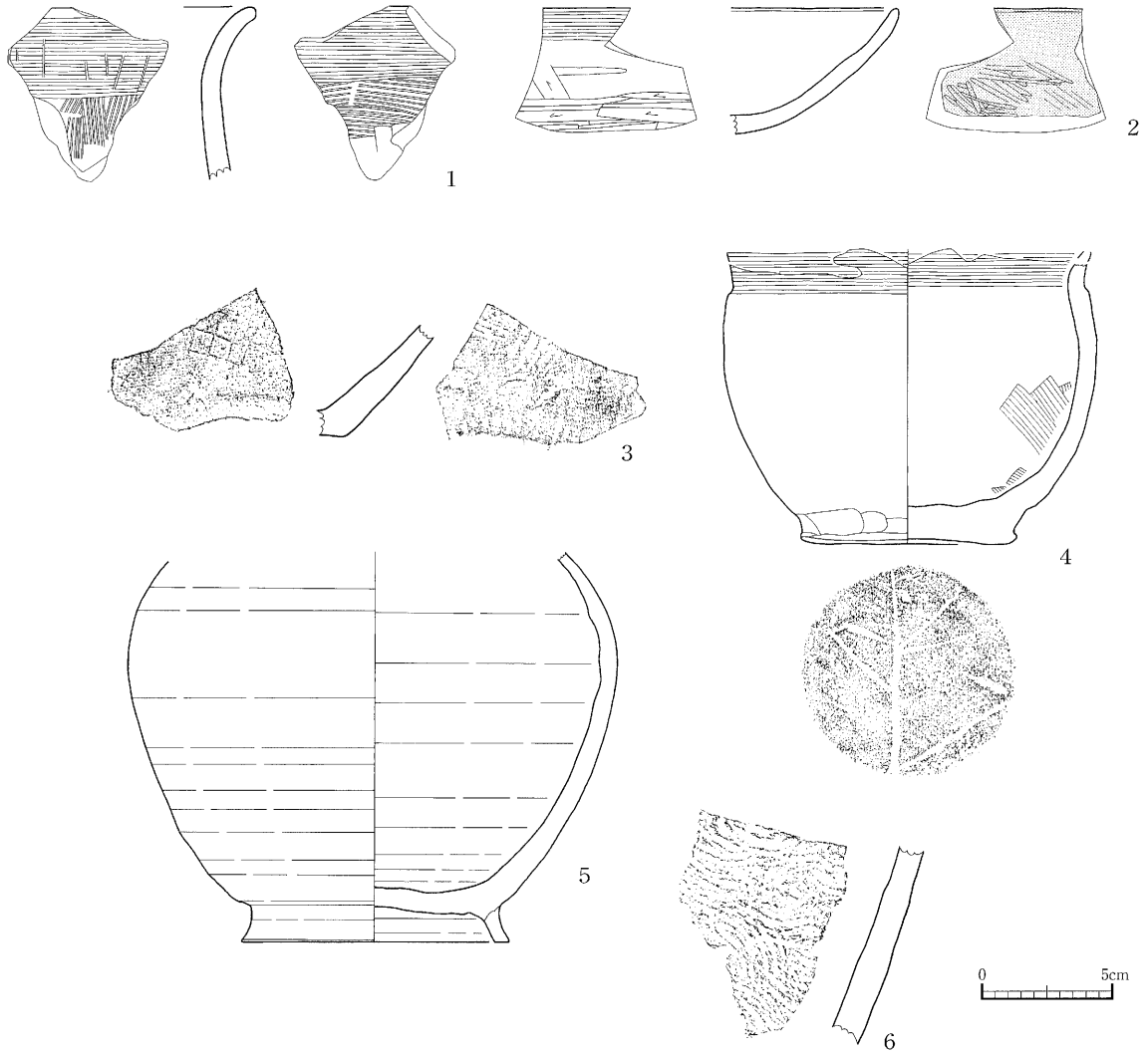
４．まとめ

今回の調査地点は郡山遺跡南方官衙地区の東部にあたる。検出された遺構について、SI2212竪穴住居跡はカマド内堆積土に灰の集積が顕著でないこと、カマドの袖部にあたる箇所にSI2212-P3が位置していることから、カマドが別の場所に作り替えられた可能性が考えられる。またSD2213溝跡については、SD476溝跡の下部に位置すること、方向が一致することから、一連のものである可能性も考えられる。

周辺の調査区との関連では、今回調査地点のすぐ南側に位置する第94次調査区、さらに南方30mに位置する第41次調査区において、南北に延びるSD476溝跡が検出されており、今回調査地点で検出されたSD476、SD2213溝跡がこれに続く可能性がある。また第94次調査において、溝跡の東西に竪穴住居跡が検出されており、今回調査地点で検出されたSI2212竪穴住居跡との関連が想定される。

今後、周辺の調査成果と合わせ、南方官衙地区東部の様相や、SD476溝跡の状況などが明らかにされる必要がある。

註　この灰白色火山灰は県内で広域に分布する「灰白色火山灰」（山田・庄子1980）と同義である。この火山灰は十和田a火山灰（大池1972）と推定されており、降下年代は915年とされている（町田・新井1992、小口2003など）。



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量			備考（産地・釉薬・文様・調整など）	写真図版
		遺構名	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
	C－1010	SI2212	1	土師器	坏	—	—	—	内面：ミガキ→黒色処理	7-1
	C－1011	SI2212	1	土師器	甕	—	—	—	外面：ハケメ	7-2
1	C－1012	SI2212	1	土師器	甕	(6.9)	—	—	内面：口縁－ヨコナデ、体部－ハケメ、外面：口縁－ハケメ→ヨコナデ、体部－ハケメ	7-3
2	C－1013	SI2212	2	土師器	坏	(5.0)	—	—	内面：ミガキ→黒色処理、外面：口縁－ヨコナデ、体部－ケズリ→ミガキ	7-4
3	E－532	SI2212	3	須恵器	甕	(5.0)	—	—	内面：当て具痕（格子状）、外面：平行タタキ	7-5
	C－1014	SI2212－P3	1	土師器	坏	—	—	—	内面：ヨコナデ、外面：ヨコナデ→ハケメ	7-6
4	C－1015	SD476	3	土師器	甕	(11.7)	14.2	7.4	内面：口縁－ヨコナデ、体部ナデ、外面：口縁－ヨコナデ、胴下部ナデ、底部：木葉痕跡	7-7
5	E－533	SD476	3	須恵器	壺？	(15.5)	—	10.6	内外面：ロクロナデ	7-8
6	E－534	SD476	3	須恵器	甕	(8.0)	—	—	内面：当て具痕（同心円状）、外面：平行タタキ→ナデ	7-9
	E－535	SD476	5	須恵器	甕	—	—	—	内面：当て具痕、外面：平行タタキ→ナデ	7-10
	C－1016	SD476	6	土師器	坏	—	—	—	内面：ミガキ→黒色処理	7-11
	C－1017	SD476	6	土師器	坏	—	—	—	内面：ミガキ→黒色処理	7-12
	C－1018	SD476	6	土師器	甕	—	—	—		7-13

第８図　出土遺物実測図（S=1/3）

1．Ⅱ層上面検出状況東側（西から）

2．SI2212竪穴住居跡検出状況
（西から）

3．SX2216性格不明遺構検出状況
（南西から）

写真図版１　Ⅱ層上面検出状況

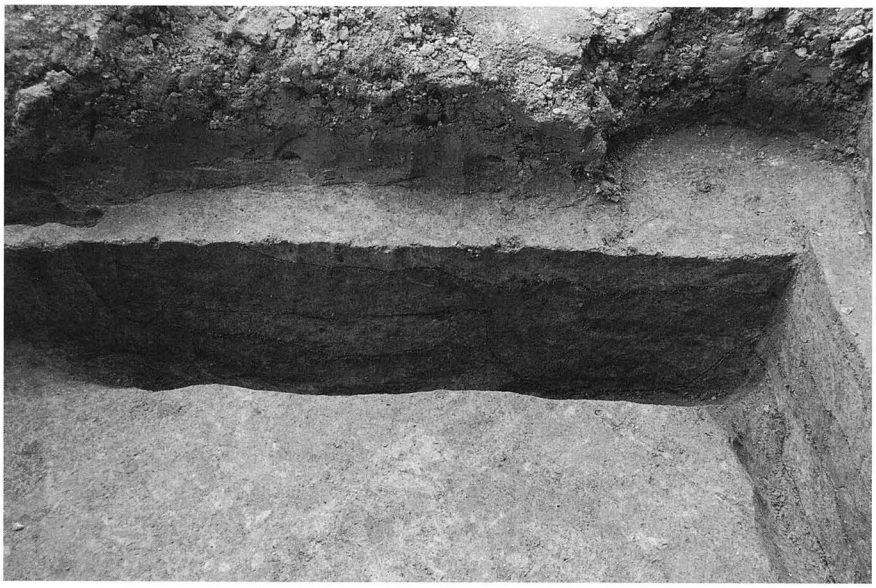
1．SK2214土坑検出状況（西から）

2．SI2212竪穴住居跡床面検出状況
（西から）

3．SI2212竪穴住居跡完掘状況
（西から）

写真図版２　SI2212竪穴住居跡、SK2214土坑検出・完掘状況

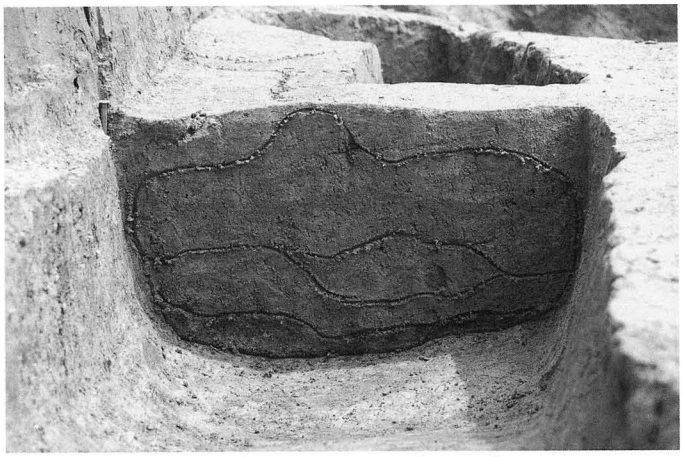
1．SI2212竪穴住居跡東西ベルト断面（南から）



2．SI2212竪穴住居跡南北ベルト断面（東から）

3．完掘状況（西から）

写真図版３　SI2212竪穴住居跡ベルト断面・完掘状況



1．SI2212竪穴住居跡煙道部南北断面（西から）

2．SI2212竪穴住居跡煙道部東西断面（南西から）

3．SI2212竪穴住居跡煙道部完掘状況（西から）

4．SI2212竪穴住居跡P1断面（西から）

5．SI2212竪穴住居跡P2・P3断面（西から）

6．SI2212竪穴住居跡P2・P3断面（西から）

写真図版４　SI2212竪穴住居跡煙道部・ピット

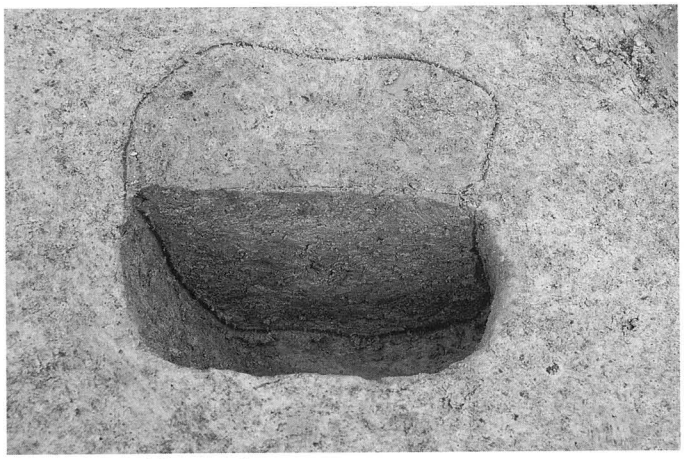
1．SD476溝跡北側断面（南から）

2．SD476溝跡東側断面（西から）

3．SD476溝跡完掘状況（南から）

写真図版５　SD476溝跡断面・完掘状況

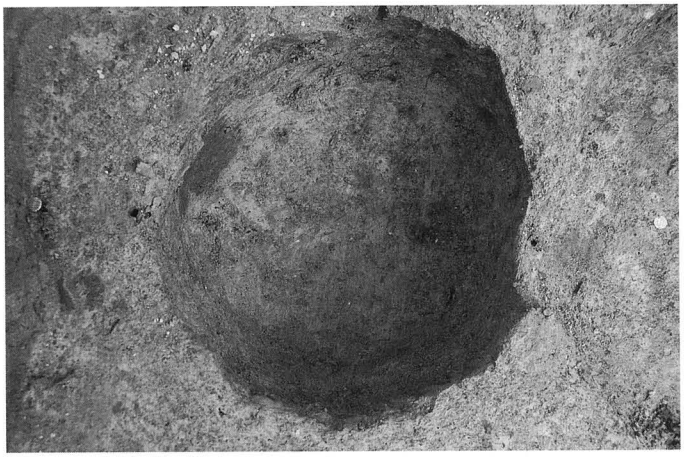
1．SK2214土坑断面（北から）



2．P1断面（南西から）

3．P2断面（西から）

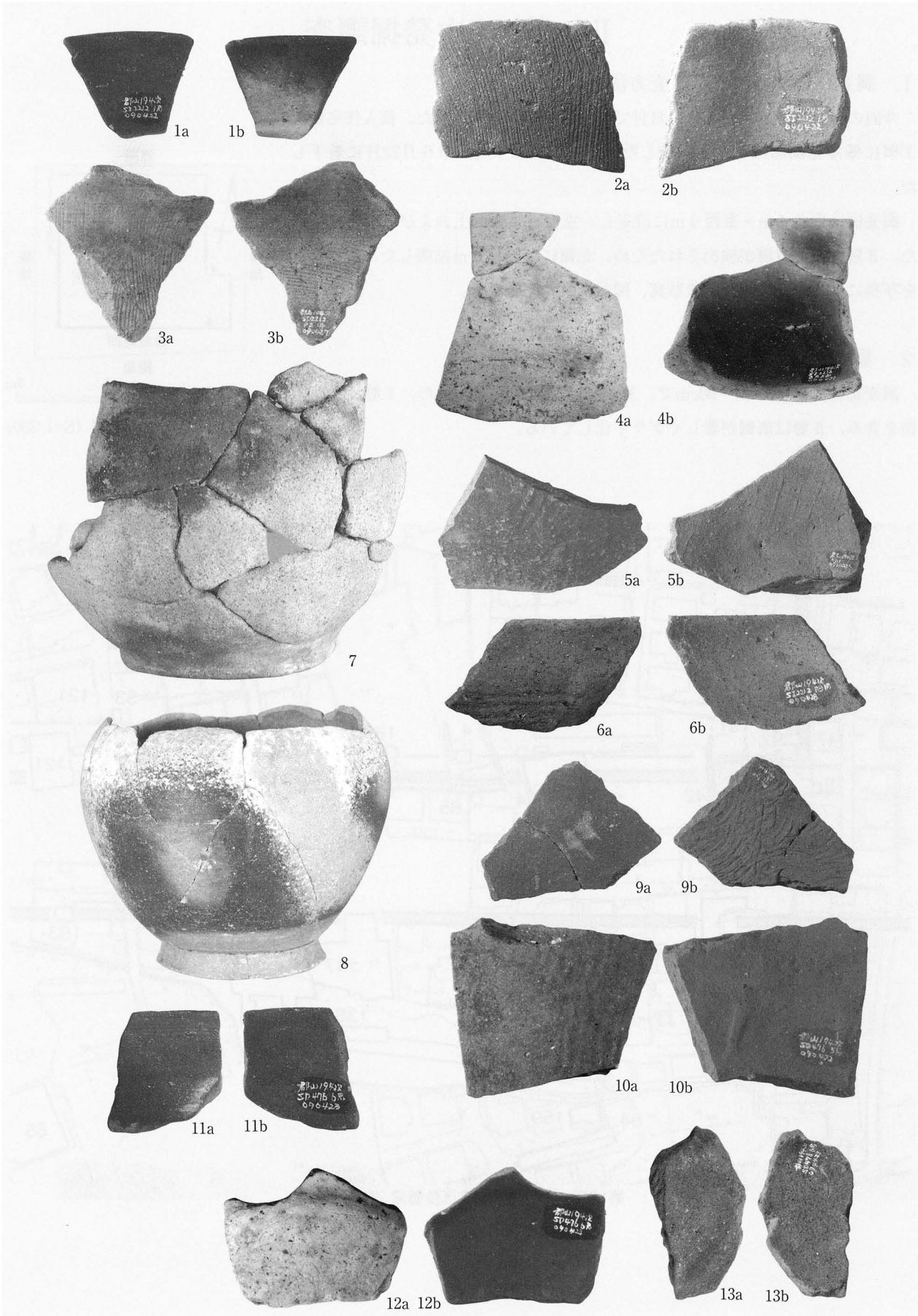
4．P2完掘状況（南から）



5．P3完掘状況（南から）

6．P4断面（南東から）

写真図版６　SK2214土坑、P1～4断面・完掘状況


1a
1b
2a
2b
3a
3b
4a
4b
7
5a
5b
6a
6b
8
9a
9b
10a
10b
11a
11b
12a
12b
13a
13b

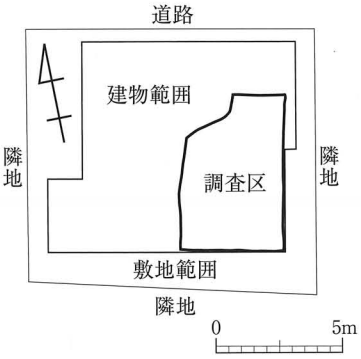
写真図版７　出土遺物

Ⅱ．第195次発掘調査

１．調査にいたる経過と調査方法

今回の調査は平成21年５月11日付で、地権者より提出された、個人住宅建築工事に係る発掘届に基づき実施した。発掘調査は平成21年６月22日に着手した。

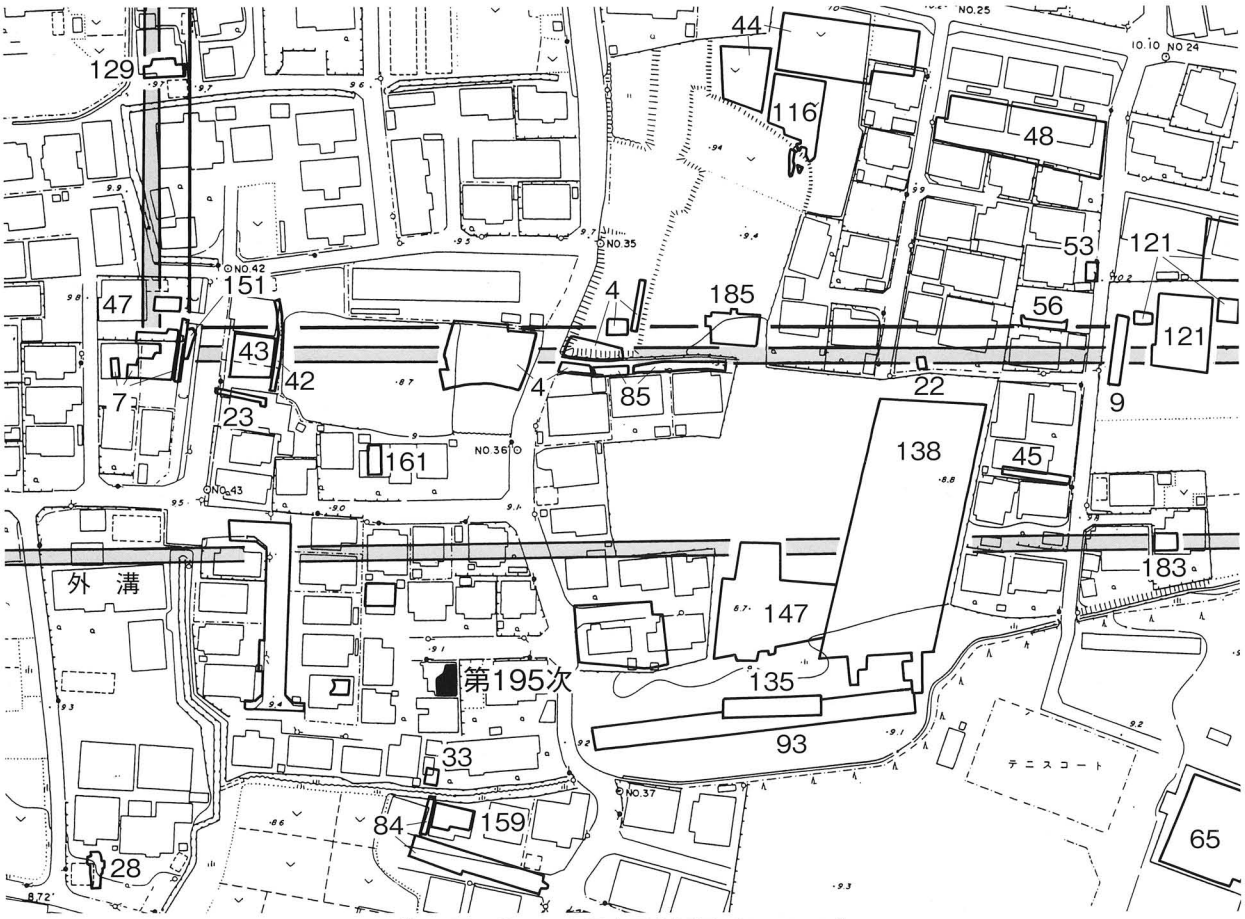
調査区は南北４ｍ×東西４ｍに設定し、重機により盛土およびⅠ層を掘削した。Ⅱ層上面で遺構が検出されたため、北側に２ｍ×２ｍ拡張した。検出状況を写真により記録し、掘削後写真、図面により記録した。



第９図　調査区配置図（S=1/300）

２．基本層序

調査地点の盛土は70～90cmで、基本層は３層に大別された。Ⅰ層は現代遺物を含み、Ⅱ層は南側が著しくグライ化している。



第10図　第195次調査区位置図（S=1/2000）

3．遺構と遺物

Ⅱ層上面で柱列２列、ピット11基のほか性格不明遺構１基が検出された。

1）柱列

SA2217柱列　調査区を北東－南西方向に延びる。規模は３間以上で、総長は5.6m以上と考えられる。柱間寸法は180～200cmであり、方向はN-29.5°-Eである。ピット６は直径40cmの円形で検出面からの深さは40cmである。柱痕跡の直径は15cmである。ピット15は直径50cmほどの円形で検出面からの深さは45cmである。柱痕跡は径20cmである。抜取穴は検出されなかったが、柱痕と考えられる２層中から小礫が出土することから抜き取りがなされている可能性が高い。ピット17は北東が調査区外のため詳細は不明であるが、直径は40cmほどと考えられる。検出面からの深さは35cmで、柱痕跡の直径は15cmである。柱の抜取穴が確認された。ピット６の１層からは土師器坏が出土している。

SA2218柱列　調査区を南北方向に延びる。規模は２間以上で、総長は2.4m以上と考えられる。南東の調査区外に延びているため詳細は不明である。方向はN-7°-Eである。ピット12は平面形が長軸76cm以上×短軸60cmの楕円形を呈し、東側が一部調査区外に延びている。柱痕跡は直径20cm程度である。検出面からの深さは掘り方が40cm、柱痕跡が56cmである。ピット13は検出幅は112cm×30cmで、柱痕跡は検出面で直径26cmほどである。検出面からの深さは掘り方が30cm、柱痕跡は40cmとなっている。SX2219性格不明遺構に上部を切られている。ピット12、13ともに遺物は出土していない。

2）ピット

P1　直径30cmで、検出面からの深さが20cmである。堆積土は１層で、柱痕跡は確認されていない。

P2　直径45cmで、検出面からの深さが24cmである。堆積土は１層で、柱痕跡は確認されていない。堆積土中から土師器片が出土している。ピット１に切られている。

P3　直径40cmで、検出面からの深さが42cmである。堆積土は１層である。

P4　直径25cmの円形で、検出面からの深さが24cmである。堆積土は１層で、柱痕跡は確認されていない。堆積土中から土師器片が出土している。

P5　直径30cmの円形で、検出面からの深さは29cmである。堆積土は１層で、柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

P7　平面形が20×30cmの楕円形で、検出面からの深さは25cmである。柱痕跡は底面で検出され、直径20cmである。堆積土は１層で、遺物は出土していない。

P8　平面形が45×55cmの楕円形で、検出面からの深さは14cmである。堆積土は１層で、遺物は出土していない。

P9　直径25cmの円形で検出面からの深さは35cmである。柱痕跡が底面で検出され、直径10～15cmである。遺物は出土していない。

P10　直径20cmの円形で、検出面からの深さは３cmである。

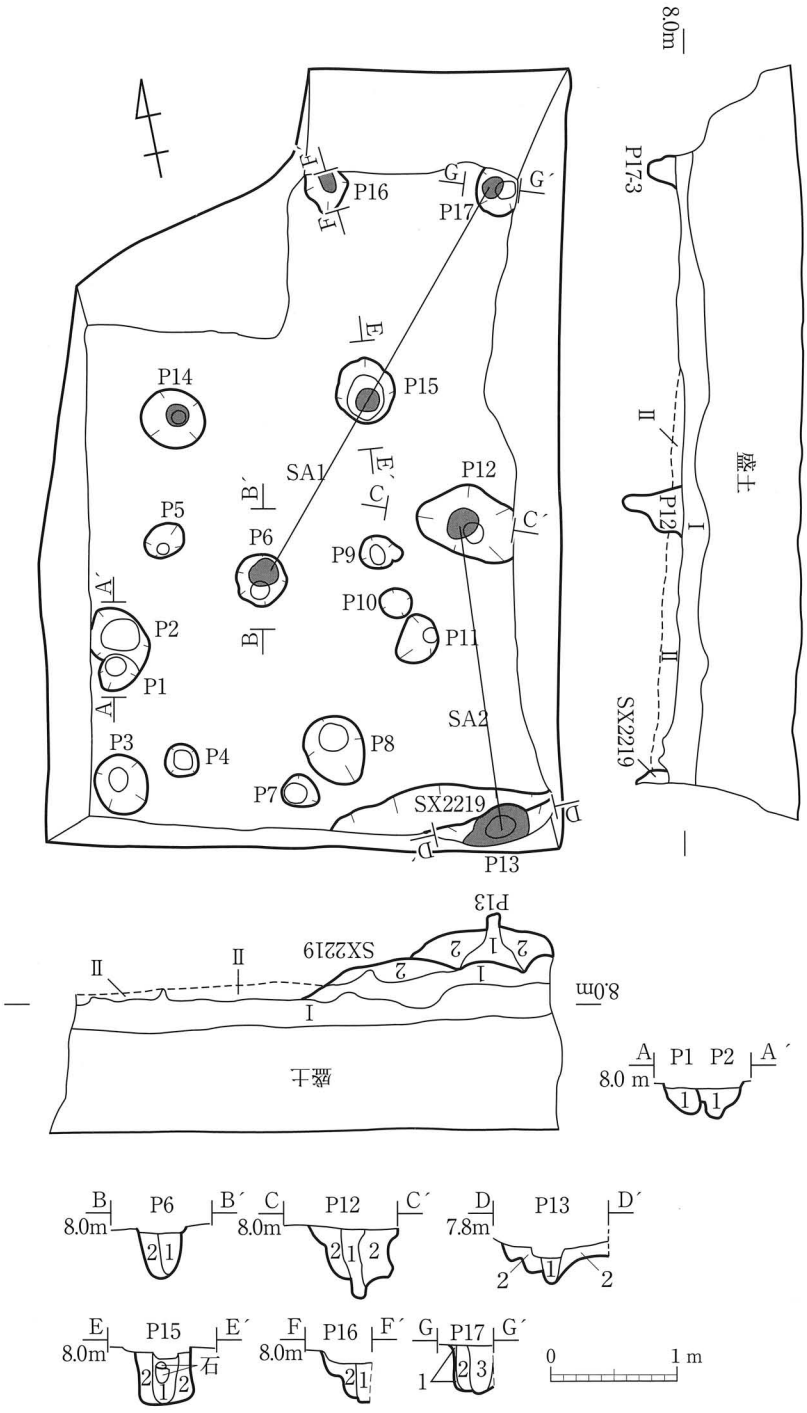
P11　平面形が30×40cmの楕円形で、検出面からの深さは14cmほどである。堆積土は１層で、遺物は出土していない。

P14　直径50cmの円形で柱痕跡が直径20cmである。検出面からの深さは17cmで、遺物は出土していない。

P16　最大幅35cmの不整形で、北側は調査区外である。柱痕跡が確認できるが調査区外のため正確な直径は不明である。検出面からの深さは45cmである。

3）性格不明遺構

SX2219性格不明遺構　調査区南東隅で検出された。大部分が調査区外のため平面形、規模は不明であり、深さは40cmである。堆積土は２層で、遺物は出土していない。SA2218柱列のピット13を切っている。



第11図　遺構配置図（S=1/60）

4）出土遺物

今回の調査ではピット６の１層から土師器坏１点、内面黒色処理された土師器片１点が出土した。その他、ピット２～４の１層およびⅡ層上面で土師器が７点ほど出土しているが、いずれも細片である。

４．まとめ

今回調査地点は郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の外郭南西の外側で、郡山廃寺との間に位置する。今回調査地点の西方約60mに位置する第124次調査区では竪穴住居跡や掘立柱建物跡や柱列跡などが検出されており、これらの遺構の多くはⅠ期官衙に伴う遺構群とされている。中でもSB1901掘立柱建物跡では梁行の方向がN-29.5°-Eとなり（註）、今回検出されたSA2217柱列と方向を同じくする。また今回調査地点の北西30mに位置する第118次調査区でも、Ⅰ期官衙と同時期の可能性が指摘されているSB1805掘立柱建物跡が検出されている。以上から、今回調査区のSA2217柱列もⅠ期官衙に関連する遺構の可能性が考えられる。

註　SB1901掘立柱建物跡の方向については、第124次発掘調査報告書の図面を基に再計測した。

表３　土層注記表

基本層	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	10YR3/1　黒褐色	粘土	現代遺物を含む。
Ⅱ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	調査区南側が著しくグライ化
層位	土　　色	土　性	備　　考
SX2219-1	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
-2	10YR3/2　黒褐色	粘土	グライ化。7.5GY4/1暗緑灰の粘土ブロック含む。酸化鉄粒を少量含む。
P1-1	10YR3/1　黒褐色	粘土	
P1-2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
P3-1	10YR3/1　黒褐色	粘土	
P4-1	10YR3/1　黒褐色	粘土	
P5-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	
P6-1	10YR4/1　褐灰	粘土	酸化鉄粒を少量含む。炭化物粒微量に含む。柱痕跡。
P6-2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/6黄褐（Ⅱ層土）ブロック少量含む。
P7-1	10YR3/1　黒褐色	粘土	
P7-2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	Ⅱ層ブロックを含む。
P8-1	10YR3/1　黒褐色	粘土	
P9-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	酸化鉄多量に含む
P9-2	10YR3/2　黒褐色	粘土	柱抜き穴か
P10-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	
P11-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	
P12-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	酸化鉄多量に含む。10YR6/2の粘土ブロック含む。
P12-2	10YR3/2　黒褐色	粘土	酸化鉄多量に含む。柱痕跡。
P13-1	10YR3/3　暗褐	粘土	酸化鉄多量に含む。10YR6/2の粘土ブロック含む。
P13-2	10YR3/2　黒褐色	粘土	酸化鉄多量に含む。柱痕跡
P14-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	
P14-2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	柱痕跡か
P15-1	10YR3/3　暗褐色	粘土	
P15-2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
P16-1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
P16-2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	炭化物を含む。
P17-1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	掘り方埋土
P17-2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	柱痕跡
P17-3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄・10YR7/2の粘土ブロック多量に含む。柱抜き穴か

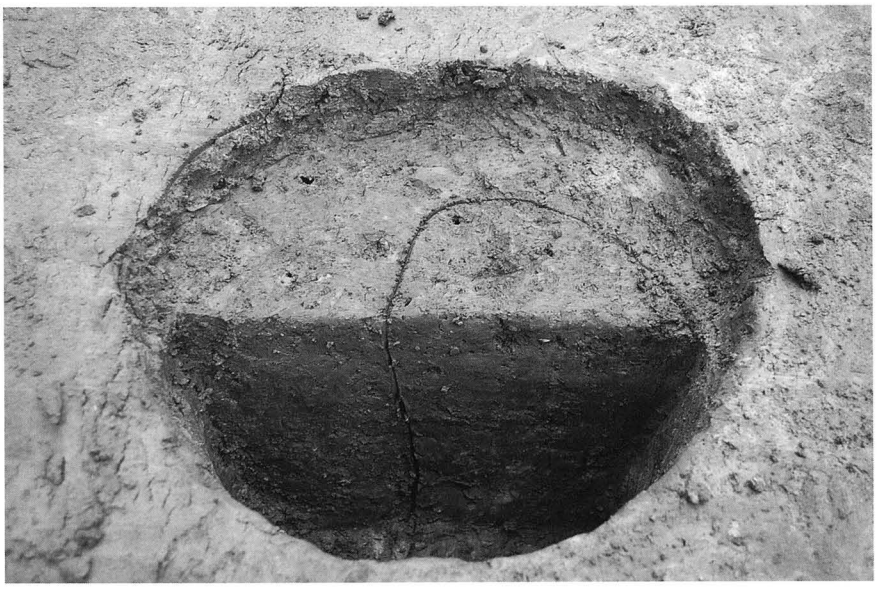
1．Ⅱ層上面検出北側（北から）

2．Ⅱ層上面検出南側（北から）

3．完掘状況（南西から）

写真図版８　遺構検出・完掘状況

1．P1・2断面（東から）



2．P6断面（東から）

3．P12断面（南から）

写真図版９　ピット断面（1）

1．P15断面（西から）

2．P16断面（東から）

3．P12断面（北から）

写真図版10　ピット断面（2）

1．調査区東壁断面（西から）

2．調査区南壁断面（北から）

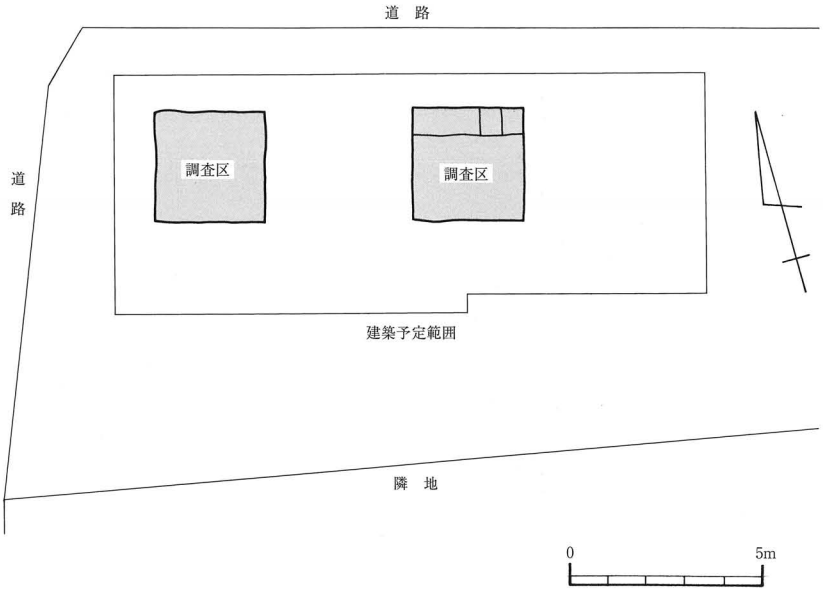
写真図版11　調査区断面状況

Ⅲ．第197次発掘調査

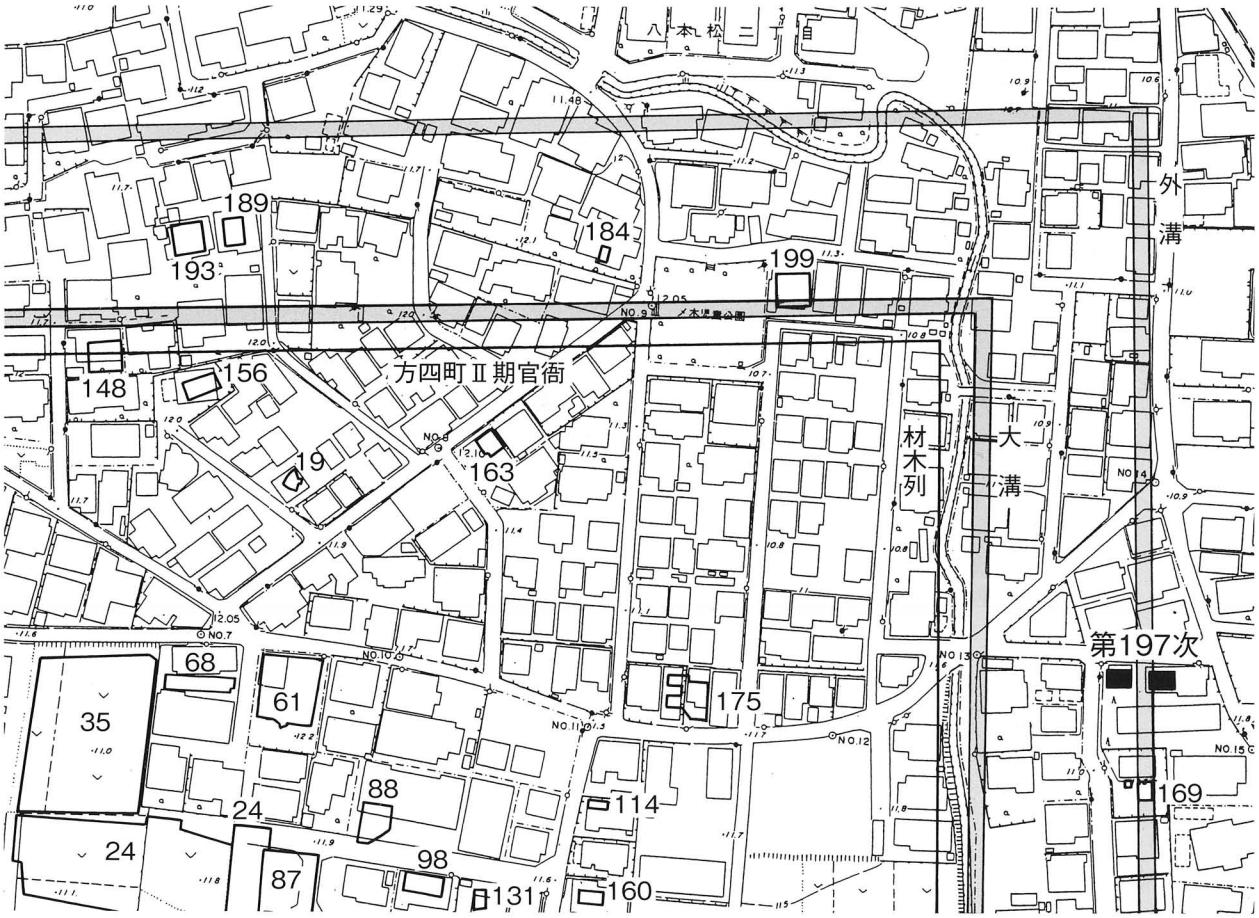
1．調査経過

第197次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成21年９月30日付で、仙台市太白区郡山４丁目231、231-7における個人住宅建築工事に係る発掘届が提出された。現地表からの深さ80～90cmの掘削を伴う工事であり、その深度まで遺構が削平されると想定されたため、調査を実施した。

調査箇所はⅡ期官衙の外溝東辺の推定ライン上に位置する。確認調査は平成21年11月30日に行い、遺構、遺物が発見されなかったため、埋め戻しを行った。



第12図　調査区配置図（S=1/200）



第13図　第197次調査区位置図（S=1/2000）

2．調査方法

調査区は当初、南北３m×東西10mに設定した。西端から重機により盛土、表土を除去したところ、工事の削平が及ぶ現地表から深さ80～90cmでは、撹乱を大きく受けていることが確認された。そのため、掘削範囲は３×３mの西トレンチと、当初の調査区東部３×３mの東トレンチとして設定し直し、掘削を行った。東トレンチでも西トレンチ同様、深さ80～90cmでは撹乱を受けていることが確認された。東トレンチは外溝東辺の推定ライン上に位置していたため、北部の一部を掘削したところ、深さ約１mで撹乱を受けていない土層が検出された。その土層の性質を把握するため、さらに部分的に調査を行った。最深部では約1.9mまで掘削を行ったが、遺構、遺物は全く発見されなかった。調査区の平面、断面について写真撮影を行い、土層については柱状図を作成した。

3．基本層序

調査地点には盛土が１～1.2m堆積し、以下に基本層第Ⅰ層としてにぶい黄褐色の砂質シルト層が厚く堆積していた。基本層は細分され、上部のⅠa層は下層と比べ、粘性、しまりが共に弱い土層である。下層のⅠb層はやや土色が暗いほか、より粘質の強い土をブロック状に含んでいる。

4．まとめ

今回調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の外溝東辺にあたる。調査は基本的に現地表から90cmの範囲で行ったが、東トレンチでは下部で外溝が検出される可能性があったため、さらに調査を行った。その結果、溝跡は検出されず、Ⅰ層である砂質シルト層の堆積が１m以上続くことが確認された。周囲の調査で検出された土層と異なっている。他に遺構、遺物も検出されず、外溝の存在した土層が河川等により削平された可能性が考えられる。

Ⅳ．第198次発掘調査

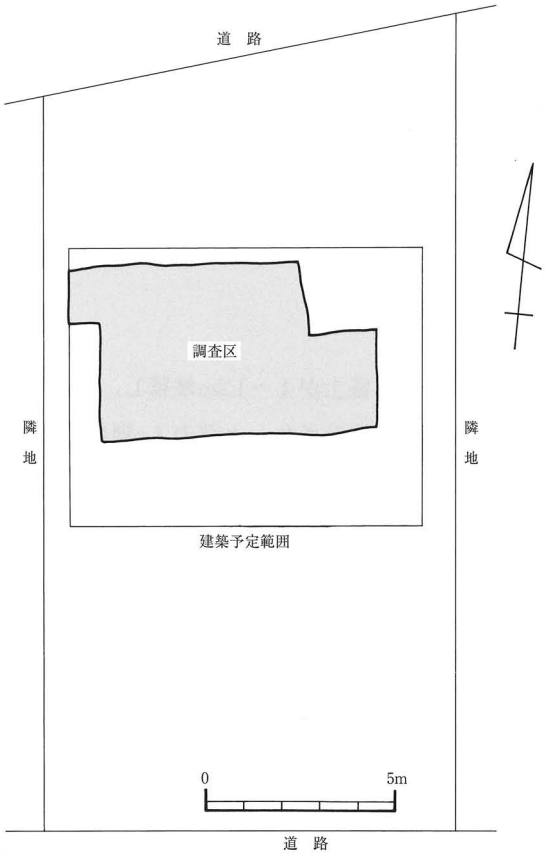
1．調査経過

第198次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成21年10月25日付で、仙台市太白区郡山３－204－15における個人住宅建築工事に係る発掘届が提出された。現地表からの深さ1.1mの掘削を伴う工事であり、遺構が削平されると想定されたため、調査を実施した。

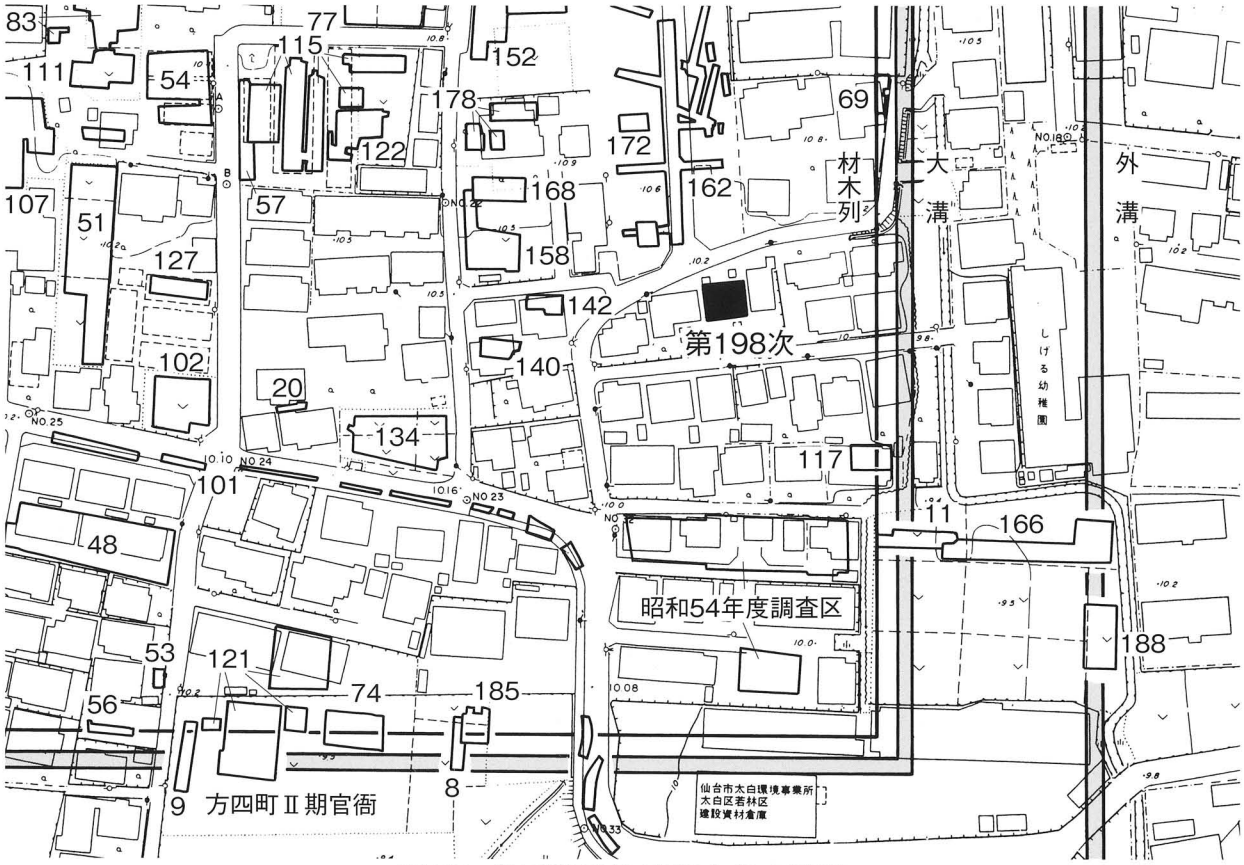
調査箇所はⅡ期官衙中枢部の東部にあたる。調査は平成21年12月２日に着手した。遺構の検出状況に応じて適宜調査区を拡張しながら作業を進め、12月11日に調査を終了し、埋め戻しを行った。

2．調査方法

調査区は当初、南北３m×東西７mに設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、精査を行った。その結果、土坑が２基並んで検出され、その北半が調査区外へ延びていたため、調査区北部を南北２m×東西４mの範囲で拡張した。土坑、ピットは完掘し、写真、図面作成を行った。また、当初の調査区設定範囲のほぼ全域にわたり北東－南西方向の溝跡が検出された。溝に直交して幅80cmの範囲を掘り下げたと



第14図　調査区配置図（S=1/200）



第15図　第198次調査区位置図（S=1/2000）

ころ、３条の溝跡が重複していること、これらの深さが工事の行われる深度のGL-1.1mより深いことが明らかとなった。これ以下の遺構は保護されることから、溝跡を完掘する箇所は一部に留め、他は削平される深度までの調査とし、写真、図面作成を行った。なお、遺構の検出状況からさらに西側へ拡張を行っている。

３．基本層序

調査地点には盛土が30～50cm堆積し、以下に耕作土であるⅠ層が20～40cm堆積している。Ⅰ層は細分され、上部のⅠa層は比較的均質なにぶい黄褐色の砂質シルト層である。下部のⅠb層は下層の土を多量に巻き上げているため、土色、土質とも下層の影響を強く受けている。Ⅱ層は明黄褐色の粘土質シルト層であり、この上面が遺構検出面である。

４．遺構と遺物

今回の調査では土坑３基、柱穴１基、溝跡５条、ピット６基が検出された。全てⅡ層上面の検出である。

SK2221土坑

調査区中央に位置し、SK2222土坑に東接して検出された。南北1.7m、東西1.8mのやや不整な円形を呈する。深さは約40cmであり、断面形状は逆台形を呈するが、深さ20cmで壁面の傾斜が変化し、下部が52～68°で立ち上がるのに対し、上部は40～49°と比較的緩やかに立ち上がる。検出時には土坑中央部が直径1mの円形の範囲で、周囲と明確に異なる堆積土として確認でき、その堆積土を掘り下げた結果、桶の底板と木枠が検出された（写真図版15-1、2)。桶内の堆積土は３層に分層され、検出時に中央部で円形に確認できた第１層はしまりのない褐色の砂質シルトで、耕作土のⅠ層に類似する。第３層は底板直上に１～２cmの厚さで堆積しており、しまりの強い粘土層である。また、第４層として底板の下部に４～５cmの厚さで粘土層が堆積していた。桶埋設時の掘方埋土は５、６層の２層に区分される。第５層が掘方の大半を占め、下部に第６層が堆積している。また、土坑底面は桶の木枠底面にあたる部分が窪み、木枠設置面が変質したと考えられる粘土層が堆積しており、第７層とした（同写真図版４)。

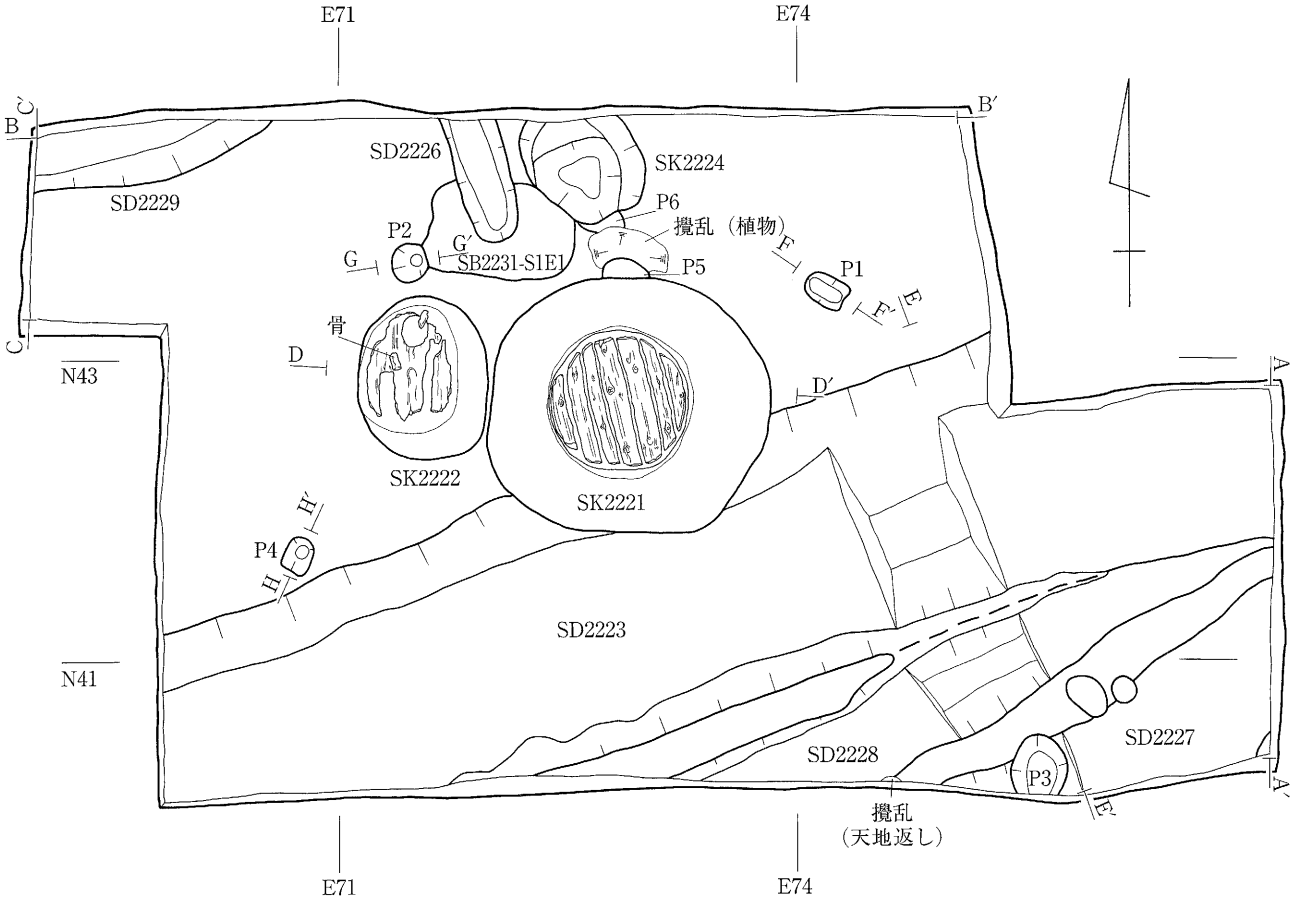
桶については、７枚の底板で構成され、それぞれ４～５cmほどの厚さを有する（写真１、２)。木枠上部は残りが悪く、薄く掘方埋土に貼り付いている状態であったが、下部は部分的に２～３cmほどの厚さを有していた。他の出土遺物としては、第１層より土師器、須恵器の小片が、桶底面下部の第４層より肥前陶器のI-56灰釉碗の小片が出土したほか、掘方埋土の第５層からI-58擂鉢片（第18図１）や土師器、須恵器の小片が出土している。また、重複関係としては、南部でSD2223溝跡を切っている。

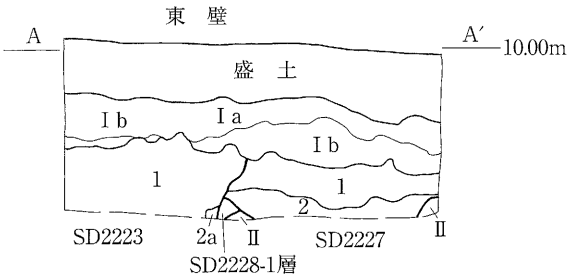
SK2222土坑

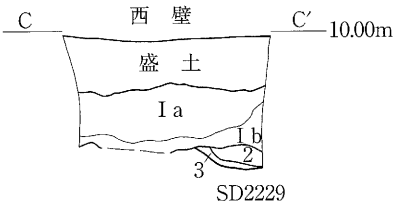
調査区中央に位置し、SK2221土坑の西に隣接して検出された。南北1.1m、東西0.85mの楕円形を呈する。深さは約20cmあり、断面形は扁平な蒲鉾型を呈する。SK2221土坑と同様、検出時に南北0.85m、東西0.65mの楕円形の範囲で明確に周囲との堆積土の違いが確認され、掘り下げたところ、南部が三叉状に分かれて残存した木板が検出された。また周囲の堆積土との境から、木片が少量検出されており、SK2221土坑と同様桶が埋設されていた可能性が考えられる。木板上の堆積土は１層のみで、SK2221土坑の第１層と非常に類似している。木板下部にも５～６cmの厚さでシルト質粘土層が堆積していた。また、木板埋設時の掘方埋土は３、４層の２層に区分される。出土遺物は第１層から土師器小片が出土したほか、木板直上より長さ10cm、太さ５cmほどの骨と炭化材が１点ずつ見つかっている。また、掘方の第３層よりN-134煙管の吸口（同図２）と須恵器片が出土した。

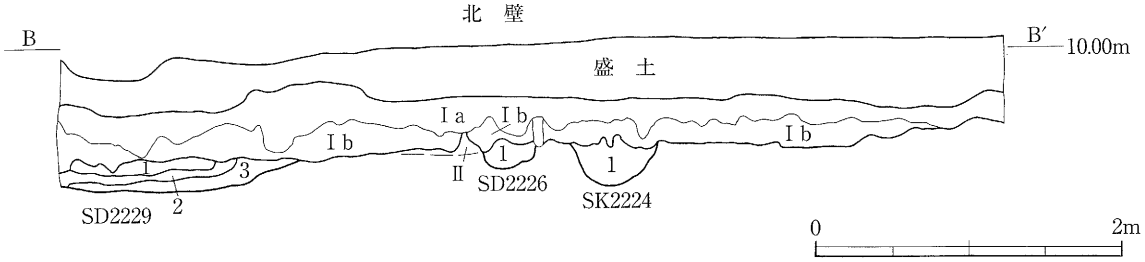
SK2224土坑

調査区北端でSD2226溝跡と並んで検出され、北部は調査区外へ延びている。検出された範囲では直径約70cmの不整な円形を呈しているが、SD2226溝跡と並行して北部へ延び、溝状を呈する可能性も考えられる。断面形はU



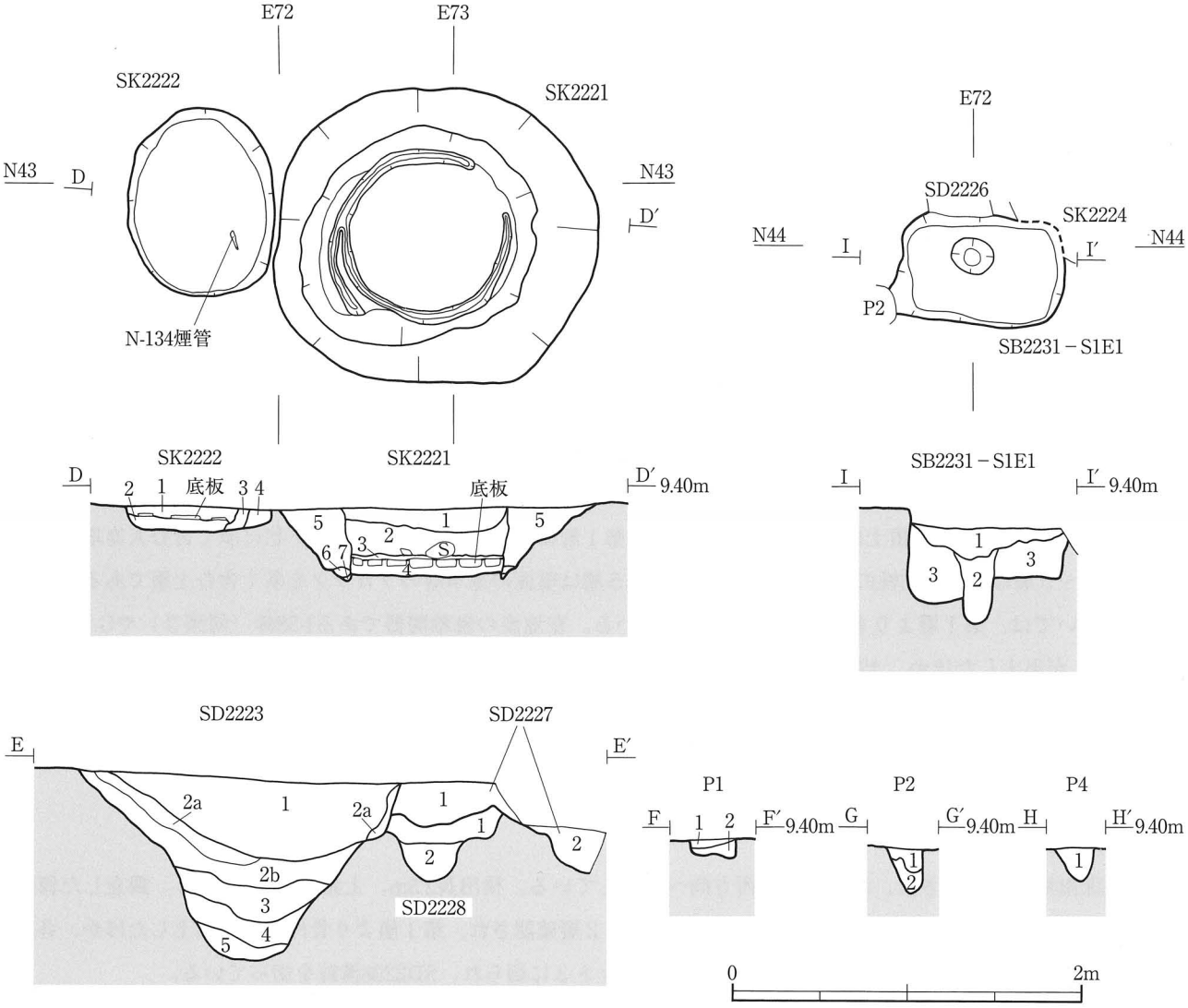






	層位	色　調	土　質	備　考
基本層	Ⅰ	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	耕作土、炭化物粒微量
	Ⅰb	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	耕作土、下層ブロック極多量
	Ⅱ	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄多量
SD2229	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒極多量
	2	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄少量、にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト粒微量
	3	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	酸化鉄少量、マンガン粒やや多量

第16図　調査区平・断面図（S=1/50）



	層位	色　調	土　質	備　考
SK2221	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	マンガン粒やや多量、粘土粒少量、しまりがあまりない、耕作土の流入か
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量、礫が混入
	3	10YR4/1　灰色	粘土	砂粒を含む
	4	2.5YR4/2　暗灰黄色	粘土	崩落土、水分を多量に含み泥化
	5	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土、マンガン粒上部に多量、Ⅱ層ブロック微量、下部ほど粘土粒を多く含む
	6	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	掘方埋土、マンガン粒少量
	7	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
SK2222	1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	マンガン粒やや多量、しまりがあまりない
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	崩落土
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	掘方埋土、マンガン粒やや多量、明黄褐色（10YR6/8）シルトブロック少量
	4	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	掘方埋土、マンガン粒上部に多量、明黄褐色（10YR6/8）シルトブロック少量（3層より多い）
SB2231 S1E1柱穴	1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	抜取穴堆積土、Ⅱ層ブロックやや多量
	3	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	1層より粘土粒多量、Ⅱ層ブロック極多量（下部ほどブロックの割合が多い）
SD2223	1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色（10YR6/8）砂質シルトブロックが部分的に集中、炭化物粒少量、マンガン粒やや多量
	2a	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒やや多量、明黄褐色（10YR6/8）砂質シルトブロック少量
	2b	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰黄褐色（10YR5/2）シルト粒少量
	3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒少量、粘性が非常に強い
	4	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	炭化物粒微量、酸化鉄やや多量、暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土ブロックやや多量、シルト粒少量
	5	10YR3/1　黒褐色	粘土	酸化鉄粒やや多量、マンガン粒微量、にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土ブロック多量
SD2227	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒多量
	2	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	浅黄色（2.5Y7/3）シルトブロックが壁際に分布
SD2228	1	10YR3/2　黒褐色	粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒やや多量、にぶい黄色（2.5Y6/4）粘土質シルト粒少量
	2	10YR3/2　黒褐色	粘土	マンガン粒やや多量、にぶい黄色（2.5Y6/4）粘土質シルトブロックやや多量
P1	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量、Ⅱ層ブロックやや多量
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅱ層ブロック多量
P2	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒やや多量、Ⅱ層ブロック少量
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	
P4	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒少量、マンガン粒やや多量、Ⅱ層ブロック多量
P5	1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、マンガン粒やや多量、Ⅱ層粒少量
P6	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒やや多量、Ⅱ層ブロック多量

第17図　遺構平・断面図（S=1/40）

字形を呈し、深さは20～30cmで南部が１段低くなっている。堆積土は暗褐色のシルト質粘土層１層のみで、基本層のⅡ層をブロック状に少量含んでいる。１層中より土師器小片が少量出土した。南西部でSB2231掘立柱建物跡のS1E1柱穴を切っている。

SD2226溝跡

調査区北端でSK2224土坑と並んで検出され、北部は調査区外へ延びている。南北へ縦走する溝跡で、方向はN-23～24°-Wである。検出長は約80cm、上幅35cm、下幅20cmを測り、断面形は不整形なU字形、深さは20cmである。堆積土はSK2224土坑の１層と同一のシルト質粘土層である。遺物は出土していない。南部でSB2231掘立柱建物跡のS1E1柱穴を切っている。

SD2223溝跡

調査区南半を北東から南西方向へ斜走する溝跡で、方向はN-62°-Eである。検出長7.7mで上幅1.85m、下幅40cmを測り、深さは1.1mである。断面形はV字形を呈するが、北側では深さ40cmで壁面の傾斜が変化し、下部は67°で立ち上がるが、上部は42°と緩傾斜になる。南側はほぼ同一の深さで段をもち、下部は53～65°で立ち上がり、上部は73°と急傾斜になる。堆積土は大別5層に区分され、第１層は基本層のⅡ層をブロック状に多く含む人為堆積土である。３～５層は非常に粘性の強い粘土層であり、第５層は壁面の基本層のブロックを多く含む土層である。出土遺物については、第１層より多量の遺物が出土している。在地産の無釉陶器であるI-58鉢（同図３）やG-132平瓦（同図４）が出土したほか、土師器片では口縁部と底部の境に段を有する坏や甕、須恵器片では壺や甕などが出土している。また、鉄滓も出土している。第５層からは、G-131平瓦（同図５）が出土した。この瓦は凸面が斜格子叩きされたものであるが、SD2227溝跡の第１層から出土した破片と同一個体である。遺構の重複関係は、北部でSK2221土坑に切られ、南部でSD2227、SD2228溝跡を切っている。

SD2227溝跡

調査区南東隅で検出され、北東から南西方向へ斜走している。検出長2.5m、上幅約90cmである。調査した箇所が一部のため、下幅や断面形状は不明である。堆積土は２層確認され、第１層より骨片や歯が出土したほか、各層より土師器片が出土した。重複関係はSD2223溝跡とピット３に切られ、SD2228溝跡を切っている。

SD2228溝跡

調査区南東部で検出された、北東から南西方向へ斜走する溝跡で、方向はN-52°-Eである。検出長約３m、上幅約60cm、下幅20cmであり、深さは約40cmである。断面形は下部がU字状を呈し、上部は南側で段を有している。北側はSD2227溝跡との重複関係で不明であるが、南側同様段を有していた可能性が考えられる。堆積土は２層確認され、第１層より土師器片少量のほか、陶器片が１点出土した。この陶器片は後述するI-59壺と同一個体の可能性が考えられる。遺構の重複関係は北側をSD2223溝跡に、南側をSD2227溝跡に切られている。

SD2229溝跡

調査区北西隅で検出され、北東から南西方向へ斜走している。検出長約1.7m、深さ15～20cmであるが、調査区外へ延びているため、幅や断面形状は不明である。堆積土は３層に区分される。

SB2231掘立柱建物跡

調査区北部で柱穴が1基検出された。不整な隅丸長方形を呈し、南北60cm、東西約90cmを測る。掘方の深さは50～60cmであり、西半が深くなる。柱痕跡は掘方の北寄りに位置しており、直径が南北で20cm、東西で25cmの円形である。深さは約40cmであり、掘方より10cm以上沈んでいる。堆積土は３層確認され、第１層上面では柱痕跡は確認されていない。第１層を除去した段階で柱痕跡が検出され、柱痕跡の堆積土を第２層とし、基本層のⅡ層をブロック状に非常に多く含む、柱痕跡周囲の粘土質シルト層を第３層とした。第２層は粘性が強く、しまりの弱い暗褐色粘土層で、Ⅱ層をブロック状に少量含んでいる。出土遺物としては各層から土師器小片が確認されたほか、

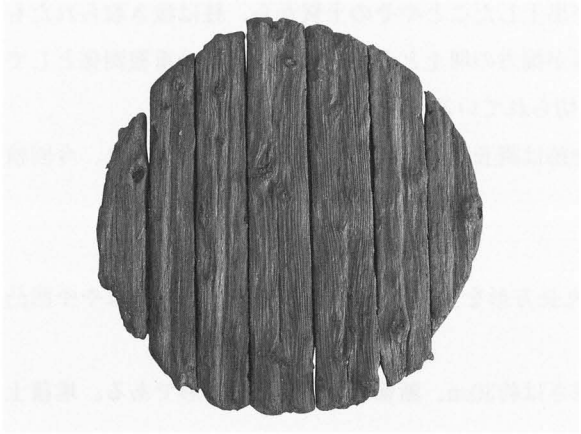


写真１　SK2221出土桶形木棺底板表面（上が北）

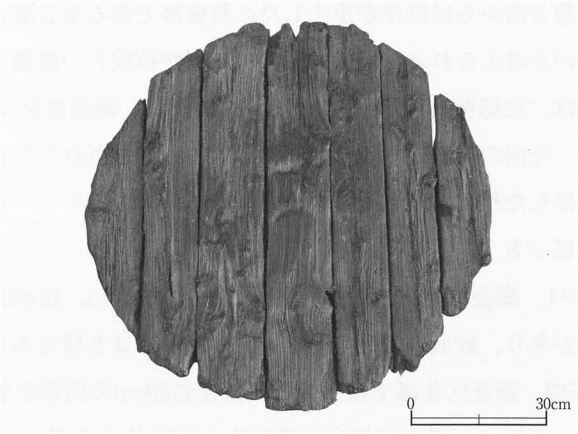
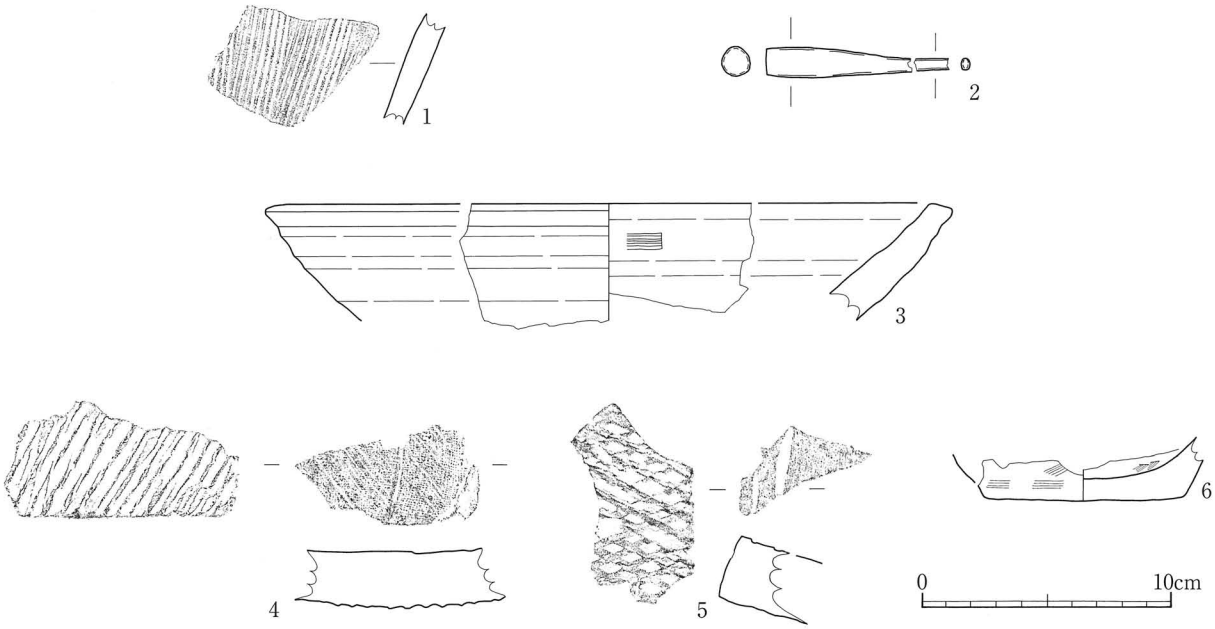
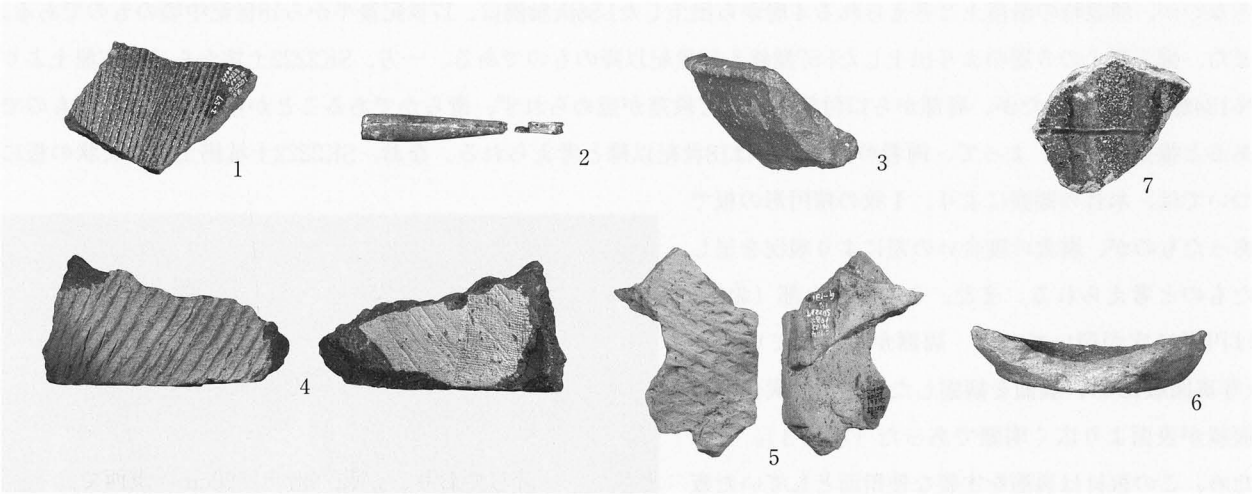


写真２　SK2221出土桶形木棺底板裏面（上が北）





図No.	写真No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴
1	1	I-57	SK2221・5層	陶器・擂鉢	不明	鉄釉　砂粒・石英・長石を含む　在地産か?
2	2	N-134	SK2222・3層	銅製品・煙管（吸口）	残存長7.4 肩部径1.1 吸口径0.4	
3	3	I-58	SD2223・1層	陶器・鉢	口径27.4（推定）	在地産　無釉　外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ→ヘラナデ　砂粒・石英を含む
4	4	G-132	SD2223・1層	平瓦	厚さ2.0～2.2	凹面：布目痕、すり消し　凸面：縄目叩き　砂粒・石英・白色粒・白針を含む
5	5	G-131	SD2223・5層 SD2227・1層	平瓦	厚さ2.5	凹面：布目痕　凸面：格子叩き　砂粒・石英を含む
6	6	C-1009	SD2227上面	非ロクロ土師器・甕	底径8	内外面：ヘラナデ　底部：ヘラナデ　砂粒・石英・白色粒を含む
-	7	I-59	Ⅰ層	陶器・壺	不明	常滑産?　緑釉　沈線1条

第18図　出土遺物（S=1/3）

第３層からは鉄滓が出土した。柱痕跡である第２層より遺物が出土したことやその土質から、柱は抜き取られたものと考えられる。そのため、第１層が抜取穴の堆積土、第３層が掘方の埋土と考えられる。遺構の重複関係としては、北部をSK2224土坑とSD2226溝跡に、南西部をピット２に切られている。

今回の調査で柱穴が北部で１基のみ確認されたことで、建物跡は調査区の北側へ延びるものと考えられ、今回検出した柱穴は南東隅のものと推定される。

ピット

P1　調査区北東部で検出され、長軸約30cm、短軸20cmの隅丸長方形を呈する。深さは約15cm、底面はやや凹凸があり、断面形は不整形である。堆積土は２層である。

P2　調査区北部で検出され、直径約20cmの円形を呈する。深さは約30cm、断面形は細長いU字形である。堆積土は２層で、SB2231掘立柱建物跡のS1E1柱穴を切っている。

P3　調査区南端で検出され、東西約35cm、南北40cm以上の楕円形を呈するが、南部が調査区外に延びているため、正確な規模は不明である。深さは約25cmあり、堆積土は暗褐色粘土層1層である。SD2227溝跡を切っている。

P4　調査区西部で検出され、長軸25cm、短軸20cmの隅丸長方形を呈する。深さは20cm、断面形はU字形である。堆積土は１層であり、土師器小片が出土している。

また、ピット５は深さ２、３cmの浅い小ピットであり、ピット６はSK2224土坑と植物のカクランに切られており、規模、形状は不明である。

遺構外出土遺物としては、耕作土のⅠ層より土師器小片や鉄滓が出土したほか、常滑産と推定されるI-59壺（同図７）が出土した。12世紀後半代の壺であり、沈線が１条認められることから三筋壺の可能性が高い。

５．まとめ

今回調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙中枢部の東部にあたる。検出された遺構について、調査区中央で２基並んで検出されたSK2221、SK2222土坑は近世墓である。SK2221土坑は検出された桶を棺とした正円形の桶形木棺墓であり、SK2222土坑についても、桶が埋設された可能性があること、検出時にSK2221土坑と同様、円形のプランが検出されたことから桶形木棺墓である可能性が高い。SK2221土坑からは副葬品は出土せず、時期の特定ができないが、埋設時の崩落土と考えられる４層から出土したI-56灰釉碗は、17世紀後半から18世紀中頃のものである。また、掘方埋土の５層中より出土したI-57擂鉢も18世紀以降のものである。一方、SK2222土坑からは掘方埋土よりN-134煙管が出土したが、肩部から口付部にかけて段差が認められず、滑らかであることから18世紀以降のものであると推定される。よって、両者の埋葬時期は18世紀以降と考えられる。なお、SK2222土坑出土の三叉状の板については、木目の観察により、１枚の楕円形の板であったものが、腐食の度合いの差により現況を呈したものと考えられる。また、この板の上部（北側）は円形に穴が開いており、周囲が炭化していたが（写真図版15-6）、裏面を観察したところ、炭化部の面積が表面より広く明瞭であった（写真３）。そのため、この板材は裏面を主要な使用面としていた板を、転用材として棺の底板に用いた可能性が高いと考えられる。

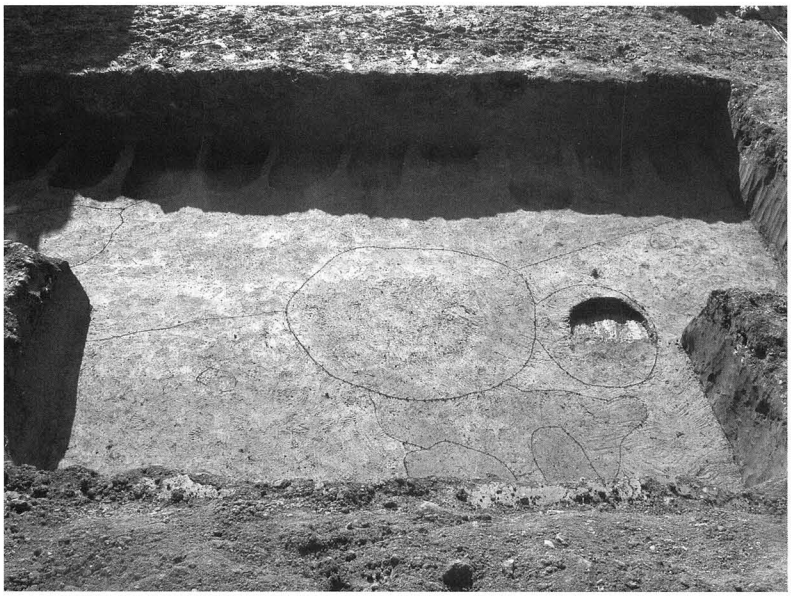
写真3　SK2222出土板材炭化部（裏面）

また、調査区北部で検出されたSK2224土坑、SD2226溝跡については、両遺構の堆積土とほぼ同

一の暗褐色のシルト質粘土が、調査区北壁断面で確認されたⅠb層中に多量に含まれていた。そのため、調査区北部には、両遺構の堆積土に近似した土層が耕作土として当初堆積しており、後の耕作によりこの土層が撹拌された可能性が高いと考えられる。そしてこの両遺構は、撹拌される以前の暗褐色シルト質粘土層が堆積していた時期の耕作に関連する遺構と考えられる。

他に検出されたSD2223、SD2227、SD2228、SD2229溝跡については、遺構の時期を特定できる遺物は出土しておらず、詳細な年代は不明である。特にSD2223、SD2227、SD2228溝跡は調査区南部で重複関係のある溝跡である。最も新しいSD2223溝跡の第１層から出土した遺物には、土師器片、須恵器片のほか、無釉陶器のI-58鉢が含まれる。この鉢は13世紀後半から14世紀前半の年代と考えられ、器形からは仙台市宮城野区洞ノ口遺跡などで出土する在地産の片口鉢と同様のものである。また、最も古いSD2228溝跡の1層からは土師器小片と共に12世紀後半代の陶器片が出土している。これら遺物の出土状況や土層の堆積状況を考慮すると、各溝跡の堆積土上層は遺構の機能時から長期間経過してから堆積したものと想定される。３条の溝跡の新旧関係はこの堆積土上層の重複関係から判別したものであるため、溝跡そのものの新旧関係については今後の周囲の調査も踏まえて慎重に検討する必要がある。またSD2223溝跡に関しては、今回調査地点の南西約100mに位置する第134次調査区において、同方向に斜走するSD1959溝跡が検出されている。溝の断面形態や深さが類似しており、両者の関連性を指摘しておきたい。なおSD1959溝跡は、10世紀後半以降とされたSB1935掘立柱建物跡を切り、出土遺物に陶磁器類を含まないことから、古代末期の可能性が高いことが指摘されている。

また、SB2231掘立柱建物跡は調査区の北側へ延びることが確実と考えられるが、柱穴１基しか検出されなかったため、建物の規模、構造は不明である。S1E1柱穴からは時期比定可能な遺物は出土しておらず、遺構の詳細な年代は明らかにできなかった。



1．遺構検出状況（北から）

2．遺構掘削状況（北から）

3．SD2223、2227、2228検出状況（西から）

写真図版12　調査区全景

1．調査区北壁断面

2．調査区東壁断面（A－A′）

3．調査区西壁断面（C－C′）

写真図版13　調査区壁断面

1．木棺内部堆積土半裁（南から）

2．木棺検出状況（南から）

3．完掘状況（南から）

写真図版14　近世墓１（SK2221、2222土坑）

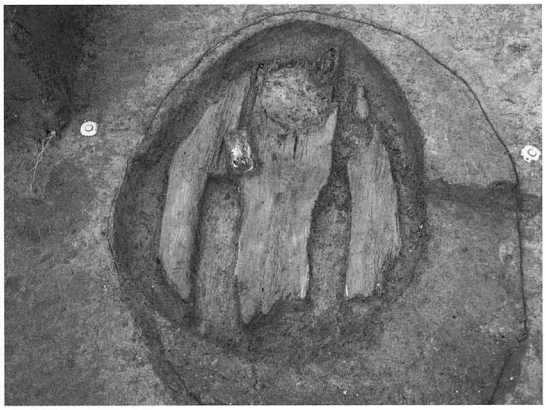
1．SK2221木棺内部堆積土断面（南から）

2．SK2221桶形木棺検出状況（南から）

3．SK2221掘方断面（南から）

4．SK2221　７層堆積状況（南から）

5．SK2222木棺内部断面（南から）

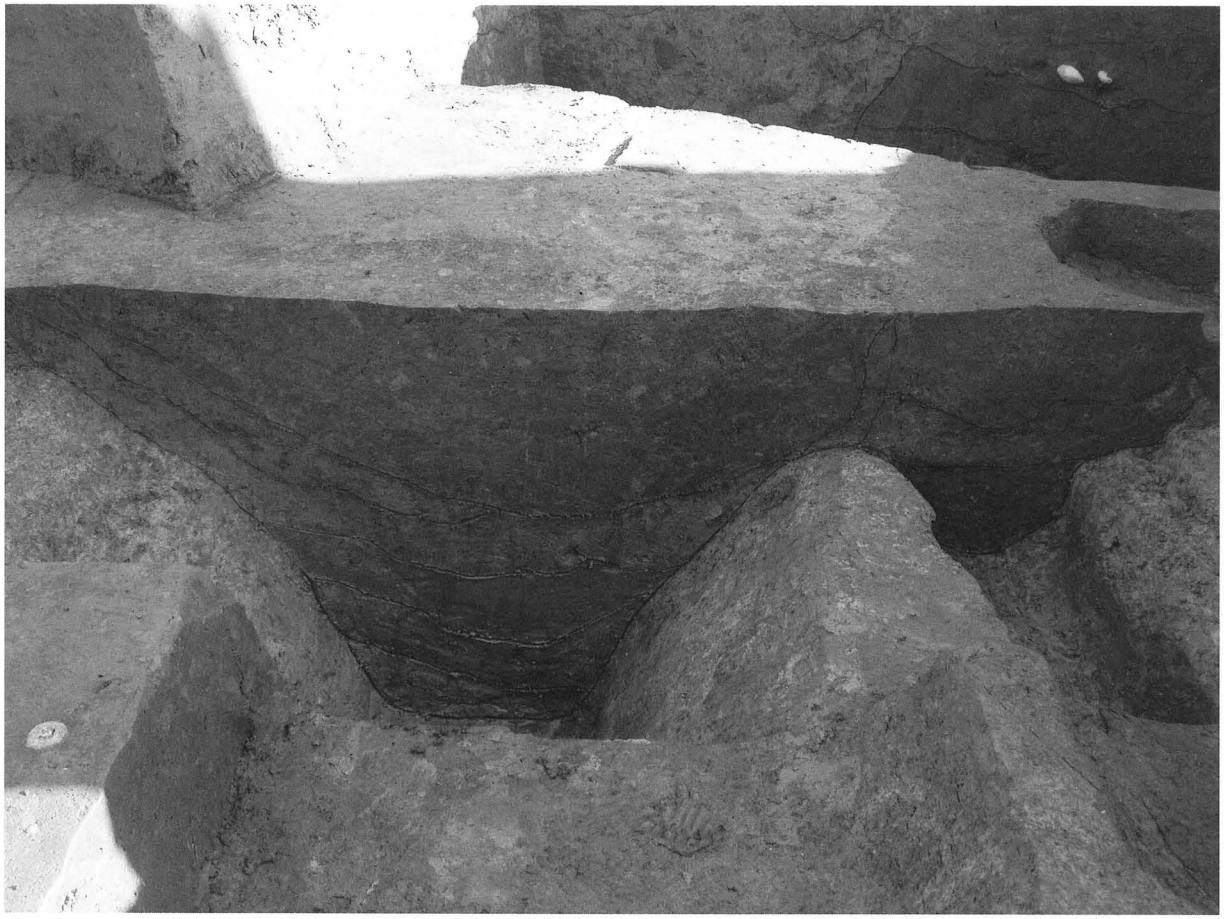


6．SK2222木棺底板検出状況（南から）

7．SK2222掘方断面（南から）

8．N-134煙管出土状況（南から）

写真図版15　近世墓２（SK2221、SK2222土坑）



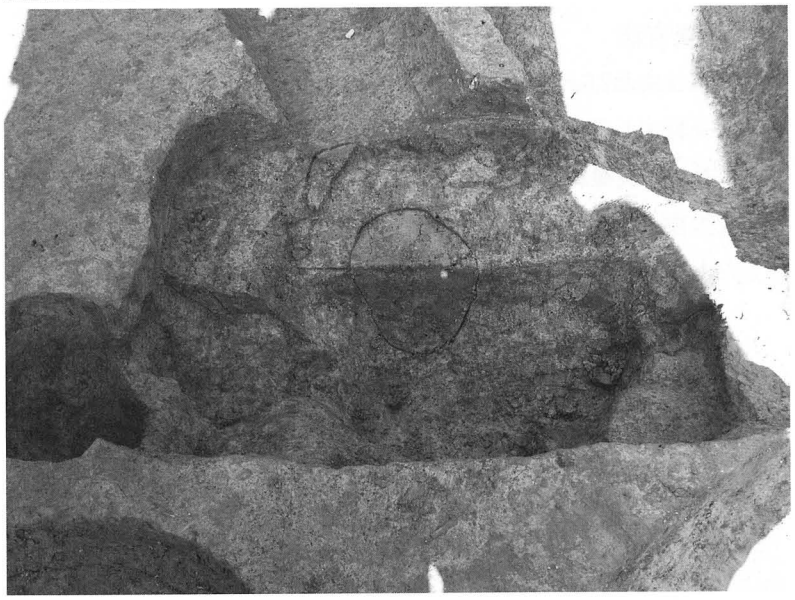
1．SD2223、2228断面（西から）

2．SD2229検出状況（南から）

3．SD2229完掘状況（南から）

写真図版16　溝跡調査状況

1．S1E1柱穴検出状況（南から）



2．柱痕跡検出状況（南から）

3．S1E1柱穴掘方断面（南から）

写真図版17　SB2231掘立柱建物跡

Ⅴ．第199次発掘調査

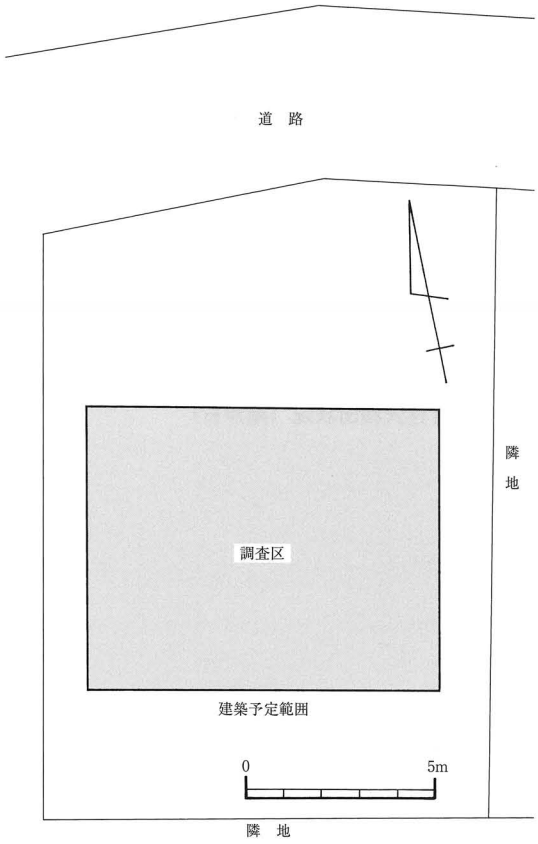
１．調査経過

第199次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成21年10月５日付で、仙台市太白区郡山３－51－41における個人住宅建築工事に係る発掘届が提出され、遺構が失われるため、調査を実施した。

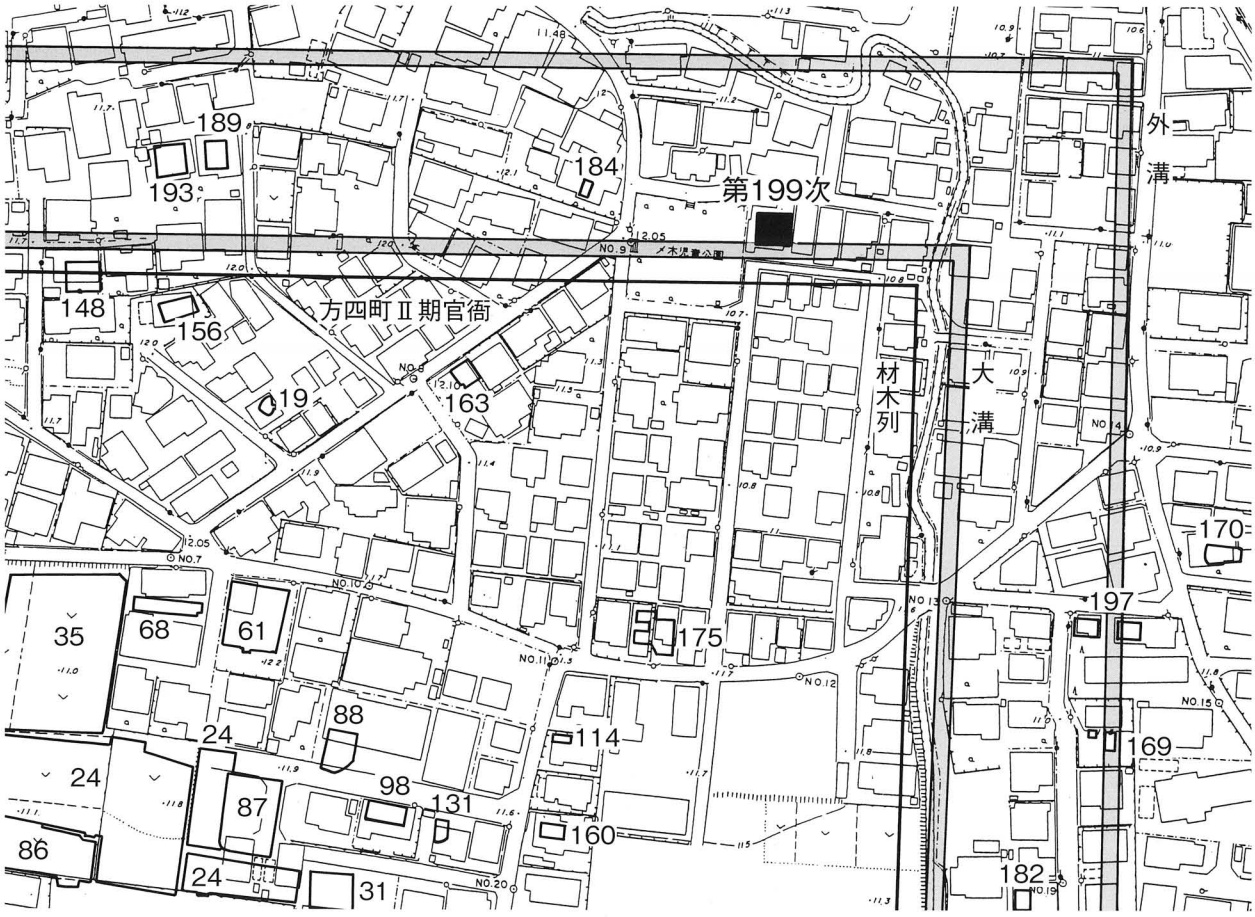
調査箇所は方四町Ⅱ期官衙を区画する大溝北辺の東部にあたる。調査は平成21年12月14日に着手し、重要な遺構が検出される可能性があったため、重機掘削による排土は場外搬出を行った。12月16日に図面作成等の調査を終了、18日に場外搬出した排土を再び運搬して埋め戻した。

２．調査方法

調査区は南北7.5m×東西9.3mに設定した。重機により盛土、耕作土を除去し精査した結果、調査区南端で溝跡が1条検出された。検出写真撮影後、溝跡を調査し改めて全景写真を撮影した。その後、測量用基準点を移動し、調査区内のグリッドを設定した上で、1/20で平、断面図を作成した。



第19図　調査区配置図（S=1/200）



第20図　第199次調査区位置図（S=1/2000）

3．基本層序

調査地点には盛土が50～80cm堆積しているが、下部10～20cmは旧耕作土がブロック状に多量に含まれている。Ⅰ層は耕作土であり、調査区南部において部分的に堆積している。Ⅱ層は黄褐色の砂質シルト層であり、この上面が遺構検出面である。

4．遺構と遺物

今回の調査では溝跡１条が検出された。

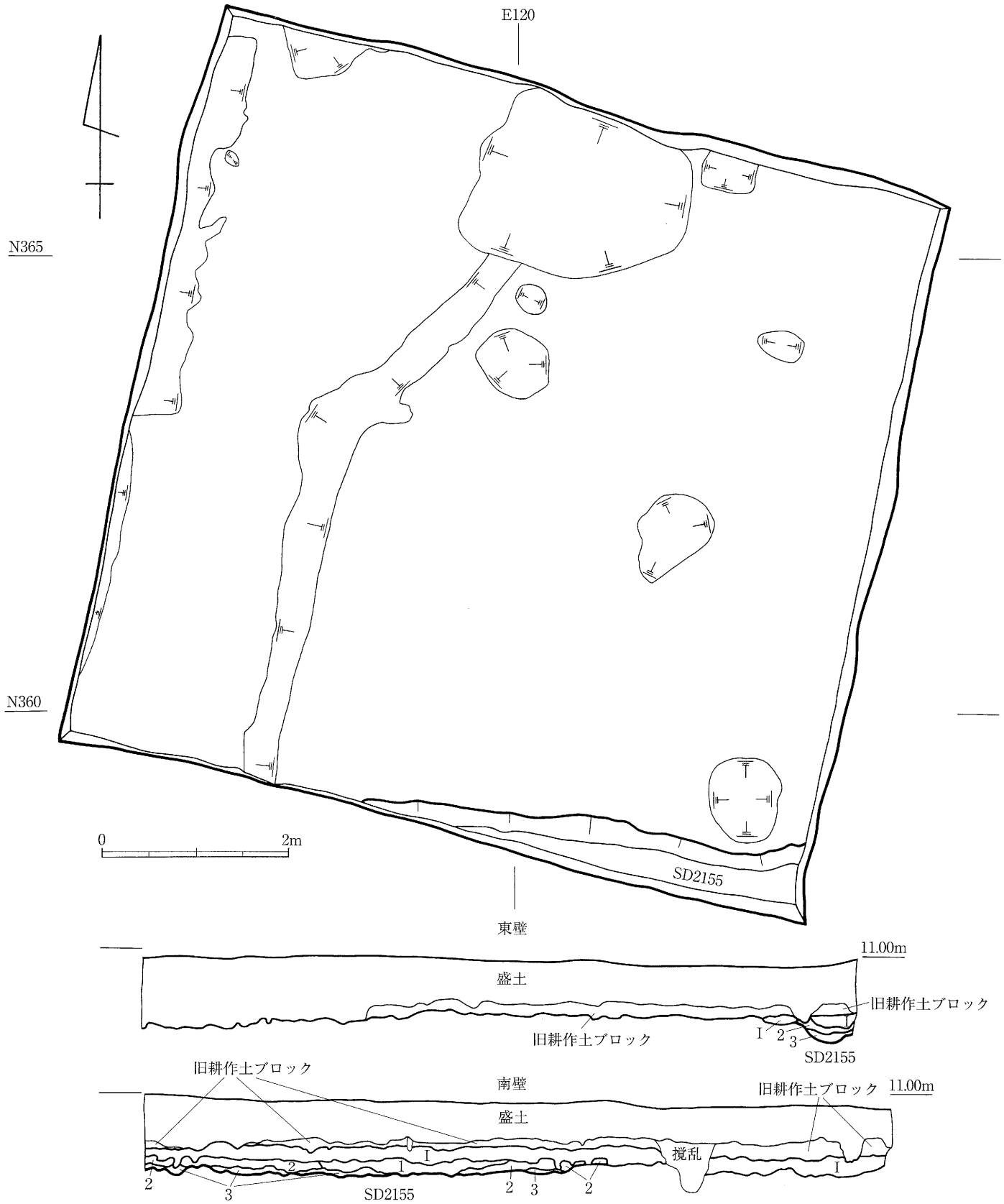
SD2155溝跡

調査区南端で検出された。東西方向に延びる溝跡で、検出長約５m、深さ20cmであるが、溝の南縁が調査区外のため、幅、断面形状の詳細は不明である。方向は溝の北縁からE-1°-Sと推定される。堆積土は３層確認され、第１層が砂質シルト、第２、３層はシルト質砂層である。第３層には粘土がブロック状に多く含まれている。また、溝底面には酸化鉄の集積が確認された。遺物については、堆積土の第２層と基本層Ⅰ層の層理面より土師器小片１点と、第３層中より土師器甕の小片１点が出土したのみである。

遺構外出土遺物としては、撹乱中より須恵器甕の体部片が出土したほか、Ⅱ層上面検出時に土師器片少量と19世紀前半の大堀相馬産の黒釉鍋の破片が出土している。

5．まとめ

今回調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙を区画する大溝の北辺東部に位置する。調査の結果、当初の想定通り調査区南端において、東西方向に延びる溝跡が検出された。方向もほぼ真東西方向であり、方四町Ⅱ期官衙の北辺となる大溝と考えられる。溝の深さが20cmと浅く、上部は大きく削平されたものと考えられる。他地点での調査事例として、今回調査地点の西方約220mに位置する第79次調査区では、標高約11mで大溝が検出されている。今回の検出面の標高は10.3mであり、検出面がかなり低いことが窺える。なお、両者の溝跡底面の標高を比較すると、第79次調査区東壁ではSD617A溝跡の底面が10.2m、今回調査地点では10.1mであり、10cm程の高低差が認められる。



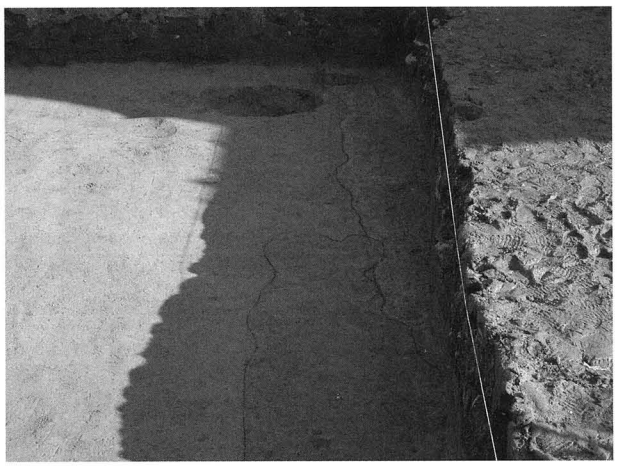
層位	色調	土質	備考
I	10YR5/8 黄褐色	砂質シルト	耕作土、マンガン粒やや多量、下層ブロック極多量
II	10YR5/8 黄褐色	砂質シルト	酸化鉄微量、粘土粒を含む
SD2155-1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物粒微量、酸化鉄粒やや多量、粘土ブロック少量
SD2155-2	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト質砂	酸化鉄粒やや多量
SD2155-3	2.5Y6/3 にぶい黄色	シルト質砂	酸化鉄粒少量、にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土ブロックやや多量、暗褐色（10YR3/3）シルト質粘土ブロック少量

第21図　調査区平・断面図（S=1/60）

1．遺構検出状況（西から）

2．遺構完掘状況（西から）

写真図版18　調査区全景



1．SD2155検出状況（西から）

2．SD2155検出状況（東から）

3．SD2155完掘状況（西から）

4．SD2155断面（調査区東壁）

5．調査区南壁断面

写真図版19　遺構調査状況・断面

第３章　大野田官衙遺跡

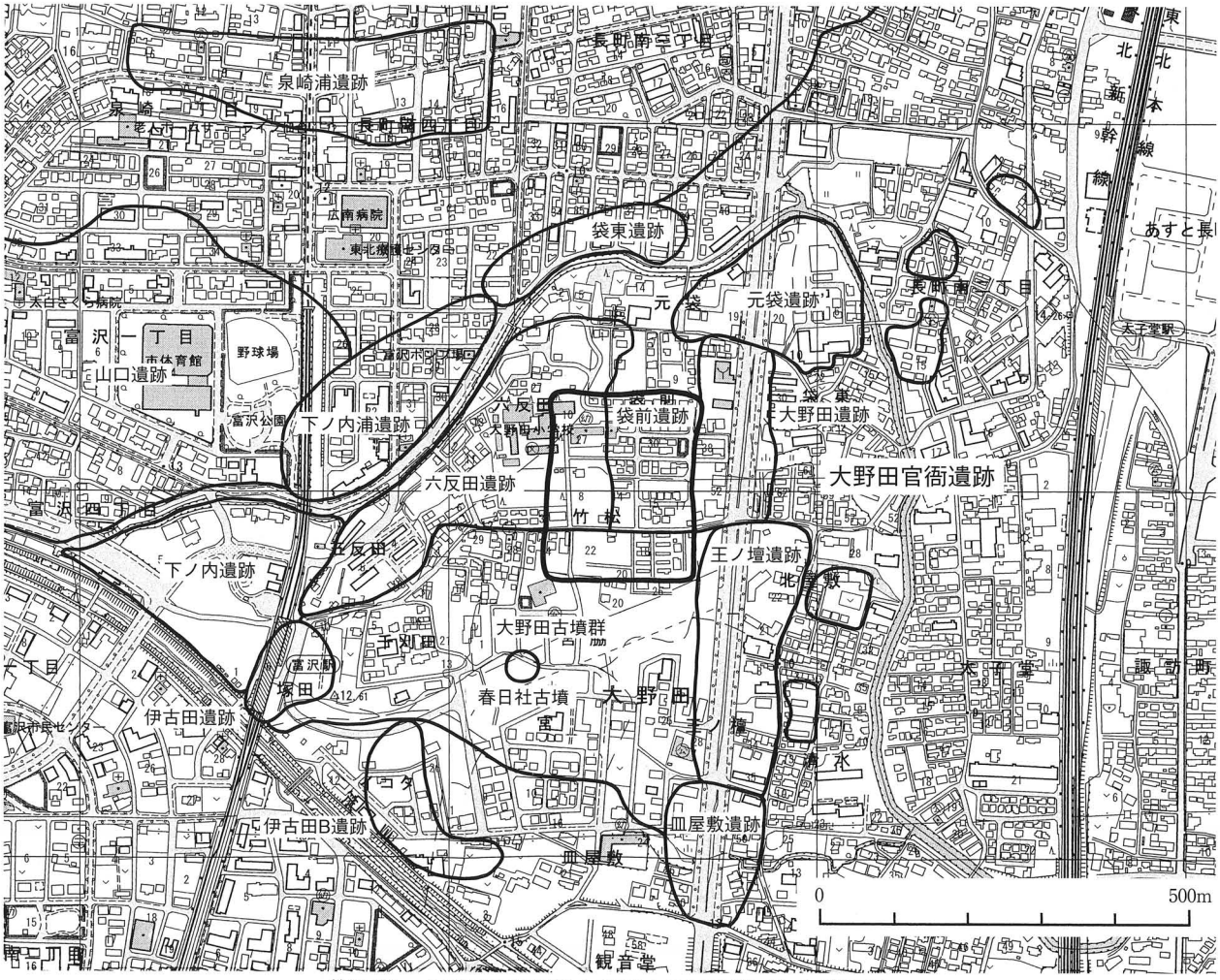
Ⅰ．大野田官衙遺跡の調査計画と実績

１．これまでの調査経過

これまでの大野田古墳群、六反田遺跡、袋前遺跡での発掘調査で、溝跡に囲まれた大型の掘立柱建物跡が６棟発見されている。建物跡は、いずれも桁行が真北方向の南北棟で、配置から溝跡に区画された中に３列の建物列が想定されている。そのうち複数棟が検出されている東列（SB31、121、135）と西列（SB64、464）の存在は確実と考えられた。これらの建物跡が特徴的なのは、総柱建物跡２棟（SB64、121）と桁行が10間となる側柱建物跡２棟（SB135、464）が含まれていることである。

これらの建物跡が真北方向を向いていることや、規則的に配置されていること、建物の規模に一定の規格性があること、さらに東列と西列で総柱建物跡と側柱建物跡がほぼ対象になっていることなどから、古代の官衙と考えられるようになった。しかし官衙としてどのような機能を負ったものなのかは、明らかになっていない現状である。それは「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う発掘調査が、道路部分を中心に年次の異なる調査であったため、遺構が発見されても、遺構の全容を把握するための調査や遺構配置を想定した調査が実施できなかったためである。それを補完するため、文化庁、宮城県教育庁文化財保護課と協議の上、平成20年度から国庫補助事業の計画を一部変更して調査を実施するようになっている。

また平成21年７月に大野田古墳群、六反田遺跡、袋前遺跡で発見されている官衙関連の遺構を、大野田官衙遺跡として登録している。



第22図　大野田官衙遺跡と重複する遺跡群（S=1/10000）

2．調査計画

発見されている官衙関連遺構の範囲と構造を明らかにし、官衙の年代、機能を明らかにすることを目的として、官衙南部（a、f区）、官衙内部中央（b、c区）、官衙内部建物西列（d、e区）の約1,000㎡を調査する予定を立てた。これはこれまでに明らかになっていない官衙中央部と、建物西列の様相の把握に主眼を置いていたものである。

とくに官衙中央部では、想定したような南北棟の建物による中央列が存在するのか、あるいは東西棟の建物が存在し主要な殿舎の検出につながる可能性も考えられたからである。

しかし当初予定したd、e、f区では、調査をすることが出来なかった。d、e区では隣接する道路部分での調査と連動した調査を予定していたが、道路部分での調査が今年度以降になったためである。f区については、敷地の形状、ならびに堀による段差などの関係で、隣接地との間で配慮すべき点が派生したためである。今後は周囲での調査状況、成果に合わせて、あらためて調査の実施を検討して行くことにする。

なお区画整理に伴う道路部分での調査で、官衙の西辺となる溝跡が２箇所で検出されたことから、追加調査としてg区の調査を実施した。また官衙中央の様相把握のためh、i区を、官衙の広がりを確認するためj区をさらに追加することとした。

3．遺跡概要

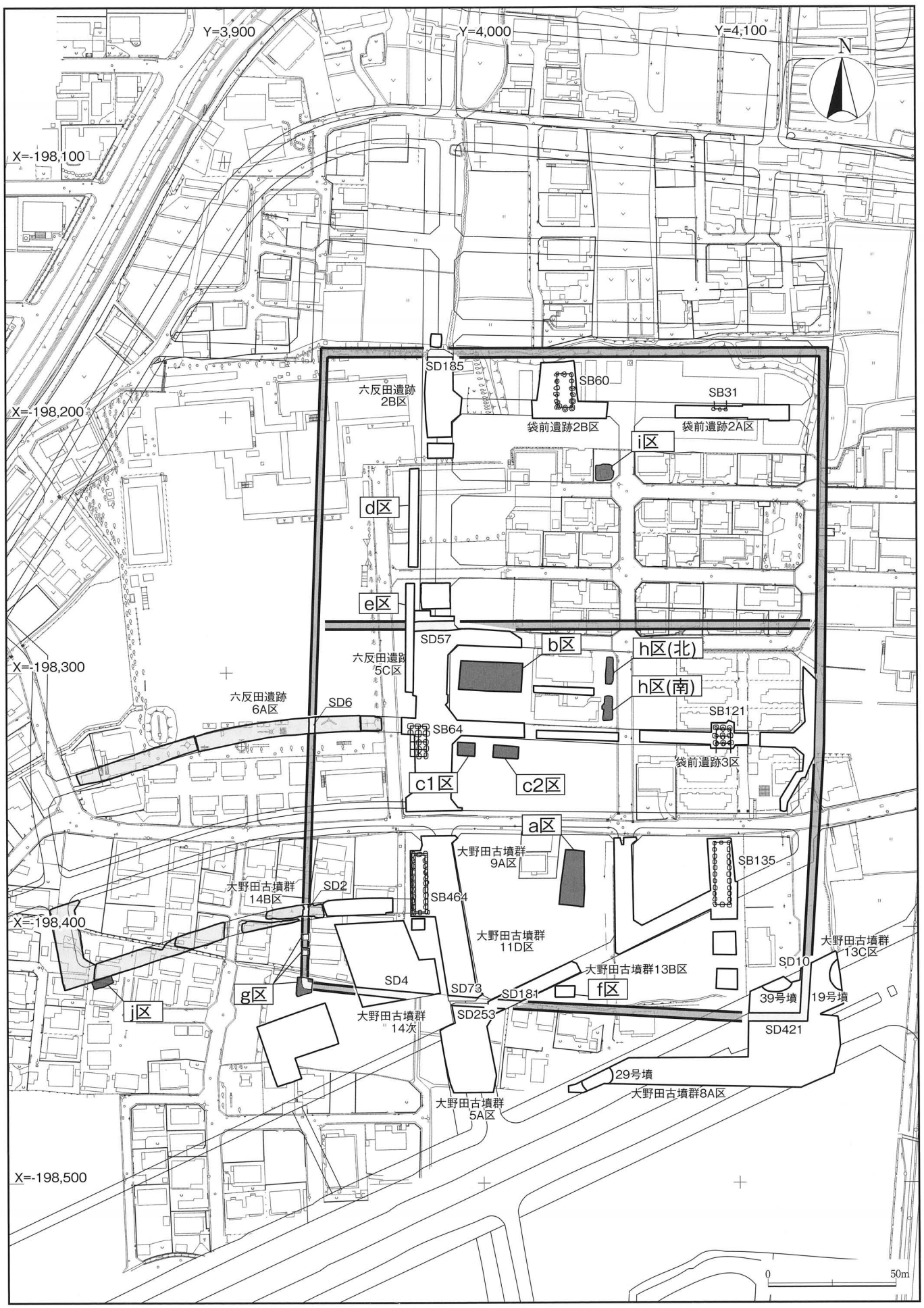
(1) 地理的環境

大野田官衙遺跡は仙台市南東部の太白区大野田に所在し、市営地下鉄南北線富沢駅の北東400mに位置している。遺跡周辺の地形について、西方では奥羽山脈の東麓から派生する青葉山丘陵が延び、その丘陵縁を断層の長町－利府線が区切っている。その丘陵を貫流する形で名取川、広瀬川が東流しており、丘陵部では４～５段の段丘面が形成される。また、丘陵の東方では両河川の沖積作用により宮城野海岸平野が形成される。平野部のうち、両河川と長町－利府線で囲まれた部分は特に郡山低地と呼ばれ、名取川及び笊川などの支流河川により形成された自然堤防と後背湿地からなっている。笊川は名取川の北側を蛇行しながら東流しており、現在は富沢駅の北西約300mの地点で新笊川と旧笊川に分岐している。本遺跡はこの新、旧笊川に挟まれた地点にあり、旧笊川が大きく南へ流路を変える地点の南岸の自然堤防上に立地している。

(2) 歴史的環境

本遺跡周辺では後期旧石器時代より遺跡が形成される。西方の丘陵部では、河岸段丘上に山田上ノ台遺跡や川添東遺跡が立地し、ナイフ形石器が出土している。上ノ原山遺跡では川崎スコリア層の下層からも石器が出土しており、後期旧石器時代前半の可能性が指摘されている。一方、沖積地でも後期旧石器時代から遺跡が形成されている。本遺跡の北西に広がる富沢遺跡からは石器だけでなく、当時の森林跡や、焚火跡と考えられる炭化物の集中部が発見された。また昆虫遺体や動物の糞なども出土し、当時の環境を知る上で貴重な情報が得られている。

縄文時代としては早期から集落が形成される。丘陵部では川添東遺跡や北前遺跡などで早期末の竪穴住居跡が検出され、沖積地では本遺跡の西約200mの下ノ内浦遺跡で早期前半の竪穴住居跡が検出されている。また前期では、丘陵部の三神峯遺跡において前期初頭の集落跡が発見されたほか、前期末までの遺物を含む包含層も確認され、土偶など豊富な遺物が出土している。中期には、低位段丘上に立地する上野遺跡から竪穴住居のほか、貯蔵穴と考えられているフラスコ状土坑群や豊富な遺物が出土している。また山田上ノ台遺跡では中期末葉の竪穴住居跡が38軒検出されており、大規模な集落が形成されていたことが明らかとなっている。中期末葉から後期中葉にかけては、本遺跡周囲でも集落跡が発見され、多量の遺物が出土している。本遺跡の西約300mの下ノ内遺跡では中期末葉の集落跡が発見された。この集落の竪穴住居跡には敷石住居も含まれており、周辺地域との関連を考える上で注目さ



第23図　大野田官衙遺跡調査区配置図（S=1/2000）

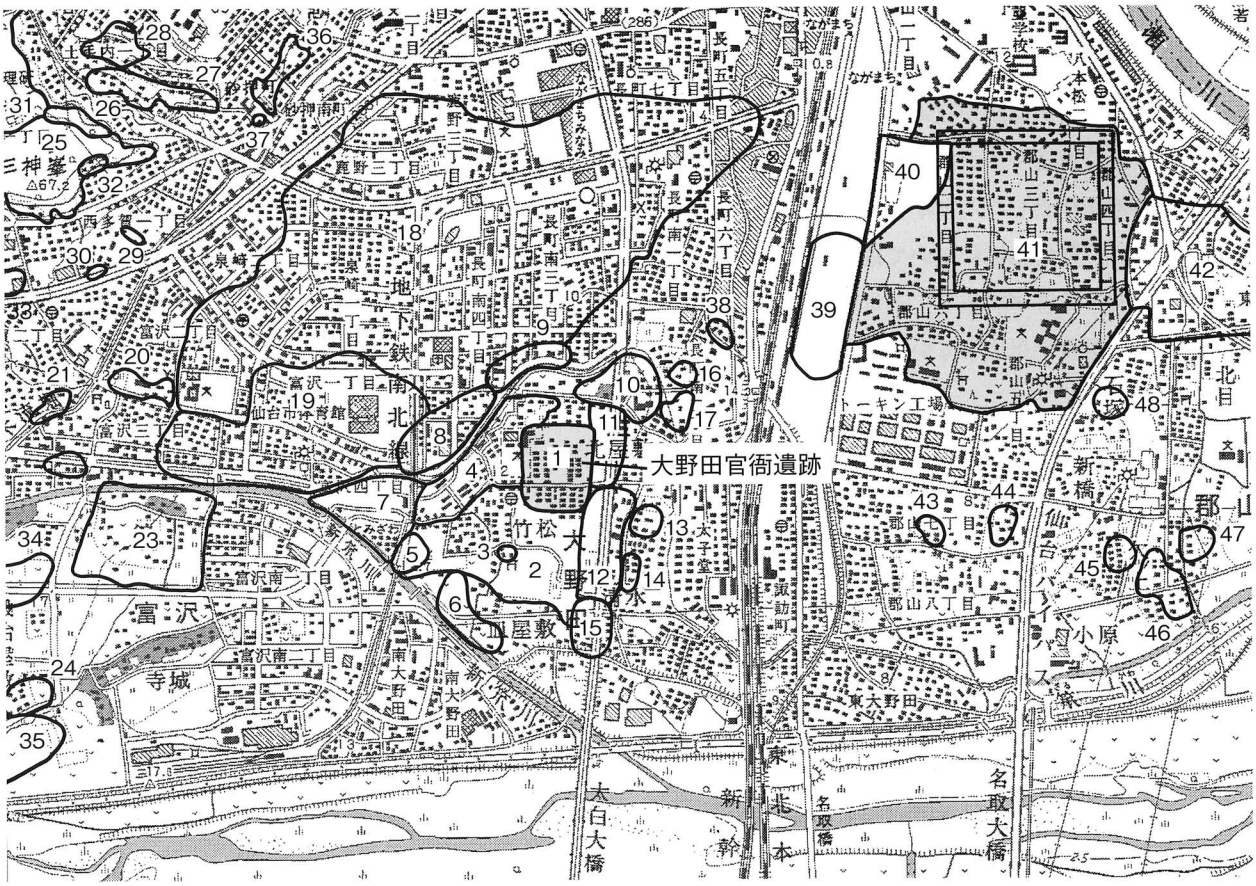
れる。また、本遺跡の西部で遺跡範囲が重複する六反田遺跡では、中期末から後期初頭を中心とした集落跡と遺物包含層が確認され、多量の遺物が出土している。下ノ内浦遺跡では後期前葉の配石墓群が検出されている。さらに、本遺跡に東接する大野田遺跡では同時期の配石遺構群が検出されたほか、270点以上の土偶や硬玉製垂飾品など多数の祭祀関連遺物が出土した。その他、本遺跡の南東で接する王ノ壇遺跡や南西約400mの伊古田遺跡では後期前、中葉の土器や土偶が出土している。後期後半以降は遺構、遺物が減少し、竪穴住居跡もほとんど検出されなくなるが、郡山低地では本遺跡の北東約1.5kmの郡山遺跡において、後期後葉の遺構と遺物、晩期後半の土器が出土している。

弥生時代では引き続き遺跡数が少ないが、郡山遺跡では前期、中期の土器が出土したほか、中期中頃以前とされる水田跡が検出されている。また、郡山遺跡に西接する西台畑遺跡や長町駅東遺跡からは、中期の土器棺墓、土坑墓群が検出されており、当時の葬制を考える上で重要な遺跡である。また、富沢遺跡からは中期以降の水田跡が幾層にも重なって検出された。以後近代まで、各時代の水田層が同様に重なって検出されており、富沢遺跡が生産域として利用され続けた様子が窺える。さらに、南接する山口遺跡でも後期の水田跡が検出されている。その他、下ノ内浦遺跡からは後期の土器棺墓、土坑墓、竪穴遺構等が検出されたほか、副葬品と考えられる石包丁が出土するなど貴重な事例が確認されている。また丘陵部では、本遺跡の北西約２kmの土手内遺跡より後期と考えられる竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代には、郡山低地や西方の丘陵裾部に古墳が多数築造される。時期別に概観すると、前期では本遺跡周囲において竪穴住居跡が検出され、居住域であったことが窺える。遺跡範囲が南部で重複する大野田古墳群や六反田遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡で竪穴住居跡が数軒ずつ検出されている。一方、丘陵裾部では原遺跡において方墳が築造されており、原遺跡や土手内遺跡、砂押古墳の墳丘下部から竪穴住居跡が検出されている。中期では、前半期は古墳が築造されておらず、５世紀後半から６世紀にかけて多数の古墳が築造される。本遺跡の南側において、大野田古墳群、六反田遺跡の範囲内に前方後円墳１基を含む44基の古墳が発見されている。特に南西約150mに位置する春日社古墳において、主体部から革盾や鉄鏃などの副葬品が発見されている。同時期には丘陵裾部でも古墳が築造され、裏町古墳、兜塚古墳、砂押古墳など主要な前方後円墳、円墳が存在するほか、三神峯古墳群や原遺跡で小規模な円墳も築造されている。また、この時期の古墳には埴輪が樹立されるが、三神峯古墳群が立地する丘陵斜面には埴輪窯である富沢窯跡も発見されている。一方集落跡としては、六反田遺跡や下ノ内遺跡、丘陵部の土手内遺跡などで竪穴住居跡が検出されている。その後７世紀になると、墓域は丘陵部に移り横穴墓が形成される。平野部では、広瀬川左岸の自然堤防上に立地する法領塚古墳や、名取川右岸の自然堤防上の安久東古墳群において横穴式石室をもつ古墳が築造される。また郡山遺跡では官衙が造営される。Ⅰ期、Ⅱ期に大別され、Ⅱ期官衙には郡山廃寺が伴っている。石組池や畿内産土師器など重要な遺構、遺物が出土し、Ⅱ期については多賀城以前の陸奥国府と考えられている。また、隣接する西台畑遺跡、長町駅東遺跡からは、関東地方と同様のカマド構造をもつ竪穴住居跡が多数検出され、関東系土師器も多数出土し、官衙造営に携わった人々の集落跡と考えられている。また本遺跡周辺は居住域だけでなく、生産域として利用されていた。富沢遺跡の水田跡のほか、古墳時代後半以降は王ノ壇遺跡や山口遺跡などで小溝状遺構群が検出され、畑地としても利用されていたことが窺える。

奈良、平安時代では本遺跡周辺において、北東約100mに位置する元袋遺跡や山口遺跡、下ノ内遺跡などで竪穴住居跡や小規模な掘立柱建物跡が検出されている。また生産域として、富沢遺跡の水田跡のほか、大野田古墳群、六反田遺跡、王ノ壇遺跡などで小溝状遺構群が検出され、下ノ内浦遺跡では畝状遺構も検出された。また、富沢遺跡で検出された奈良時代の水田跡は、真北方向を基準として区画された条里制に基づく水田と考えられる。なお、平安時代には山口遺跡でも真北方向を基準とする水田跡が検出されている。

中世では王ノ壇遺跡において、12世紀から14世紀にかけての武士の屋敷跡や同時期の幹線道路跡が検出されてい



1 大野田官衙遺跡	17 新田遺跡	33 原遺跡
2 大野田古墳群	18 富沢遺跡	34 鍛冶屋敷Ａ遺跡
3 春日社古墳	19 山口遺跡	35 六本松遺跡
4 六反田遺跡	20 富沢清水遺跡	36 砂押屋敷遺跡
5 伊古田遺跡	21 富沢上ノ台遺跡	37 砂押古墳
6 伊古田Ｂ遺跡	22 堀ノ内遺跡	38 長町六丁目遺跡
7 下ノ内遺跡	23 富沢館跡	39 長町駅東遺跡
8 下ノ内浦遺跡	24 鍛冶屋敷Ｂ遺跡	40 西台畑遺跡
9 袋東遺跡	25 三神峯遺跡	41 郡山遺跡
10 元袋遺跡	26 土手内横穴墓群　Ａ地点	42 北目城跡
11 大野田遺跡	27 土手内横穴墓群　Ｂ地点	43 的場遺跡
12 王ノ壇遺跡	28 土手内遺跡	44 籠ノ瀬遺跡
13 北屋敷遺跡	29 裏町東遺跡	45 欠ノ上Ⅰ遺跡
14 長町清水遺跡	30 原東遺跡	46 欠ノ上Ⅱ遺跡
15 皿屋敷遺跡	31 芦ノ口遺跡	47 欠ノ上Ⅲ遺跡
16 長町南遺跡	32 金山窯跡	48 矢来遺跡

第24図　大野田官衙遺跡と周辺の遺跡群（S=1/25000）

る。また、墳墓跡や火葬墓、板碑など信仰関係の遺構、遺物も検出された。生産域としては、富沢遺跡や山口遺跡、郡山遺跡の南方に位置する欠ノ上Ⅰ遺跡において水田跡が検出されている。また城館跡として、本遺跡の西約1.2kmの笊川右岸に富沢館跡が立地し、城館に伴うと考えられる溝跡が検出されている。

近世では元袋遺跡や富沢遺跡において、屋敷跡が検出されている。特に元袋遺跡では、伊達家の家紋入りの瓦や金箔瓦、漆器が出土したことから、伊達家と関係の深い家臣の屋敷跡と想定されている。さらに、富沢遺跡では長町五丁目地区、泉崎地区において近世墓群が検出されている。また本遺跡の北東約２kmの地点には、郡山遺跡に東接する形で北目城跡が所在し、近世初期の大規模な障子堀が検出され、ヒトの頭蓋骨や様々な動物遺存体、建築部材など豊富な遺物が出土している。

４．調査方法

(1) 調査方法

今年度は調査計画に準じて、官衙南部のａ区を４月20日より、官衙中央部のｂ区を４月22日より、同じく中央部のｃ区を５月18日より調査を開始した。また、区画整理事業に伴う発掘調査において、六反田遺跡6A区、大野田古墳群14B区よりそれぞれ南北方向に縦走する溝跡が検出された。官衙の建物配置や他辺での区画溝のあり方から、この南北方向の溝跡は官衙の西辺を区画するものと考えられた。この調査成果を受けて、ｇ区の調査を６月29日より行った。さらに、官衙中央部のｈ区を11月9日、ｉ区を11月19日より、官衙外の南西部のｊ区を12月7日より調査を開始した。

今回の調査は官衙関連の遺構の有無を確認する調査であるため、小溝状遺構群（註）など他の遺構は検出のみに留めている。なお官衙に関連する可能性が考えられた遺構については、土層の堆積状況や遺物の出土を確認するため、部分的に調査を行っている。

(2) 基本層序

基本層の堆積状況は調査区ごとに異なっていたが、土層の特徴や層の堆積状況から、各地点で対応すると考えられる土層Ⅰ～Ⅴ層が認められた。Ⅰ層は旧耕作土であり、各調査区で堆積している。調査区により細分されるが、最上層は現代の耕作土と考えられる。Ⅱ層は黒褐色の粘土質シルト、粘土層であり、下面の凹凸が著しい地点もあり、以前の耕作土の可能性が考えられる。Ⅲ層は酸化鉄を多く含む褐色土層であり、土質は調査区により異なっている。Ⅳ層は黒褐色の粘土質シルト、粘土層である。調査区により、やや明るい暗褐色のⅣa層と下部の黒褐色のⅣb層に細分される。下面の凹凸が著しい地点があること、下層で小溝状遺構群が検出されることから耕作土の可能性が考えられる。Ⅴ層は褐色土層であり、土質は粘土が主体を占めるが、調査区により砂質シルトの地点もある。今回の調査で検出された小溝状遺構群など、遺構の多くはこのⅤ層上面で検出されている。

なお各調査区の基本層序については、検出された土層に対し、調査区ごとに上層からⅠ層、Ⅱ層としている。全調査区で検出されたⅠ層を除く、Ⅱ層からⅤ層に対応する層については、「－層」と文中に表記した。

註　小溝状遺構群については、上幅の比較的狭い小規模な溝跡が複数条平行し、一群として捉えられるものを指す。この遺構群はこれまでの調査で耕作の痕跡であることが明らかになっているが、今回検出された溝跡のうち、同様の性格と考えられる溝跡でも、調査区内で複数条の群として認められないものに対しては、「小溝」ではなく溝跡として表記した。なお、遺物が出土した小溝や、断面図を掲載する必要がある小溝についてのみ、報告の中で個別の枝番号をつけて表記した。

Ⅱ．ａ区の調査

１．調査概要

ａ区は官衙南部の中央に位置する。官衙の建物配置として、中央列の南北棟が想定された地点である。南北22m×東西9.5mの調査区を設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、精査を行った。その結果、Ⅳ層上面で性格不明遺構と小溝状遺構群が検出された。一部で掘下げを行い、その後写真撮影と図面作成をして調査を終了した。

２．基本層序

調査地点には盛土が60～90cmあり、それより下にⅠ～Ⅳ層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作土である。Ⅱ層は土色、土質の変化により細分される。上層のⅡa層は黒褐色の粘土質シルト層であり、「Ⅱ層」（註）に相当すると考えられる。マンガン粒を多量に含む層であり、しまりが非常に強い。Ⅱb層は暗褐色のシルト質粘土層であり、「Ⅲ層」に相当すると考えられる。Ⅲ層も土色、土質の変化により細分される。Ⅲa層は暗褐色のシルト質粘土層であり、「Ⅳa層」に相当すると考えられる。下層のⅢb層は黒褐色の粘土層であり、「Ⅳb層」に相当すると考えられる。Ⅳ層は褐色の粘土層であり、「Ⅴ層」に相当する遺構検出面である。

３．遺構と遺物

Ⅳ層上面において、性格不明遺構１基、小溝状遺構群３群、ピットが検出された。

SX4性格不明遺構

調査区北西部に位置し、西端部は調査区外へ延びている。直径５mの円形を呈し、深さは約30cmである。堆積土は粘土層が５層確認された。第５層からは土器細片と考えられる粒子状の混入物が微量に検出された。さらに第１層から土師器小片が数点出土した。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群１、３に切られ、小溝状遺構群５を切っている。

小溝状遺構群１

調査区を北東から南西方向へ斜走する溝跡群で、８条検出された。上幅約30cmで、方向はN-8～10°-Eである。堆積土については、調査区南壁の断面観察の結果、Ⅲb層と同質である。ａ区で検出された遺構では最も新しいものである。

小溝状遺構群３

調査区を南北方向に縦走する溝跡群で、10条検出された。上幅20～30cmで、方向はN-0～27°-Wとばらつきが認められる。小溝状遺構群１に切られ、SX4性格不明遺構、小溝状遺構群５を切っている。

小溝状遺構群５

調査区を東西方向に横断する溝跡群で、17条検出された。上幅20～30cmで、方向はE-6°-SからE-10°-Nまでである。調査区北部では条数が少なく、方向が真東から南へ振れるのに対し、南部では密集しており、方向が真東から北へ振れているため、別の小溝状遺構群として区分されるものも含まれる可能性がある。a区で検出された遺構では最も古いものである。

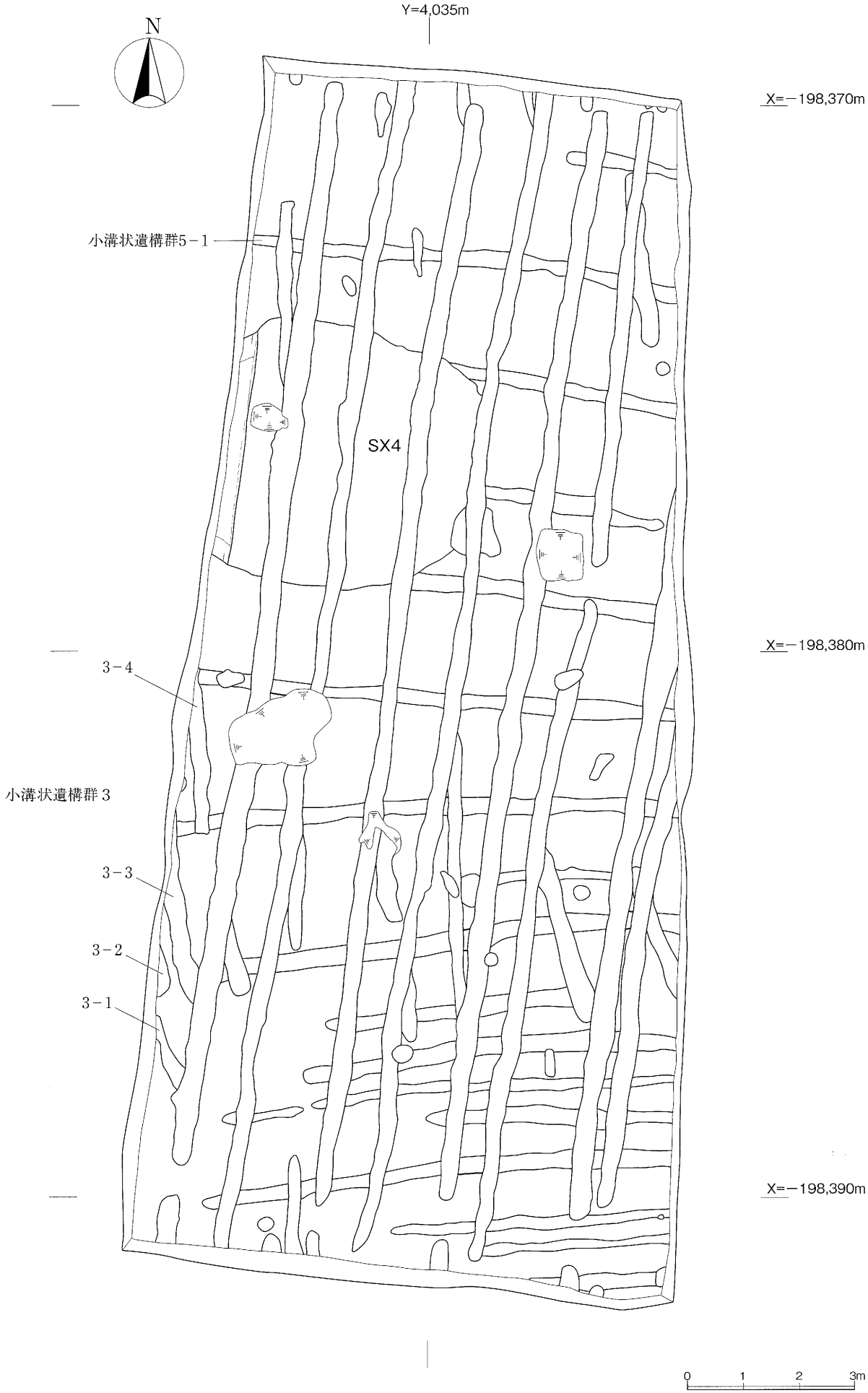
また、調査区内で検出されたピットについては、堆積土が小溝状遺構群のものと類似している。遺構外の出土遺物としては、Ⅳ層上面より土師器小片が少量出土している。

４．まとめ

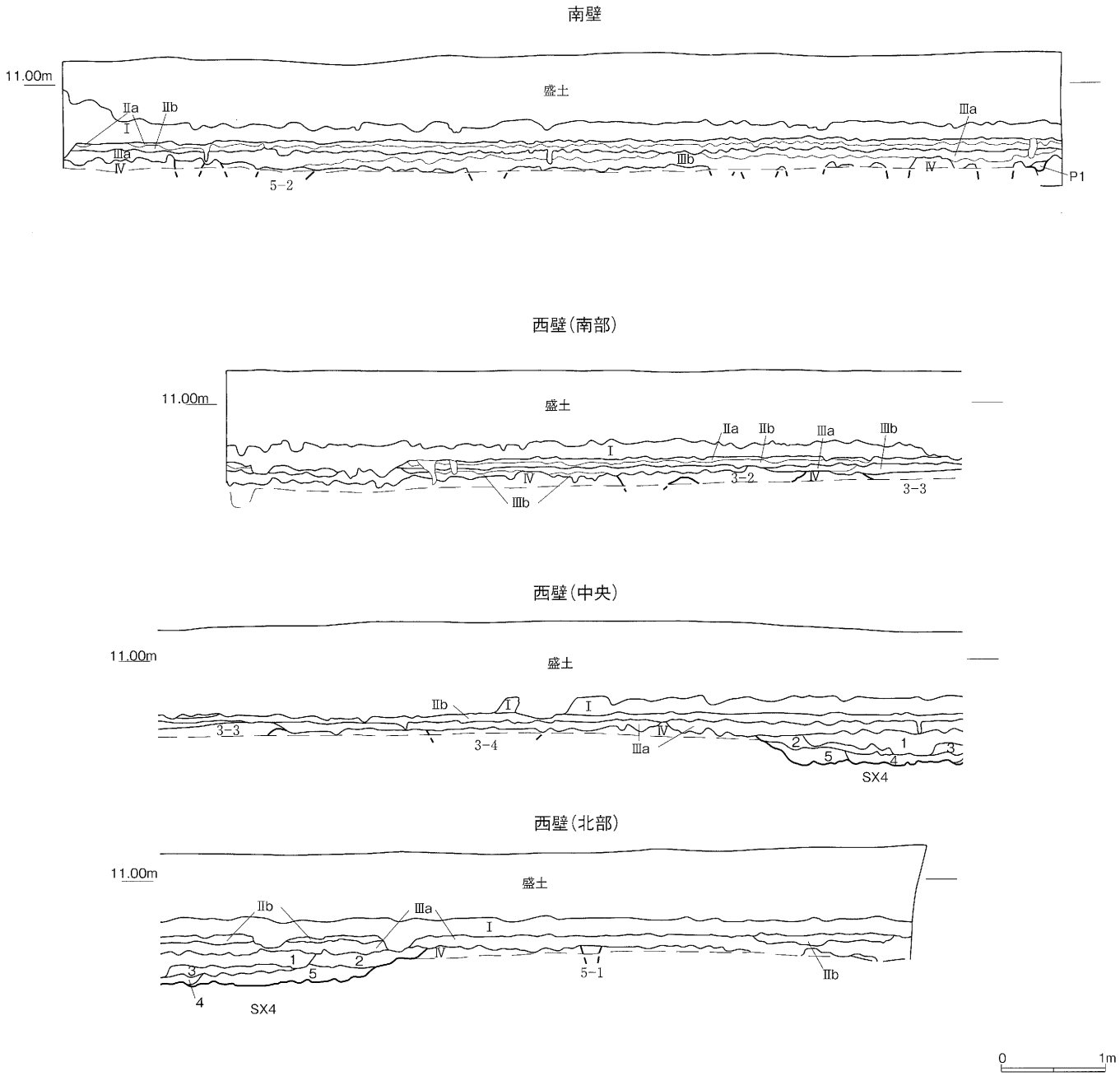
調査の結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。ａ区において、東列、西列と対応する中央列南部の南北棟は存在しないことが明らかとなった。

なお、SX4性格不明遺構については、貼床などが認められず、遺物の出土も極めて少ないことから、竪穴住居跡ではないと考えられる。遺構の年代についても不明である。

註「　」内はⅠ-4（2）の「基本層序」で示した基本層位である。以下、各区の調査についても同様である。

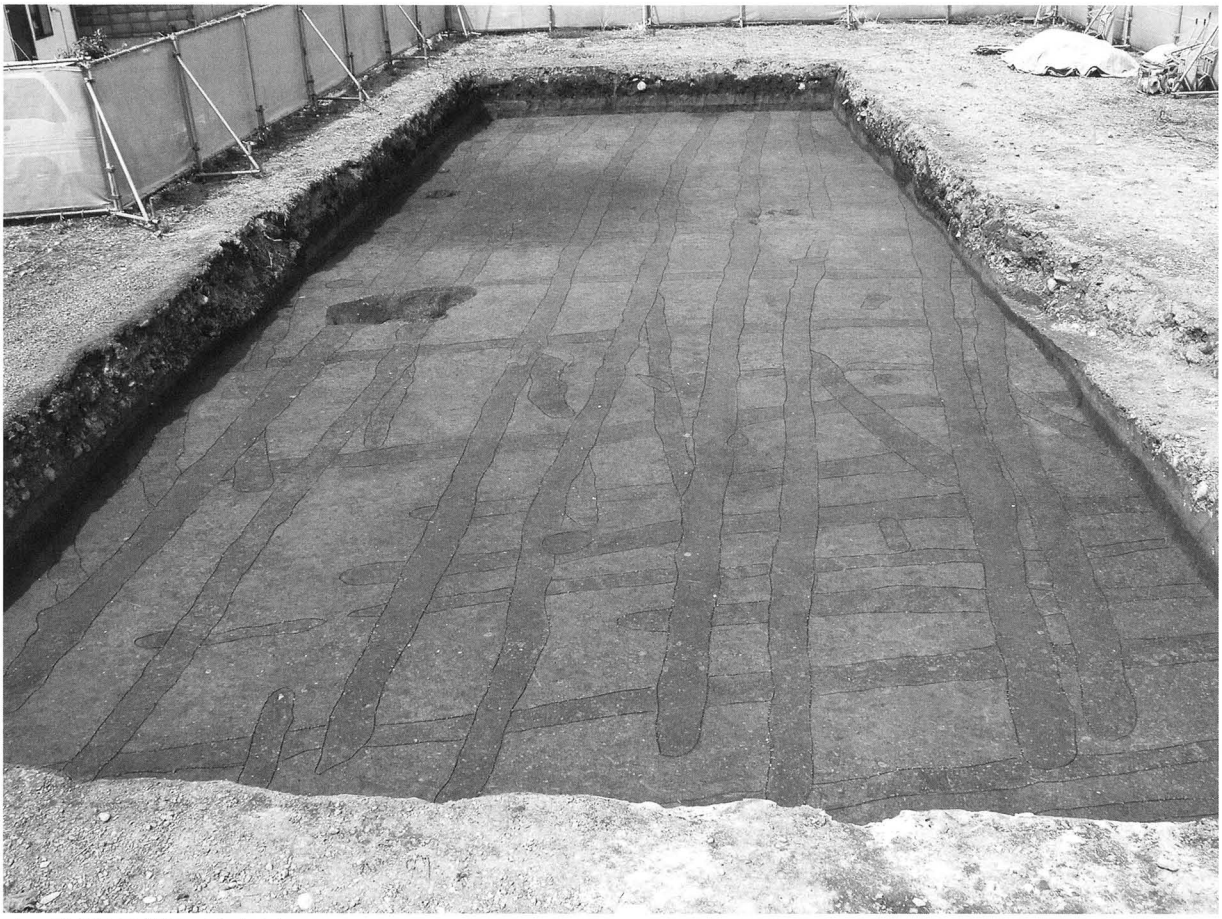


第25図　a区平面図（S=1/100）



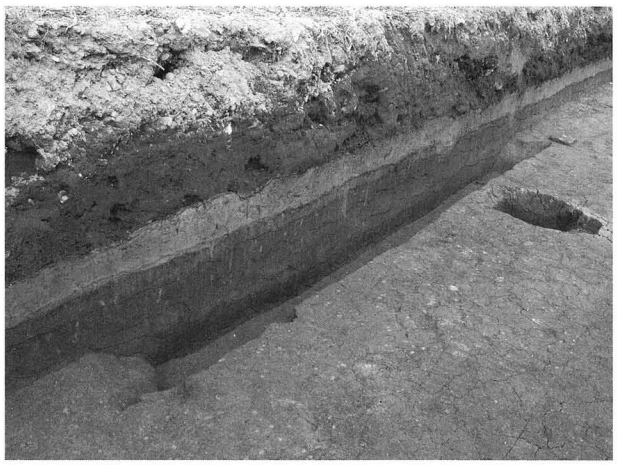
	層位	色調	土質	備考
基本層	Ⅰ	7.5GY3/1 暗緑灰色	粘土	旧水田層、下面に酸化鉄集積、マンガン粒やや多量
	Ⅱa	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	マンガン集積層、酸化鉄多量
	Ⅱb	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒非常に多量
	Ⅲa	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒多量
	Ⅲb	10YR2/3 黒褐色	粘土	酸化鉄粒やや多量、マンガン粒多量、シルト少量、粘性がⅢa層より強い
	Ⅳ	10YR4/4 褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒多量、シルト少量
SX4	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒少量
	2	10YR4/4 褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒少量
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土	マンガン粒やや多量
	4	10YR2/2 黒褐色	粘土	Ⅳ層ブロック少量、シルト少量、炭化物微量
	5	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物、焼土粒、酸化鉄微量、マンガン粒やや多量、下部でⅣ層ブロック微量
小溝3-1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒、マンガン粒やや多量、下部でⅣ層ブロック多量
小溝3-2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒微量、酸化鉄粒やや多量、マンガン粒多量、Ⅳ層ブロック少量
小溝3-3	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒微量、マンガン粒少量、Ⅳ層ブロック多量
小溝3-4	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒やや多量、マンガン粒多量、Ⅳ層ブロック少量
小溝5-1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒やや多量、Ⅳ層粒少量
小溝5-2	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	マンガン粒やや多量、シルト少量、Ⅳ層ブロックやや多量
P1	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒少量、色調はⅢb層より暗い
P2	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	Ⅲb層と同質

第26図　a区壁断面図（S=1/60）



1．遺構検出状況（南から）

2．SX4検出状況（東から）



3．SX4断面（調査区西壁　南東から）

写真図版20　a区

Ⅲ．ｂ区の調査

１．調査概要

ｂ区は官衙内部の中央に位置する。官衙の建物配置として、中央列上の南北棟や、東西棟が想定された地点である。南北12m×東西25mの調査区を設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、Ⅱ層上面で精査を行った。Ⅱ層上面で遺構が検出されなかったため、さらにⅢ層上面で精査を行った。その結果、竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構が２基検出された。性格を明らかにするため掘下げを行い、その後写真撮影と図面作成をして、調査を終了した。

２．基本層序

調査地点には盛土が60～120cmあり、それより下にⅠ～Ⅲ層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作土である。土色によりⅠa～Ⅰc層に細分される。Ⅱ層は粘土層であり、土色により細分される。上層のⅡa層はにぶい黄褐色のシルト質粘土層で、「Ⅳa層」に相当する。下層のⅡb層は暗褐色の粘土層で、「Ⅳb層」に相当する。Ⅲ層は褐色の粘土層であり、「Ⅴ層」に相当する遺構検出面である。

３．遺構と遺物

Ⅲ層上面において、性格不明遺構２基、小溝状遺構群３群、ピットが検出された。

SX8性格不明遺構

調査区南西部に位置する。南北２m×東西３mの長方形を呈するが、北辺がやや歪んでいる。深さは中央部で20～30cm、ピット状に落ち込む部分では50cmとなる。断面形は不整形を呈しており、中央部で急傾斜となり一段と深くなる。また、ピット状の落ち込みが認められるなど、底面の凹凸が著しい。堆積土は２層あり、第１層下面では部分的に焼土の集中箇所が認められた（第29図）。また、ピット状の落ち込みについては、堆積土の第２層が落ち込んでおり、別遺構や柱穴ではないことが確認された。遺物は第１層より土師器小片が数点出土した。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群６、７に切られている。

SX9性格不明遺構

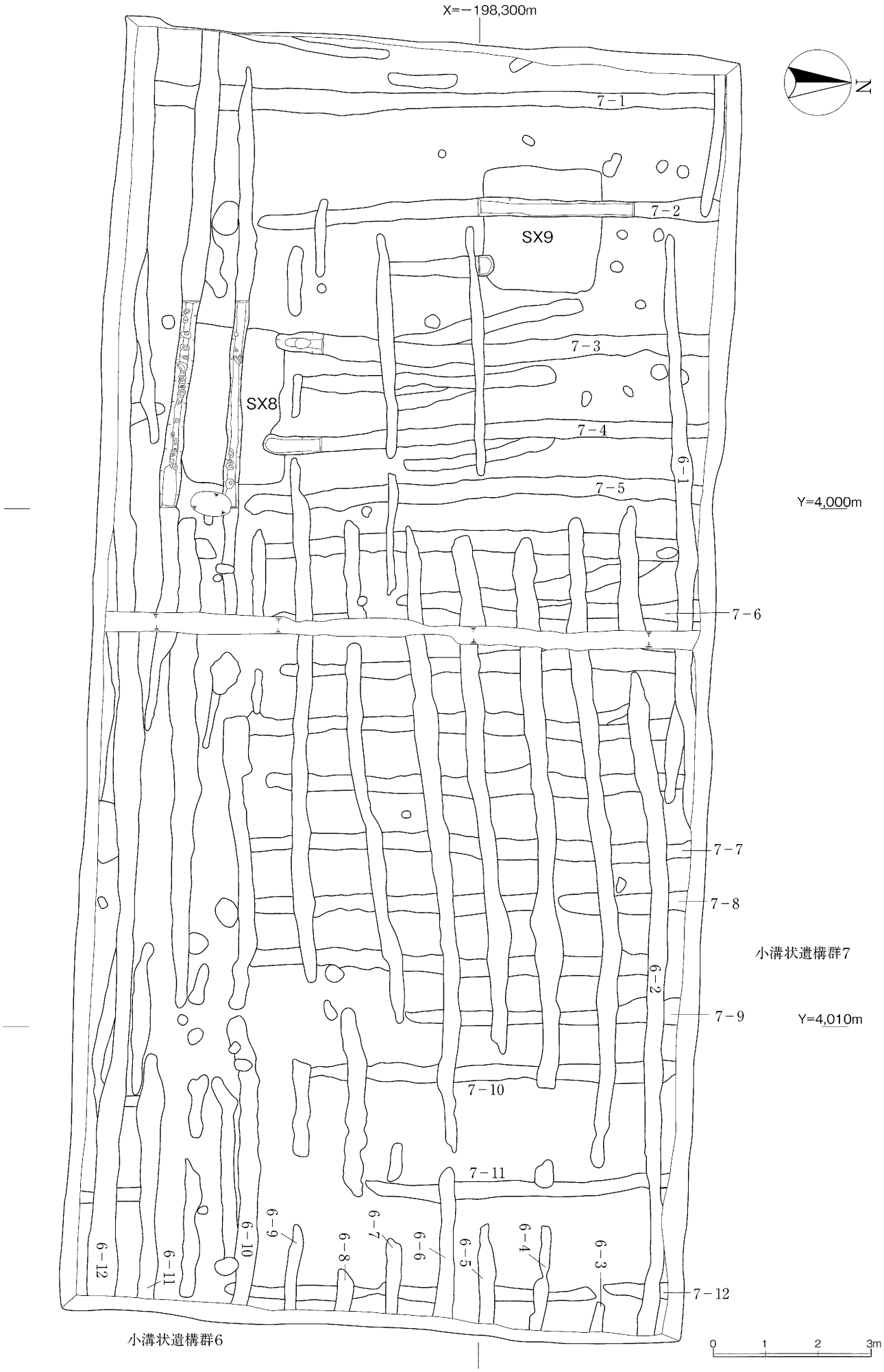
調査区北西部に位置し、一辺約３mの正方形を呈している。深さは中央部で20cmである。断面形は不整形を呈し、中央部ほど緩やかに深くなる。堆積土は粘土層が２層確認され、第１層中では部分的に炭化物、焼土の集中箇所が認められた。遺物は第１層より土師器小片が数点出土した。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群７に切られている。

小溝状遺構群６

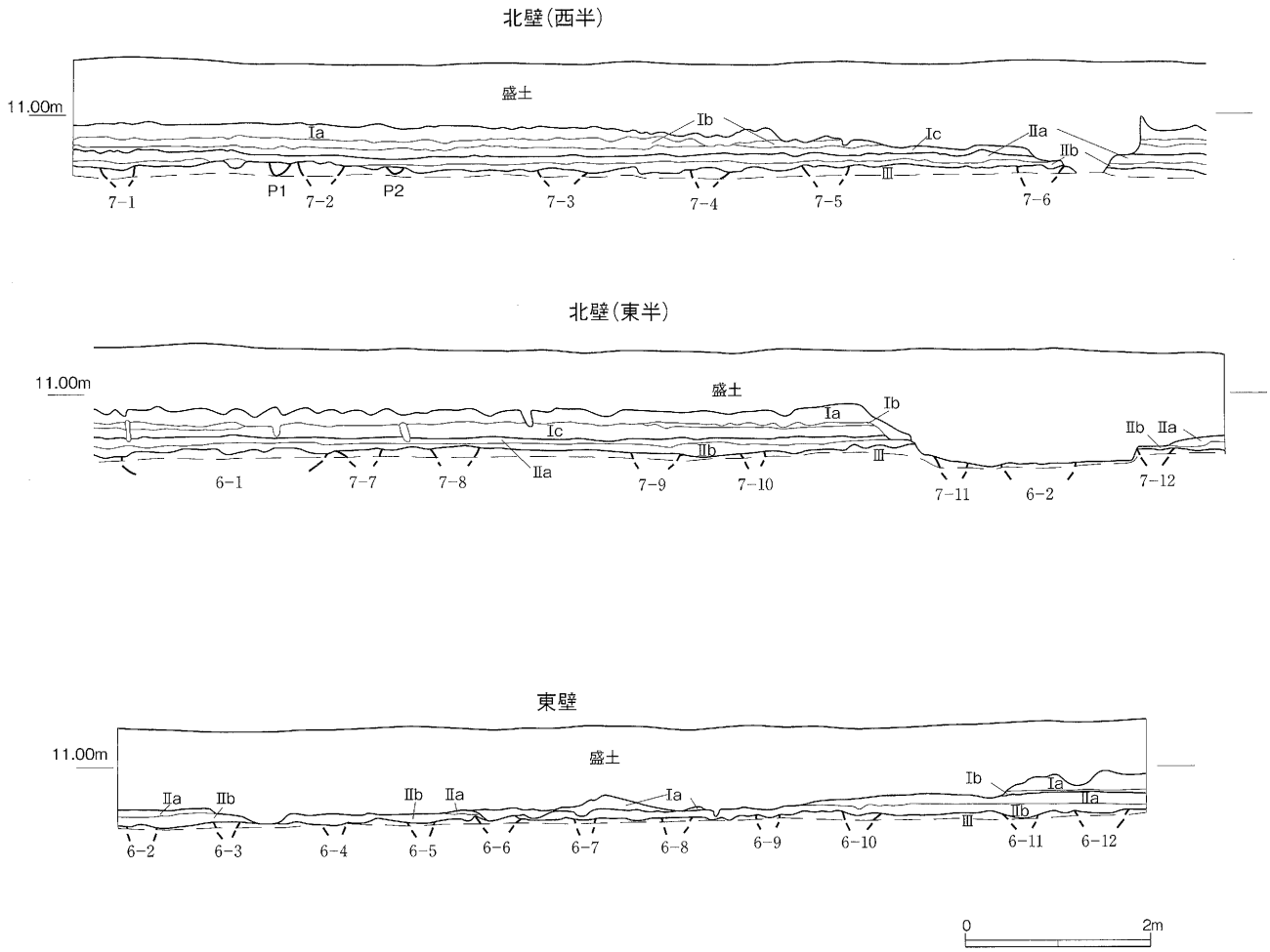
調査区を東西方向に横断する溝跡群で、17条検出された。性格不明遺構の調査に伴い、部分的に調査を行っている。上幅20～40cm、深さは10～20cmであり、底面は凹凸が著しい。方向については、調査区東端部でE-1～5°-S、中央部ではE-2～4°-Nとなり、同一の小溝跡でも方向が緩やかに変化するものが多い。堆積土は１層であり、暗褐色の粘土層である。ｂ区で検出された遺構で最も新しいものである。なお、この小溝状遺構群は同方向へ延びる溝跡間で重複関係にあるものも一部認められる。

小溝状遺構群７

調査区を南北方向に縦走する溝跡群で、20条検出された。性格不明遺構の調査に伴い、部分的に調査を行っている。上幅30～40cm、深さは約10cmであり、底面は比較的平坦である。方向はN-0～3°-Wである。堆積土は1層であり、暗褐色の粘土層である。また小溝状遺構群７－７からは、非ロクロ土師器のC－4高坏（第30図2）や土師器小片が

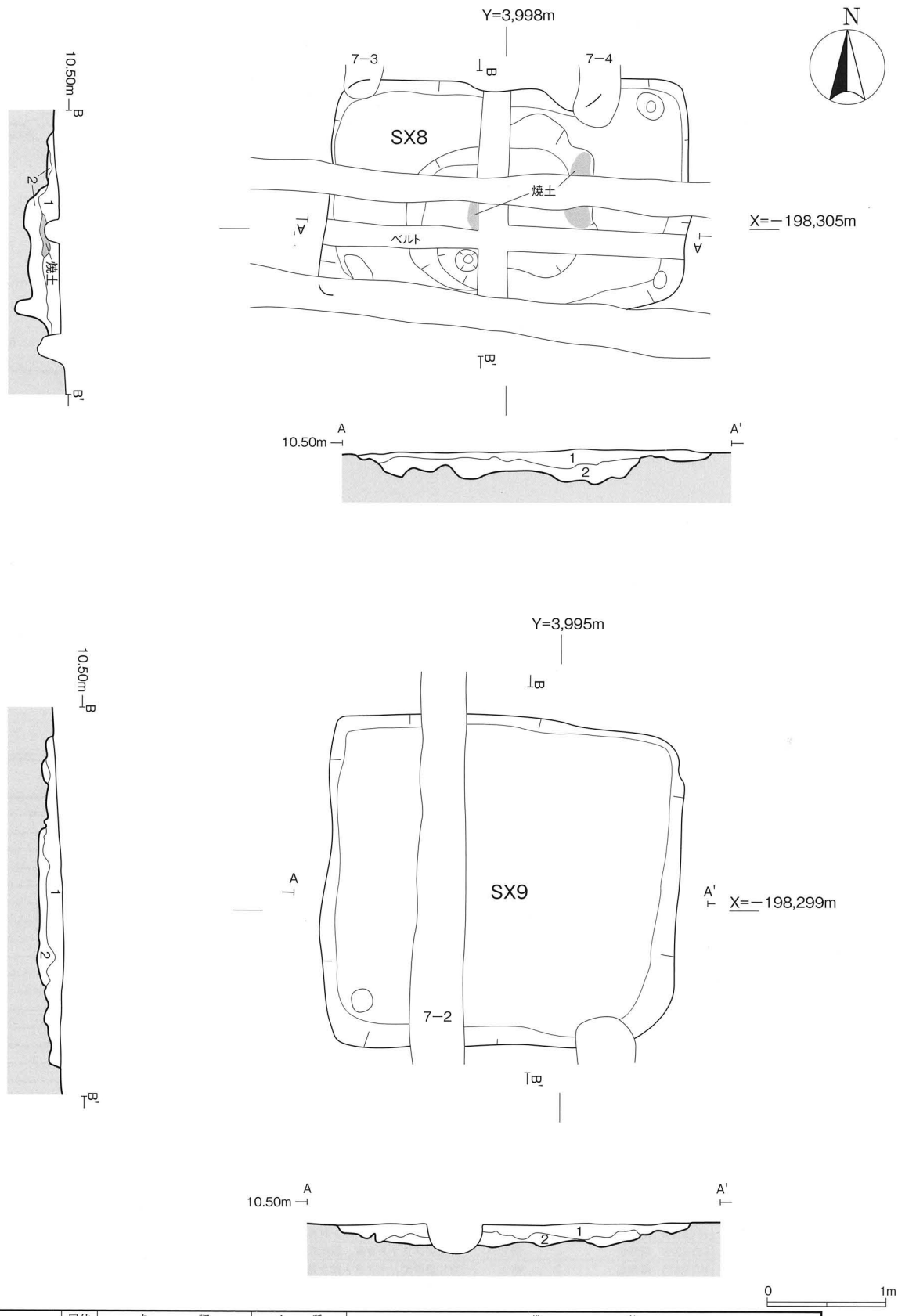


第27図　b区平面図（S=1/100）



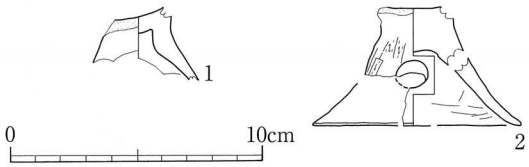
	層位	色　　調	土　質	備　　考
基本層	Ⅰa	2.5GY4/1　暗オリーブ灰色	シルト質粘土	旧水田層、酸化鉄少量、マンガン粒やや多量
	Ⅰb	7.5Y4/1　灰色	シルト質粘土	旧水田層、酸化鉄多量、マンガン粒やや多量
	Ⅰc	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト質粘土	酸化鉄非常に多量、マンガン粒やや多量
	Ⅱa	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄多量、マンガン粒やや多量
	Ⅱb	10YR3/3　暗褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒やや多量
	Ⅲ	10YR4/4　褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒多量
小溝6-1	1	10YR3/2　黒褐色	粘土	炭化物粒微量、酸化鉄少量、マンガン粒多量
小溝6-2	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、マンガン粒多量
小溝6-3	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	マンガン粒多量、シルト少量
小溝6-4	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	マンガン粒多量、シルト少量
小溝6-5	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	炭化物ブロック微量、マンガン粒多量、Ⅲ層ブロック少量
小溝6-6	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	炭化物ブロック微量、マンガン粒やや多量
小溝6-7	1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	マンガン粒、Ⅲ層ブロック多量
小溝6-8	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	炭化物ブロック微量、マンガン粒多量
小溝6-9	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	マンガン粒多量
小溝6-10	1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量
小溝6-11	1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量
小溝6-12	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	炭化物粒微量、マンガン粒やや多量、シルト少量
小溝7-1	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量、褐灰色(10YR5/1)粘土ブロック少量
小溝7-2	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量
小溝7-3	1	7.5YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量
小溝7-4	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	マンガン粒やや多量
小溝7-5	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	マンガン粒やや多量、Ⅲ層粒少量
小溝7-6	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	炭化物粒微量、マンガン粒多量
小溝7-7	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	炭化物ブロック少量、酸化鉄微量、マンガン粒多量、土器砕片少量
小溝7-8	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	酸化鉄微量、マンガン粒多量、Ⅲ層ブロック少量
小溝7-9	1	10YR3/2　黒褐色	粘土	マンガン粒多量、Ⅲ層ブロック少量
小溝7-10	1	10YR3/2　黒褐色	粘土	マンガン粒やや多量、Ⅲ層ブロック微量
小溝7-11	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量、Ⅲ層ブロック少量
小溝7-12	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	マンガン粒多量
P1	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄少量、マンガン粒やや多量
P2	1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量、Ⅲ層ブロック少量

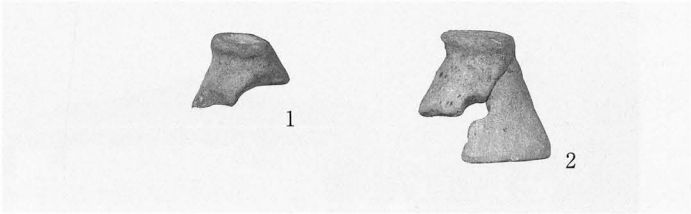
第28図　b区壁断面図（S=1/80）



	層位	色　　調	土　質	備　　考
SX8	1	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	平面中央部で炭化物、焼土ブロック集中
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒、Ⅲ層ブロック少量
SX9	1	10YR2/3　黒褐色	粘土	平面中央部で炭化物、焼土ブロック集中、下部でⅢ層ブロック少量、シルト少量
	2	10YR3/3　暗褐色	粘土	炭化物粒やや多量、Ⅲ層ブロック多量

第29図　SX8・9性格不明遺構平・断面図（S=1/50）





No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量	調整・特徴
1	C-3	Ⅲ層	非ロクロ土師器・高坏	不明	外面：ヘラナデ　内面：ヘラケズリ・ヘラナデ　砂粒・石英を含む
2	C-4	SM7-7・1層	非ロクロ土師器・高坏	不明	外面：ケズリ→ナデ？　内面：上部ヘラナデ？　内外面とも全体的に磨滅　砂粒・石英・白針少量

第30図　b区出土遺物（S=1/3）

出土した。C－4高坏は脚部片であり、直径約１㎝の透かし孔をもつものである。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群６に切られ、SX8、SX9性格不明遺構を切っている。

小溝状遺構群については、上記２群のほか、調査区西部において、重複関係の古い北西から南東方向へ斜走する小溝跡が５条検出されている。

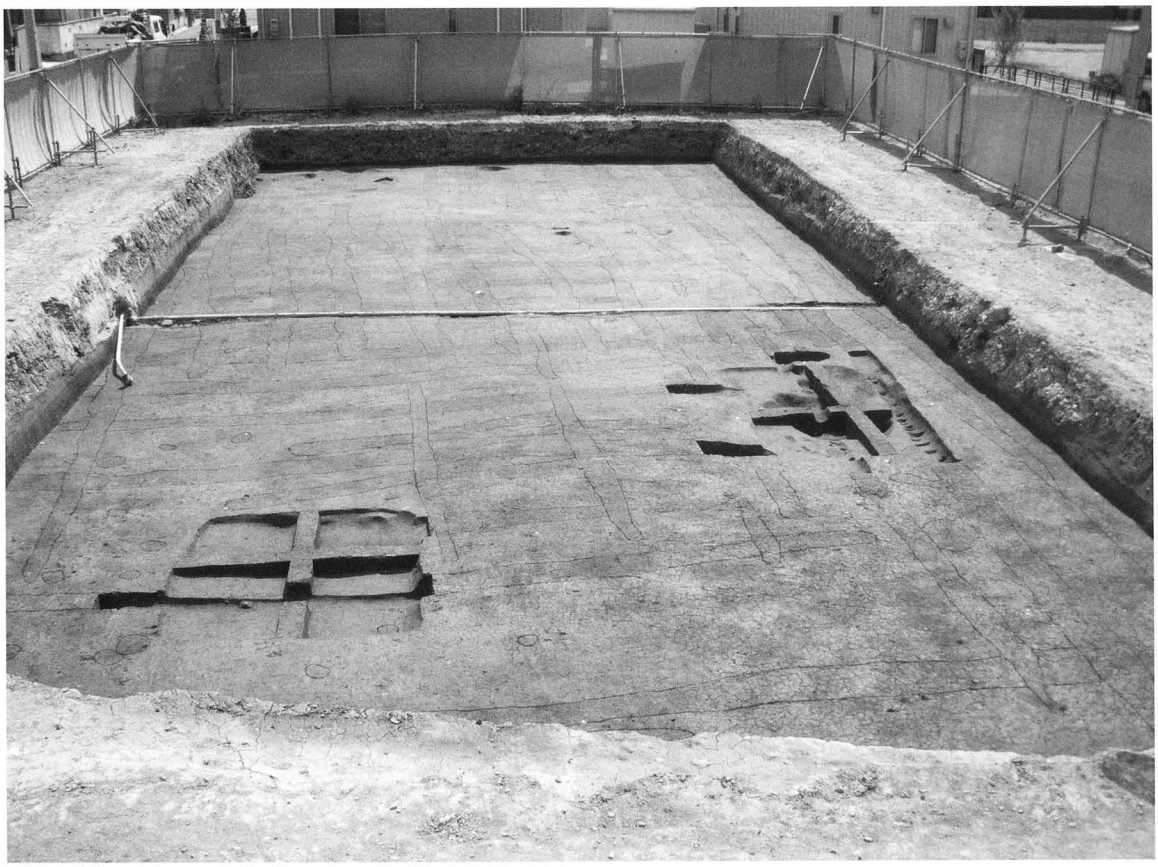
遺構外の出土遺物としては、Ⅲ層上面より非ロクロ土師器のC－3高坏（同図１）や甕の口縁部片などが出土している。また、弥生土器と考えられるB－1深鉢も出土した。体部下半の器厚が２～３㎜と非常に薄い個体である。

４．まとめ

調査の結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。a区の結果と合わせ、東列、西列と同様の中央列の存在がないことが明らかとなった。

また、SX8、SX9性格不明遺構については、炉跡などの施設や貼床が認められず、底面も平坦でないことなどから、竪穴住居跡ではないと考えられる。遺物も少ないため、遺構の年代等も不明である。

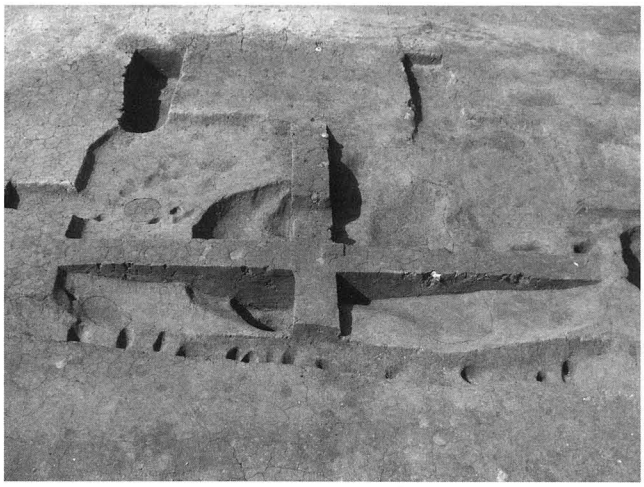
1．遺構検出状況（西から）



2．遺構掘削状況（西から）

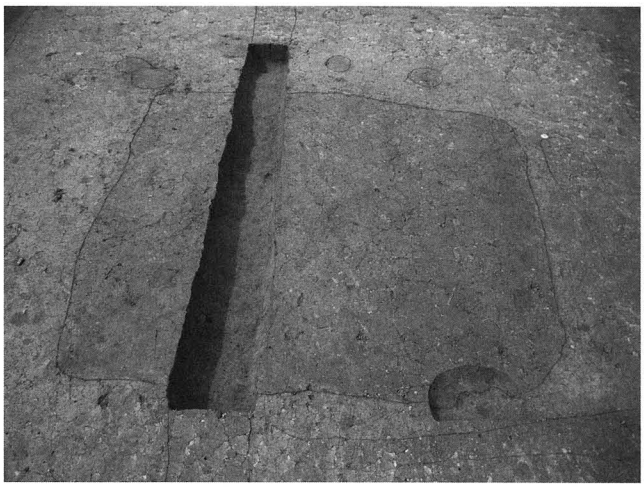
写真図版21　b区全景

1．SX8検出状況（南から）

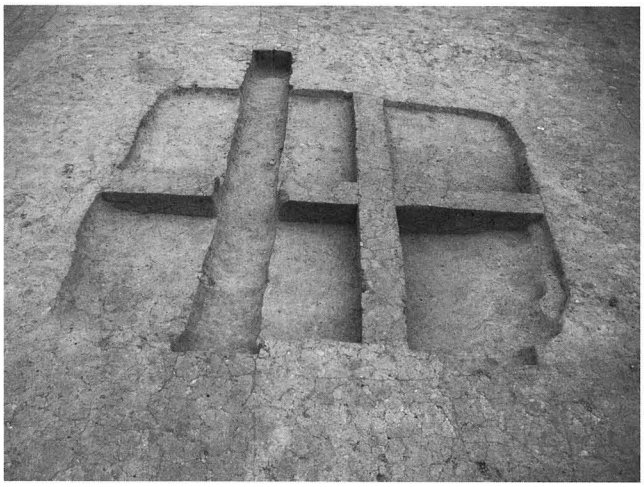


2．SX8掘削状況（南から）

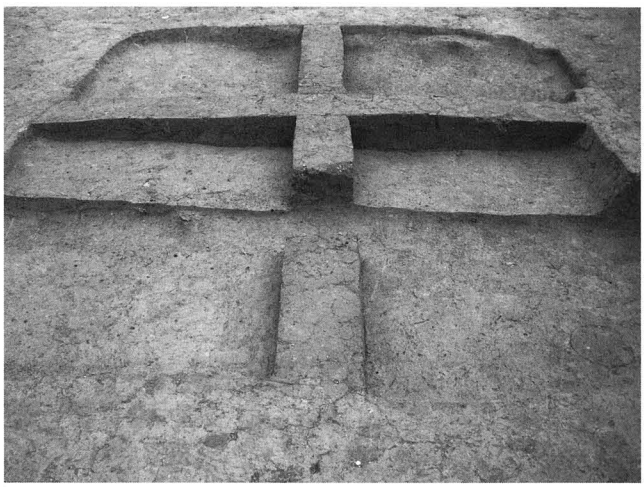
3．SX8南北ベルト西壁断面



4．SX9検出状況（南から）



5．SX9掘削状況（南から）



6．SX9南北ベルト西壁断面

写真図版22　b区遺構調査状況

Ⅳ．ｃ区の調査

１．調査概要

ｃ区は官衙内部の中央に位置する。西側に隣接して、SB64総柱建物跡が検出された六反田遺跡4B区が位置している。このSB64建物跡に直交する東西棟の存在を確認するために調査を行った。調査区は道路を挟んで、西側のc1区と東側のc2区に分け、南北5.5m×東西7mのc1区、南北5m×東西10mのc2区として調査区を設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、Ⅲ層上面で精査を行った。その結果、c1区南東隅において土坑が検出されたため、一部拡張を行った。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

２．基本層序

調査地点には盛土が約1mあり、それより下にⅠ～Ⅲ層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作土である。Ⅱ層は黒褐色の粘土層であり、c2区南部で部分的に検出された。「Ⅳb層」に相当する。Ⅲ層は褐色の粘土層であり、「Ⅴ層」に相当する遺構検出面である。c1区ではこの上面がほぼ全域でグライ化している。

３．遺構と遺物

Ⅲ層上面において、土坑２基、性格不明遺構１基、溝跡１条、小溝状遺構群３群、ピットが検出された。

SK10土坑

c1区南東隅に位置し、南北1m×東西1.2mの不整円形を呈している。深さは約30cmで、断面形は逆台形を呈すると考えられる。堆積土は２層で、第１層はにぶい黄褐色の粘土層、第２層は黒褐色の粘土層である。第２層中には炭化物がブロック状に多量に含まれている。また、遺物も第２層中より多量に出土している。ロクロ土師器のD－2甕（第33図2）は、外側に張り出す口縁部をもつ甕である。またD－3坏（同図4）は、内面黒色処理された坏の底部片で、底面の回転糸切の痕跡が複数回重なっている。その他に静止糸切の可能性がある須恵器のE－2坏（同図3）なども出土している。第1層からは内面黒色処理された非ロクロ土師器の坏片などが少量出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群11を切っている。

SK14土坑

c1区南東隅に位置し、SK10土坑に隣接する。直径約80cmの円形を呈すると考えられるが、東部は調査区外に延びている。上面より須恵器のE－3甕（同図6）や土師器片が出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群11を切っている。

SX13性格不明遺構

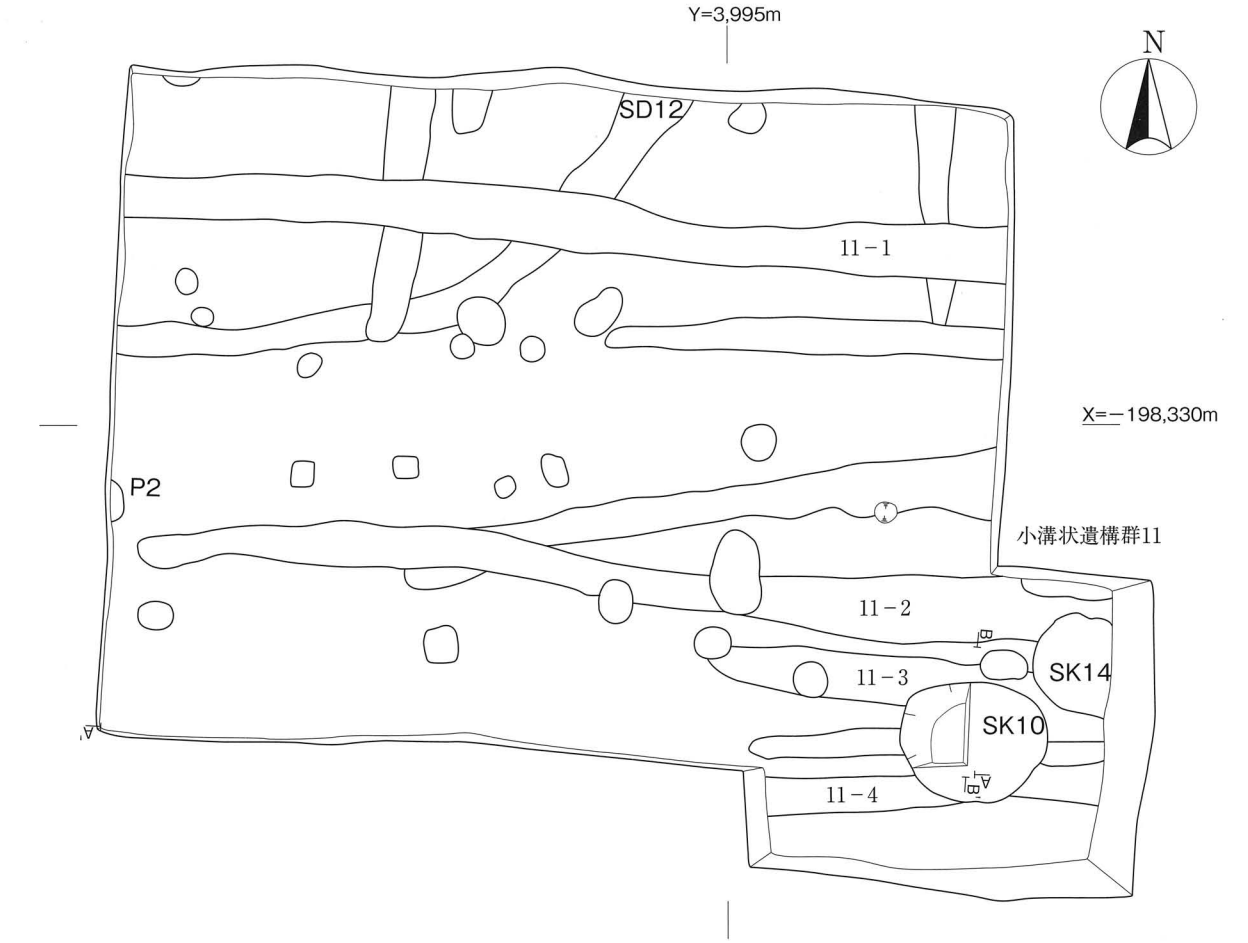
c1区南壁中でのみ検出された。調査区端部に僅かに延びていたと考えられるものである。断面形は不整形を呈し、凹凸が著しい。上幅2.5m、深さは最深部で約25cmである。堆積土は黒褐色の粘土層１層である。ピット4に切られている。

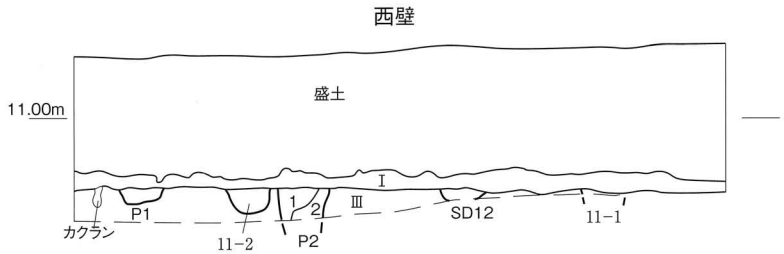
SD12溝跡

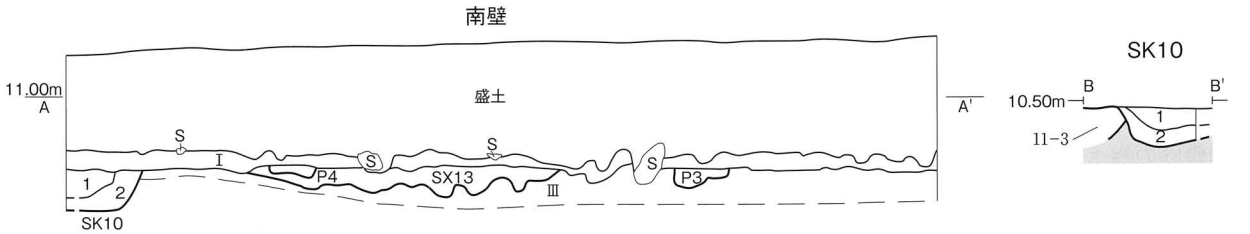
c1区北西部で検出された溝跡である。上幅20～30cmで、東西方向から北へ湾曲して延びている。小溝状遺構群やピットに切られ、c1区で検出された遺構では最も古いものである。

小溝状遺構群11

c1区を東西方向に横断する溝跡群で、６条検出された。上幅20～50cmで、方向はE-2°-NからE-8°-Sである。小溝状遺構群11-2から土師器小片が、小溝状遺構群11-3から須恵器甕片が出土した。遺構の重複関係としては、SK10、SK14土坑に切られ、SD12溝跡を切っている。

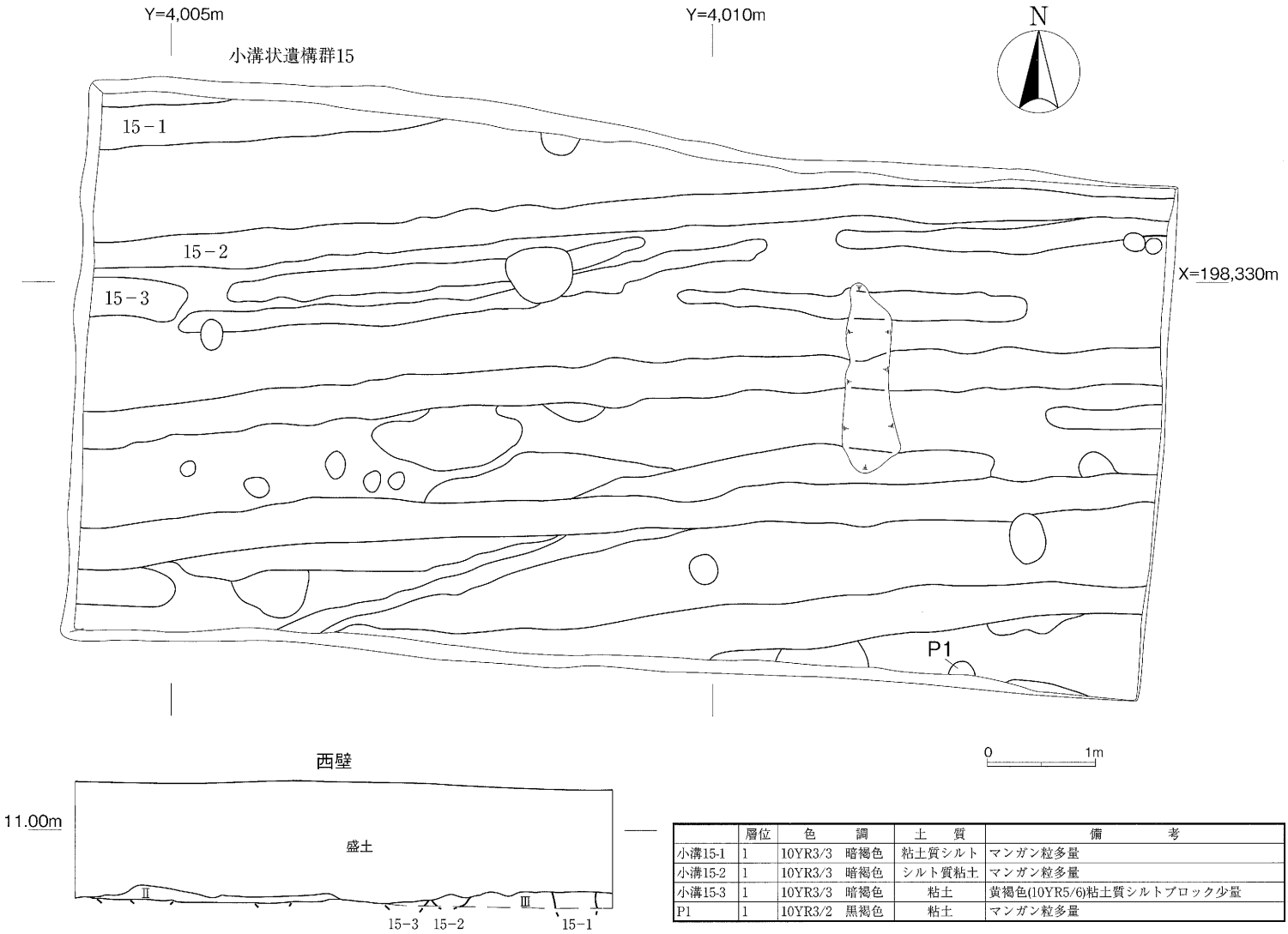






	層位	色　　調	土　質	備　　考
基本層	Ⅰ	2.5GY4/1　暗オリーブ灰色	粘土	旧水田層、炭化物微量、マンガン粒少量
	Ⅱ	10YR3/2　黒褐色	粘土	マンガン粒非常に多量
	Ⅲ	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	マンガン粒非常に多量、調査区大半でオリーブ黒色（7.5Y3/2）にグライ化
SK10	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	マンガン粒やや多量
	2	10YR2/2　黒褐色	粘土	炭化物ブロック多量、土器片を含む
SX13	1	2.5Y3/2　黒褐色	粘土	酸化鉄粒多量、マンガン粒やや多量
SD12	1	5Y2/2　オリーブ黒色	粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒やや多量、下部にⅢ層ブロックを含む
小溝11-1	1	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	炭化物粒微量、マンガン粒少量
小溝11-2	1	7.5Y3/1　オリーブ黒色	シルト質粘土	炭化物粒微量、酸化鉄粒少量
P1	1	5Y3/2　オリーブ黒色	シルト質粘土	
P2	1	2.5Y3/1　黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、酸化鉄少量、オリーブ黒色（5Y3/2）粘土ブロック多量
	2	5Y3/2　オリーブ黒色	粘土	炭化物粒、酸化鉄微量、下部に黒褐色（2.5Y3/1）粘土ブロックを含む
P3	1	5Y3/2　オリーブ黒色	粘土	炭化物粒微量、酸化鉄粒やや多量、Ⅲ層ブロック多量
P4	1	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	炭化物粒微量、酸化鉄粒やや多量、オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土ブロックやや多量

第31図　c1区平・断面図（S=1/60）



	層位	色　調	土　質	備　考
小溝15-1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒多量
小溝15-2	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量
小溝15-3	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトブロック少量
P1	1	10YR3/2　黒褐色	粘土	マンガン粒多量

第32図　c2区平・断面図（S=1/60）

小溝状遺構群15

c2区を東西方向に横断する溝跡群で、９条検出された。上幅20～40cmで、方向はE-0～6°-Nである。

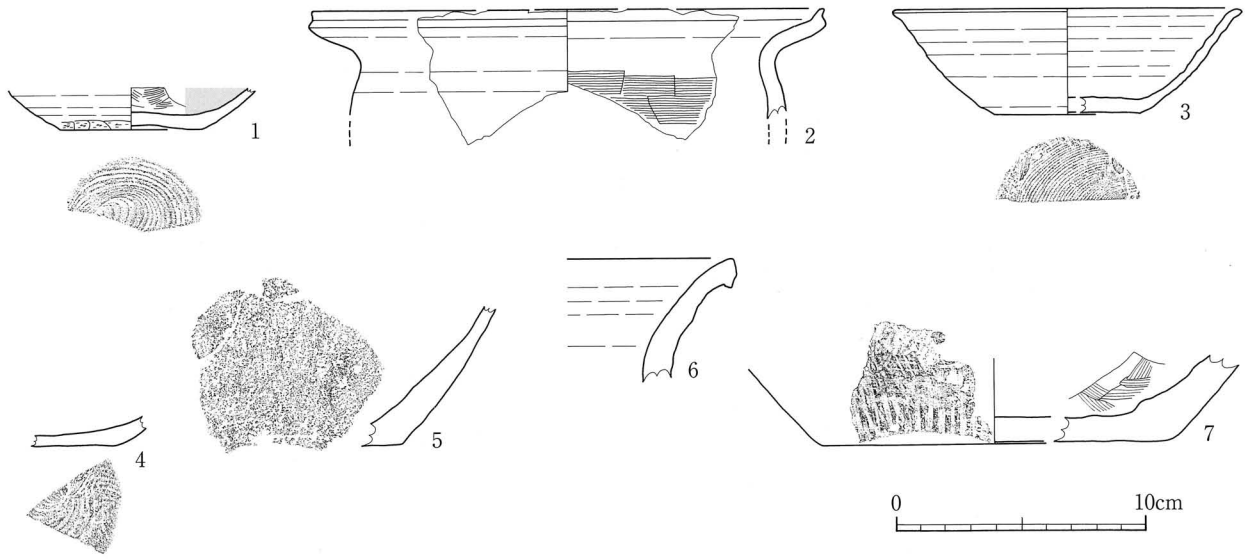
小溝状遺構群については、上記２群のほか、c1区北部において、南北方向へ縦走する溝跡群が３条検出されている。また、小溝状遺構群11、15に切られる溝跡も確認されている。

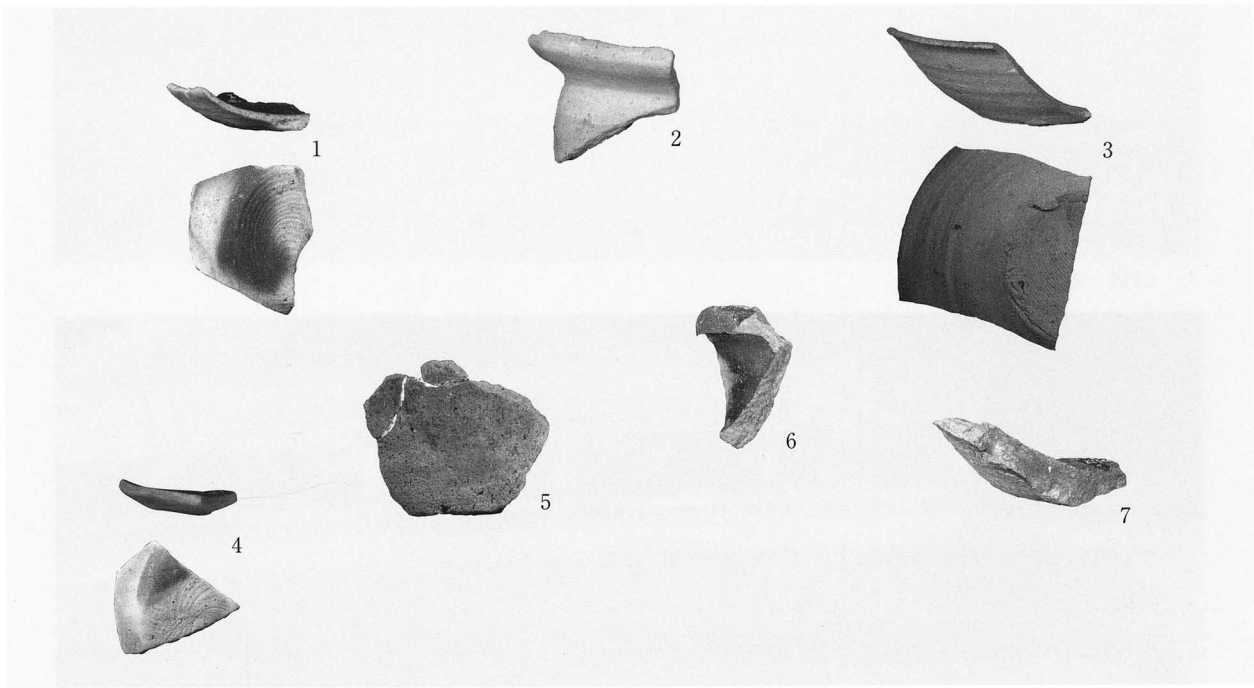
遺構外の出土遺物としては、c1区Ⅲ層上面より土師器片のほか、磨滅の著しい平瓦片、縄文土器片が各１点出土し、c2区Ⅲ層上面より土師器小片が少量と須恵器片１点が出土している。

４．まとめ

調査の結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。

またSK10土坑については、多量の遺物が出土したものの小破片が多く、遺構の時期決定が可能なものが少ない。しかし、図示したD－2甕やE－2坏と同様のものと考えられる遺物が、六反田遺跡第５次調査において、SI110住居跡から出土しており、遺構、遺物は９世紀中葉と位置付けられている。今回出土したD－2甕やE－2坏も同時期と考えられ、下層の第２層から出土していることから、SK10土坑も概ね９世紀中葉の年代が考えられる。また、SD12溝跡は規模や堆積土が小溝状遺構群と類似しており、畑の耕作等に関わる遺構の可能性がある。





No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴
1	D-1	SK10・2層	ロクロ土師器・坏	底径5.7	外面：ロクロナデ・ケズリ　内面：ヘラミガキ・黒色処理　砂粒・石英ごく少量　白針少量
2	D-2	SK10・2層	ロクロ土師器・甕	口径20.4 最大径（口縁直下）20.8	内外面：ロクロナデ　内面体部ロクロナデ→ヘラナデ　砂粒・石英を含む
3	E-2	SK10・2層	須恵器・坏	口径14.0 底径5.8 器高4.2	内外面：ロクロナデ　体部（底部直上）回転糸切り　底部：回転糸切り
4	D-3	SK10・2層	ロクロ土師器・坏	不明	外面：磨滅　内面：ヘラミガキ、黒色処理　底部：回転糸切り　砂粒を含む
5	C-7	SK10・2層	非ロクロ土師器・甕	不明	外面：ヘラケズリ　内面：ヘラケズリ、ヘラナデ、指ナデ　底部：ヘラケズリ　砂粒・石英を含む
6	E-3	SK14上面	須恵器・甕	不明	内外面：ロクロナデ　砂粒・石英・白針少量
7	E-4	Ⅱ層上面	須恵器・甕	底径14（推定）	外面：叩き、一部ヘラケズリ　内面：指ナデ？・ヘラナデ　砂粒・石英・白針少量　2㎜の小石少量

第33図　c区出土遺物（S=1/3）

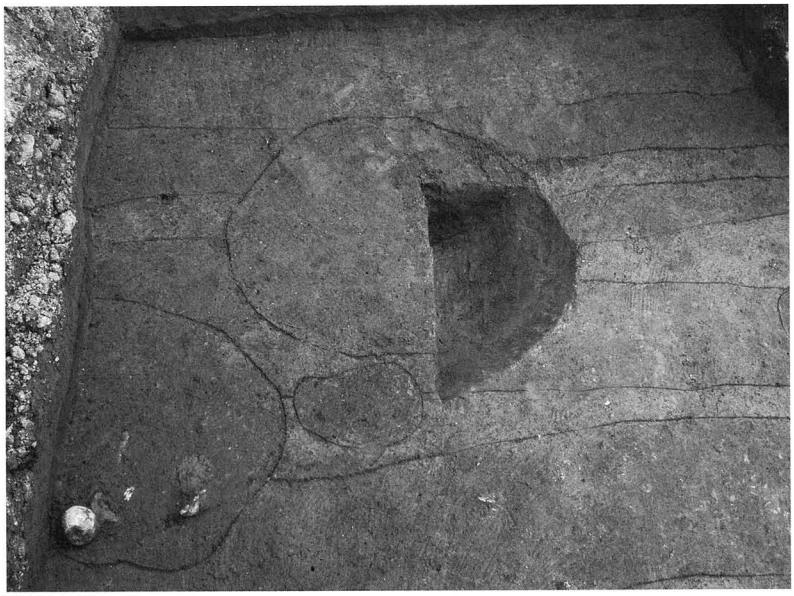
1．c1区（北から）

2．c2区（北から）

写真図版23　c区全景

1．２層遺物出土状況（北西から）
右…D-2甕　左…E-2坏

2．SK10断面（北西から）



3．c1区拡張部遺構検出状況（北から）

写真図版24　c1区SK10土坑

Ⅴ．ｇ区の調査

１．調査概要

区画整理事業に伴う発掘調査において、六反田遺跡6A区、大野田古墳群14B区で、官衙の区画溝の西辺と想定される南北方向の溝跡が検出された。この成果を受けて、大野田古墳群14B区の南側にｇ区として３ヶ所の調査区を設定した。北側の２ヶ所は当初、一辺２ｍのトレンチを設定し、検出面の深度に応じて拡張した。この２ヶ所で溝跡がさらに南側へ延びることが確認されたため、南トレンチとして南北８ｍ×東西６ｍの調査区を設定した（第34図）。北トレンチ２ヶ所は溝跡の検出に留め、南トレンチは他の溝跡との重複が認められたため、一部掘下げを行った。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

２．基本層序

調査地点には盛土が0.5～1.1mあり、それより下にⅠ～Ⅴ層が確認された。Ⅰ層は旧耕作土であり、土質によりⅠa、Ⅰb層に細分される。下層のⅡ層も細分され、Ⅱa層は灰黄褐色の粘土質シルト層である。北トレンチでは10cm程で、南トレンチでは部分的な堆積である。Ⅱb層は黒褐色のシルト質粘土層で、「Ⅱ層」に相当する。下面の凹凸が著しく、旧耕作土と考えられる。Ⅲ層は暗褐色のシルト質粘土層であるが、南トレンチでは砂粒を多量に含む土層となっている。Ⅳ層は黒褐色の粘土質シルト層であり、「Ⅳ層」に相当する。南トレンチ南部で確認された。Ⅴ層は褐色の砂質シルト層で、「Ⅴ層」に相当する遺構検出面である。

３．遺構と遺物

Ⅲ層上面において、性格不明遺構１基、ピット５基、Ⅴ層上面において、溝跡２条、性格不明遺構１基、ピットが検出された。

SD2溝跡

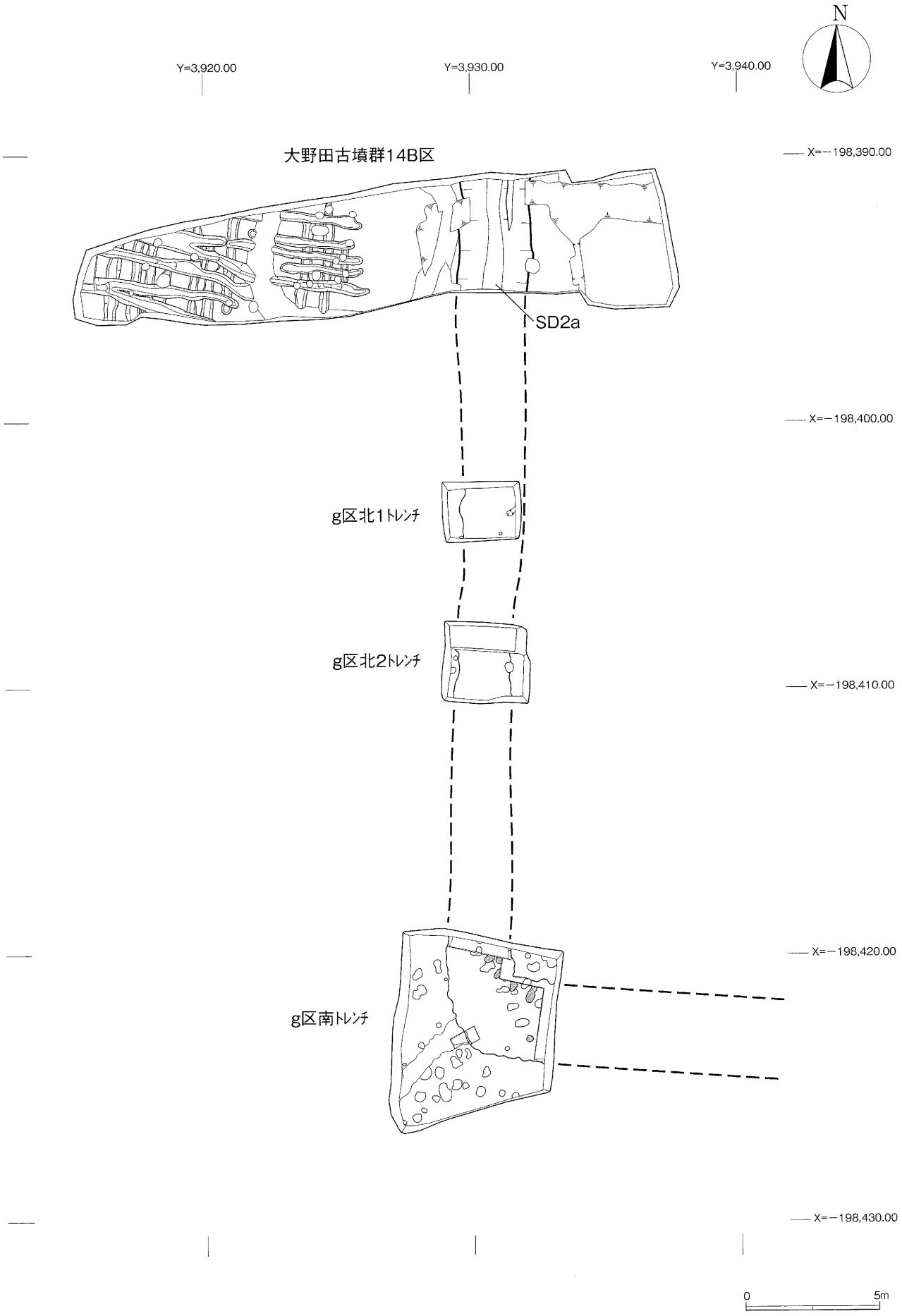
各トレンチのⅤ層上面で検出された、南北方向に縦走し、南トレンチで北から東に屈曲する溝跡である。北１トレンチでは溝跡の西縁を、北２トレンチでは溝跡の両縁を検出している。上幅2.5～3m、方向は南北方向でN-1～2°-E、東西方向でE-5°-Sとなる。溝跡は検出に留めているが、調査区壁の断面観察により堆積土は大別して３層に分けられる。第１層は粘土質シルト層であり、土色で細分されるが、1a層は北２トレンチ南壁でのみ確認されている。第２層は暗褐色のシルト質粘土層、第３層は暗褐色の粘土質シルト層である。遺物は1b、２層中より土師器小片が少量出土したほか、南トレンチにおいて第２層中より須恵器のE－1坏（第37図１）が出土した。遺構の重複関係としては、SD16溝跡を切っている。なお、南トレンチ東壁の断面観察の結果、SD2溝跡が基本層のⅣ層を切っていることが確認された。

SD16溝跡

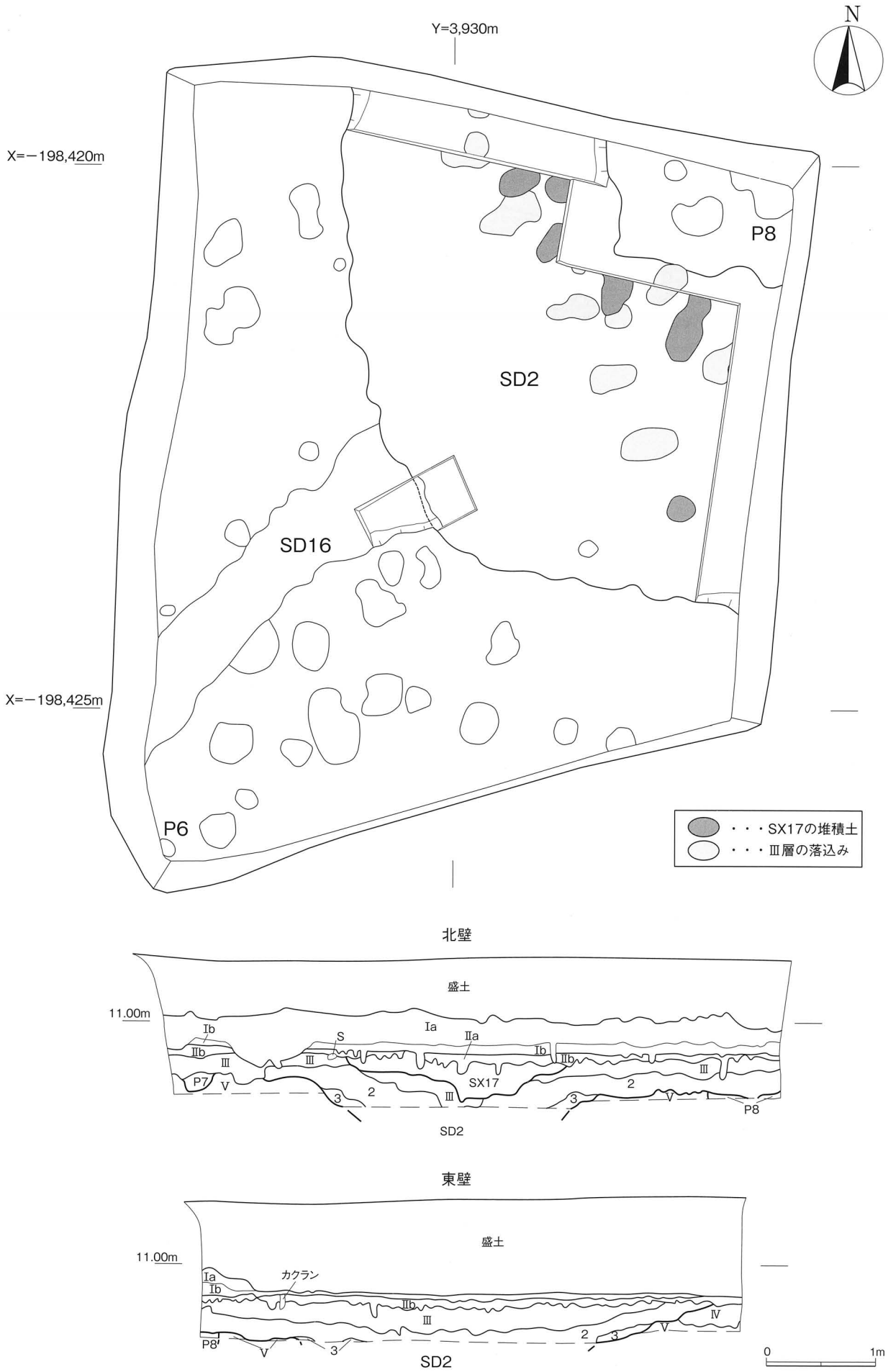
南トレンチのⅤ層上面で検出された、北東から南西方向へ斜走する溝跡である。上幅は約1.5m、深さは約50cmで、方向はN-49°-Eである。堆積土は３層で、第１層は暗褐色のシルト質粘土層で、溝跡の北部に偏って堆積している。第２層はにぶい黄褐色のシルト質粘土層、第３層は暗褐色の粘土質シルト層である。第１層より土師器片が１点出土した。遺構の重複関係としては、SD2溝跡に切られている。

SX17性格不明遺構

南トレンチ北壁のⅢ層上面から落ち込んでいる。断面の観察によると、上部では幅約２ｍ、深さ約30cm以上の落ち込みである。しかし下部では凹凸があり、SD2溝跡の中央では長軸25～80cm、短軸20～30cmの楕円形、或いは不整楕円形のピット列状に検出されている（第35図）。また周囲にはⅢ層による同様の形状の落ち込みがピット列状

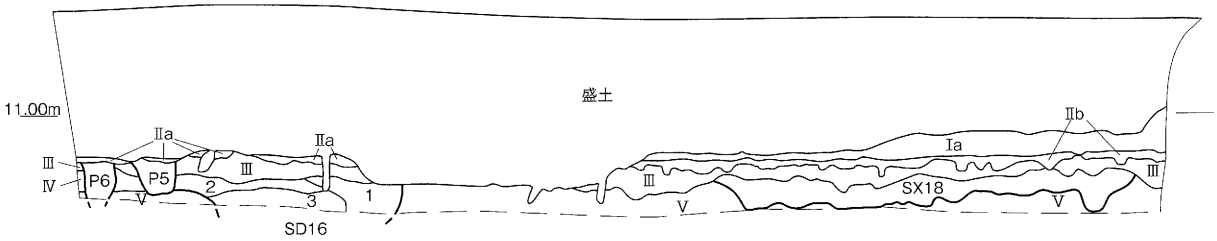


第34図　大野田官衙遺跡g区と大野田古墳群14B区（S=1/200）



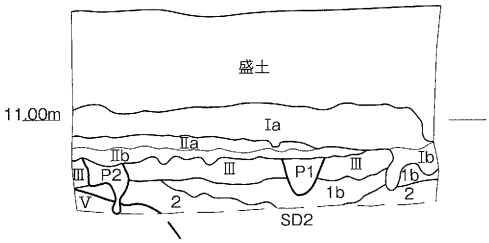
第35図　g区南トレンチ平・断面図（S=1/50）

南トレンチ西壁

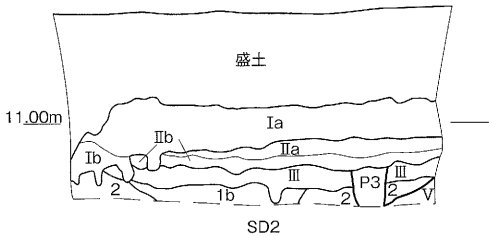


北1トレンチ

北壁

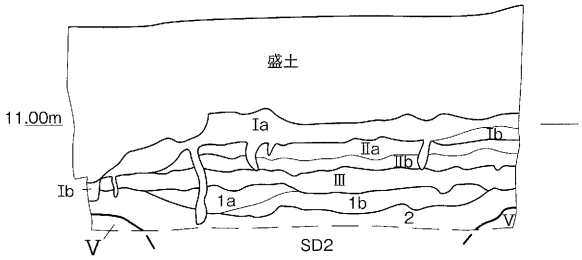


南壁

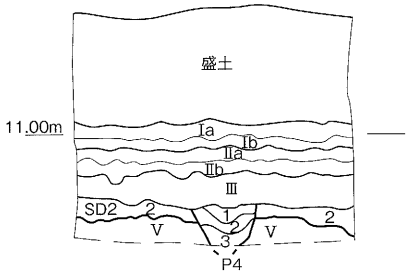


北2トレンチ

南壁



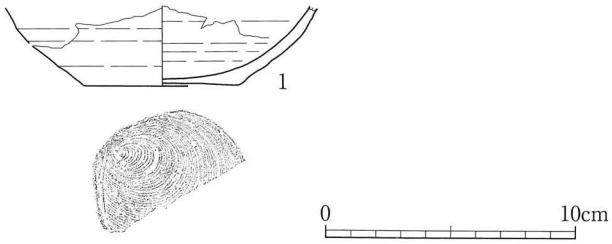
西壁

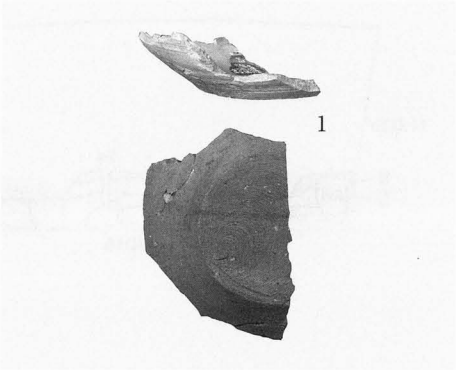


0 1m

	層位	色調	土質	備考
基本層	Ⅰa	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	旧耕作土、マンガン粒少量
	Ⅰb	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土、酸化鉄、マンガン粒少量
	Ⅱa	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄が上面に集積、マンガン粒やや多量
	Ⅱb	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	旧耕作土、炭化物ブロック微量、酸化鉄粒やや多量、マンガン粒多量、下部でⅢ層ブロック多量、下面の凹凸が激しい
	Ⅲ	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄少量、マンガン粒多量、灰黄色（2.5Y6/2）粘土ブロック多量、浅黄橙色（10YR8/4）シルトブロック（灰白色火山灰?）を一部含む、南区では砂粒を多く含む
	Ⅳ	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	旧耕作土、マンガン粒やや多量、下部でⅤ層ブロック多量、一部しまりの弱い部分あり
	Ⅴ	10YR4/4 褐色	砂質シルト	酸化鉄やや多量、灰黄褐色（10YR6/2）粘土ブロックやや多量
SD2	1a	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	マンガン粒やや多量
	1b	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄微量、マンガン粒少量、にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルトブロック少量、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック多量、暗褐色（10YR3/4）粘土ブロックが部分的に集中
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物ブロック、酸化鉄少量、マンガン粒多量、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロックやや多量、褐色（10YR4/4）砂質シルトブロック少量
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄少量、マンガン粒やや多量、Ⅴ層ブロック少量、にぶい黄橙色（10YR7/4）シルトブロック（火山灰?）を一部含む
SD16	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量、褐色（10YR4/4）シルトブロックやや多量
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量、褐色（10YR4/4）シルトブロック少量
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒少量、にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルトブロック少量
P1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄やや多量、黒褐色（10YR2/2）粘土ブロックを上部に多量、砂粒を少量含む
P2	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色（10YR6/6）シルト質砂ブロックをやや多量
P3	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	炭化物粒微量、黄褐色（10YR5/6）砂質シルトブロック少量
P4	1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、酸化鉄少量
	2	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
	3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
P5	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒やや多量
P6	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物粒微量、マンガン粒やや多量、黄褐色（10YR5/6）シルト質粘土ブロック少量
P7	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒多量、浅黄橙色（10YR8/4）シルトブロック（灰白色火山灰?）微量
P8	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒微量、酸化鉄少量、マンガン粒やや多量、Ⅴ層ブロック多量
SX17	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物粒微量、酸化鉄多量、マンガン粒やや多量、上部に砂粒を多く含む
SX18	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒多量、黄褐色（10YR5/6）シルト質粘土ブロック少量、下面の凹凸が激しい

第36図　g区調査区壁断面図（S=1/50）





No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴
1	E-1	SD2・2層	須恵器・坏	底径6.2	外面：ロクロナデ→ナデ　内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り　砂粒・石英を含む

第37図　g区出土遺物（S=1/3）

に並んでいる。

SX18性格不明遺構

南トレンチ西壁で確認された、Ⅴ層上面の遺構である。上幅2.7m、深さは約20cmであり、断面形は不整形で下面の凹凸が著しい。堆積土は１層で、暗褐色の粘土質シルト層である。

また、Ⅲ層上面でピットを５基検出している。

遺構外の出土遺物としては、Ⅲ、Ⅳ層上面より土師器片が少量出土したほか、Ⅴ層上面では土師器片、須恵器片が出土している。

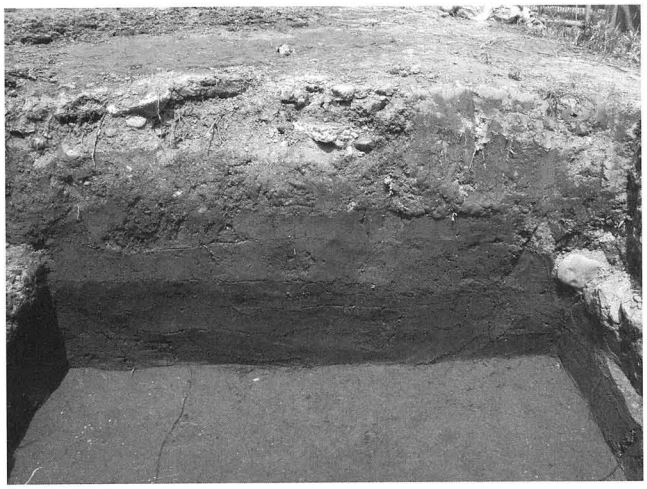
４．まとめ

調査の結果、六反田遺跡6A区、大野田古墳群14B区で南北方向に縦走する溝跡が、ｇ区南トレンチで東へ屈曲することが明らかとなった。六反田遺跡、大野田古墳群の調査では、検出された溝跡の地点や規模、断面形状から官衙の区画溝と想定されていた。その溝跡の延長部が検出されたことで、南北に縦走する溝跡は官衙の区画溝の西辺であり、ｇ区南トレンチで東へ屈曲することから、区画溝の南西コーナー部であることが明らかとなった。東へ延びていくSD2溝跡は、大野田古墳群14次調査のSD4溝跡に接続し、官衙の区画溝南辺となっていると考えられる。これにより、官衙の範囲が南北245～259m、東西188～198m（註）であることが明らかとなった。

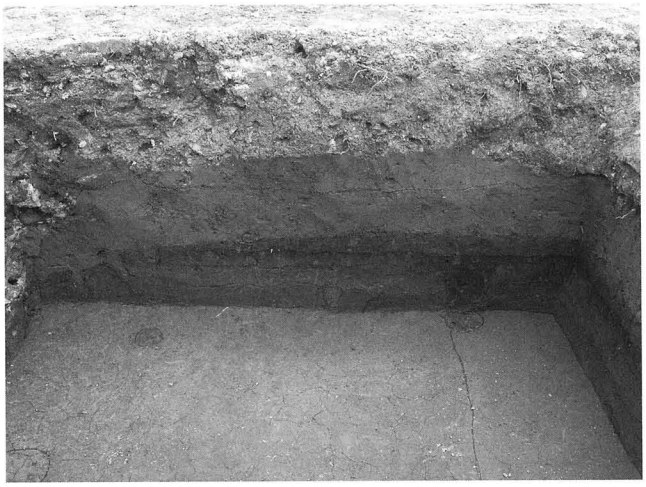
また、これまで区画溝は２時期あることが明らかとなっている。今回、SD2溝跡がⅣ層を切ることが明確に確認されたが、溝跡の新、旧いずれの時期なのか、より新しい時期の流路等の堆積に基づくものなのかは明らかにできなかった。今後、堆積状況の詳細を慎重に検討していく必要がある。

註　ここで示した数値は、真北、真東西方向を基準とし、区画溝の内側の上端で計測した数値である。

1．北１トレンチ全景（南から）

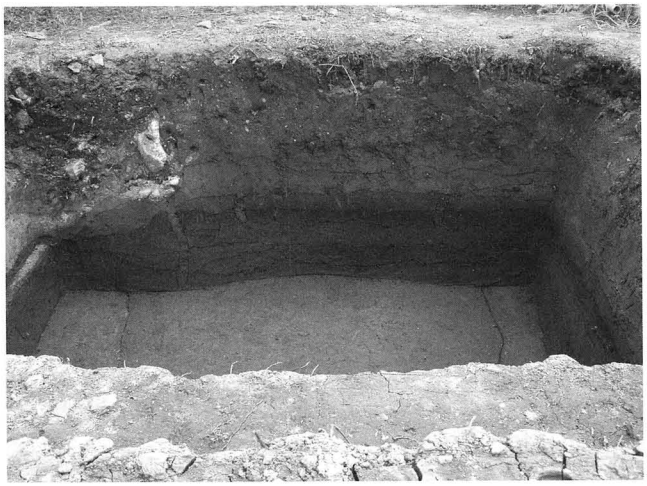


2．北１トレンチ北壁断面



3．北１トレンチ南壁断面

4．北２トレンチ全景（北から）



5．北２トレンチ南壁断面

6．北２トレンチ西壁断面

写真図版25　g区北トレンチ

1．調査区全景（西から）

2．調査区北壁断面

3．調査区東壁断面

写真図版26　g区南トレンチ

Ⅵ．ｈ区の調査

１．調査概要

ｈ区は官衙内部の中央に位置する。ａ～ｃ区の調査結果を受けて、中央部に建物跡が他に存在しないか確認するために調査を行った。調査区は北トレンチと南トレンチに分け、南北9.5m×東西4mの南トレンチ、南北10.5m×東西3mの北トレンチを設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、Ⅴ層上面で精査を行った。南トレンチでは遺構の検出状況に応じて一部、拡張、調査を行っている。北トレンチでも土坑の一部を掘り下げて調査を行った。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

２．基本層序

調査地点には盛土が70～80cmあり、それより下にⅠ～Ⅴ層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作土であり、土色によりⅠa～Ⅰc層に細分される。Ⅱ層は暗褐色の粘土質シルト層で、「Ⅱ層」に相当する。北トレンチ北部で部分的に堆積が確認された。Ⅲ層は褐色の砂質シルト層であり、「Ⅲ層」に相当する。Ⅱ層同様、北トレンチ北部に堆積している。Ⅳ層は暗褐色のシルト質粘土層であり、「Ⅳ層」に相当する。北トレンチで堆積している。Ⅴ層は褐色のシルト質粘土層で、「Ⅴ層」に相当する遺構検出面である。

３．遺構と遺物

Ⅴ層上面において、南トレンチでは土坑２基、性格不明遺構１基、溝跡３条、小溝状遺構群２群、ピットが検出された。北トレンチでは土坑２基、性格不明遺構２基、溝跡１条、小溝状遺構群２群、ピットが検出された。

SK23土坑

南トレンチの中央西端で検出された。一辺60cm×80cmの長方形で、深さは最深部でも８cmである。下面に凹凸がある。遺物は出土していない。SD21、SD22溝跡に切られている。

SK24土坑

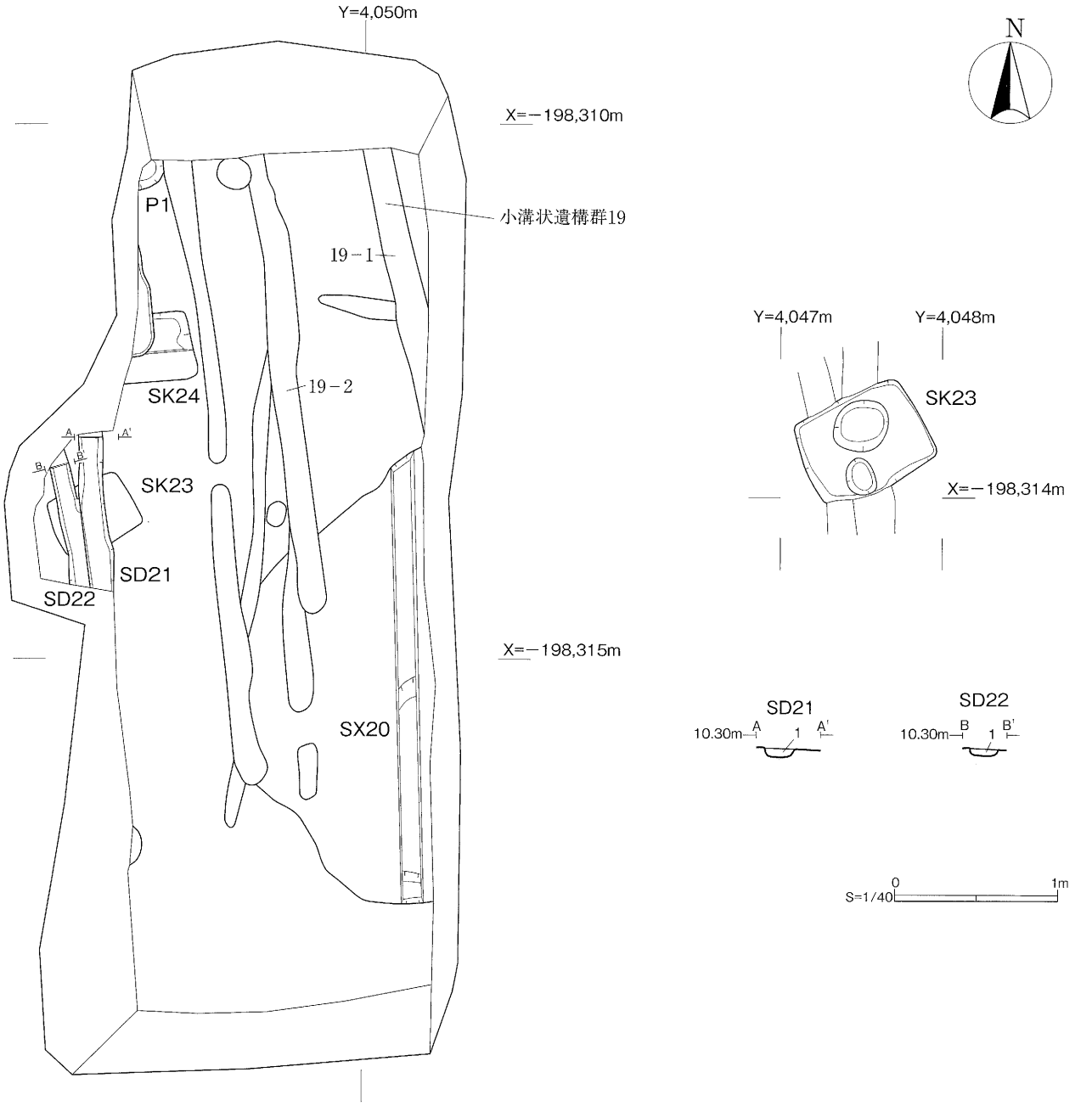
南トレンチ北西部で検出された。南北60cm×東西60cm以上の方形を呈すると考えられるが、西端部が調査区外へ延びている。深さは３cm程度である。遺物は出土していない。小溝状遺構群19に切られている。

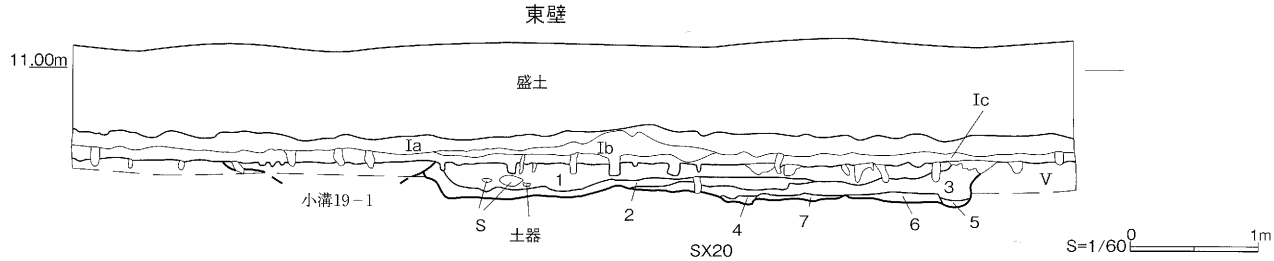
SX20性格不明遺構

南トレンチ東部で検出され、東半は調査区外へ延びている。平面形は不整形を呈し、検出長では南北4.2m、東西1.7mで、深さは25～35cmである。断面形は逆台形を呈するが、中央部がやや高く、北側、南側はそれに比べ深くなる。さらに南端壁際では溝状の落ち込みが認められる。堆積土は７層で、第１層は黒色のシルト質粘土層であり、炭化物や焼土がブロック状に多量に含まれている。第２層、第３層もシルト質粘土層であるが、この炭化物、焼土の含有量が少なくなる。第４層は中央の一部に堆積する焼土層である。第５層は褐色のシルト質粘土層であり、壁際の溝状の落ち込みに堆積している。第６層は褐色の砂質シルト層であるが、黒褐色の粘土層が帯状に堆積し、しまりが非常に強い。第７層は暗褐色の砂質シルト層である。第６層と極めて似た土質で、深さも同じであり、平坦面を形成している。なお、中央部底面は基本層のⅤ層上面であるが、硬化している。遺物は第１層中より須恵器甕片や土師器片など比較的多く出土している。また、第２、３層からは土師器小片が少量出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群19に切られている。

SD21溝跡

南トレンチ拡張部で検出された、南北方向に縦走する溝跡である。上幅約20cm、下幅10～13cmで、深さは５cmである。方向はN-14°-Wで、断面形は扁平な蒲鉾形を呈し、底面は平坦である。堆積土は１層であり、土師器坏片な





	層位	色調	土質	備考
基本層	Ⅰa	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	旧水田層、酸化鉄少量、マンガン粒微量
	Ⅰb	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	擬似畦畔B、酸化鉄多量、マンガン粒微量
	Ⅰc	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄集積層、マンガン粒微量、Ⅰb層よりシルトを多く含む
	Ⅱ	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄やや多量、マンガン粒多量、北トレンチ北部で部分的に堆積
	Ⅲ	10YR4/6 褐色	砂質シルト	酸化鉄多量、マンガン粒少量、にぶい黄橙色（10YR4/3）粘土質シルトブロック多量、北トレンチ北部に堆積
	Ⅳ	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄少量、マンガン粒やや多量、北トレンチに堆積
	Ⅴ	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	上面にマンガン粒集積、酸化鉄少量、灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土ブロックやや多量、南トレンチ南端で上部の土色が暗くなる
SX20	1	7.5YR2/1 黒色	シルト質粘土	炭化物ブロック多量、焼土ブロックやや多量、灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土ブロック多量、北部で礫が集中、遺物も多く出土
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒多量、焼土ブロック少量、灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土ブロック多量、遺物出土
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、焼土ブロック微量、灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土ブロックやや多量
	4	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	焼土層、しまりが非常に強い
	5	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	黒褐色（10YR2/3）粘土ブロック少量
	6	10YR4/6 褐色	砂質シルト	上面に炭化物少量、黒褐色（10YR2/2）粘土が帯状に堆積、しまりが非常に強い、貼床
	7	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	上面に炭化物ブロック少量、粘土を含む、貼床か
SD21	1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄少量、マンガン粒やや多量
SD22	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒少量
小溝19-1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量、灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土ブロックやや多量

第38図　h区南トレンチ平・断面図

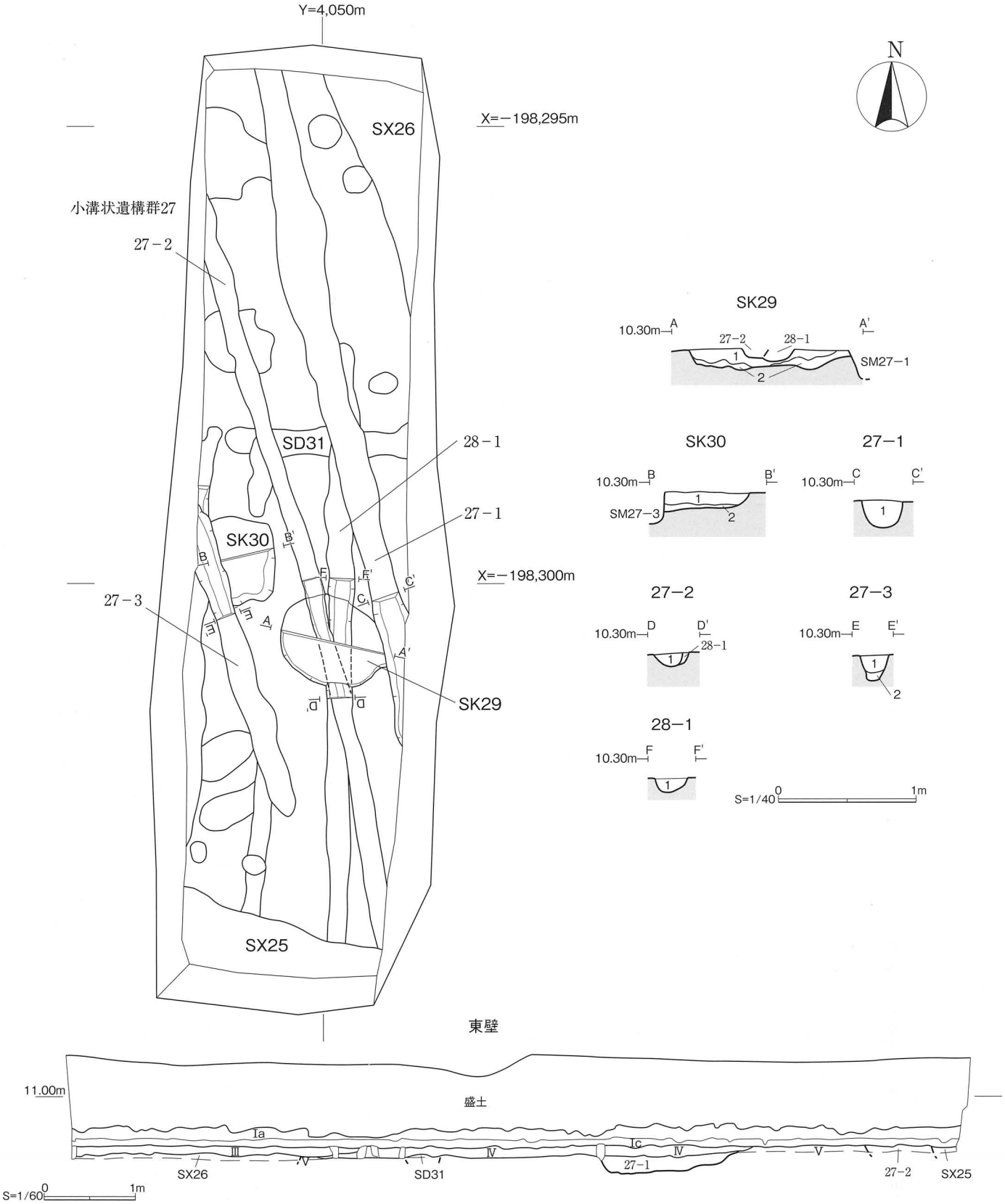
1．調査区全景（南から）

2．調査区東壁断面（南西から）

3．SK23検出状況（南から）

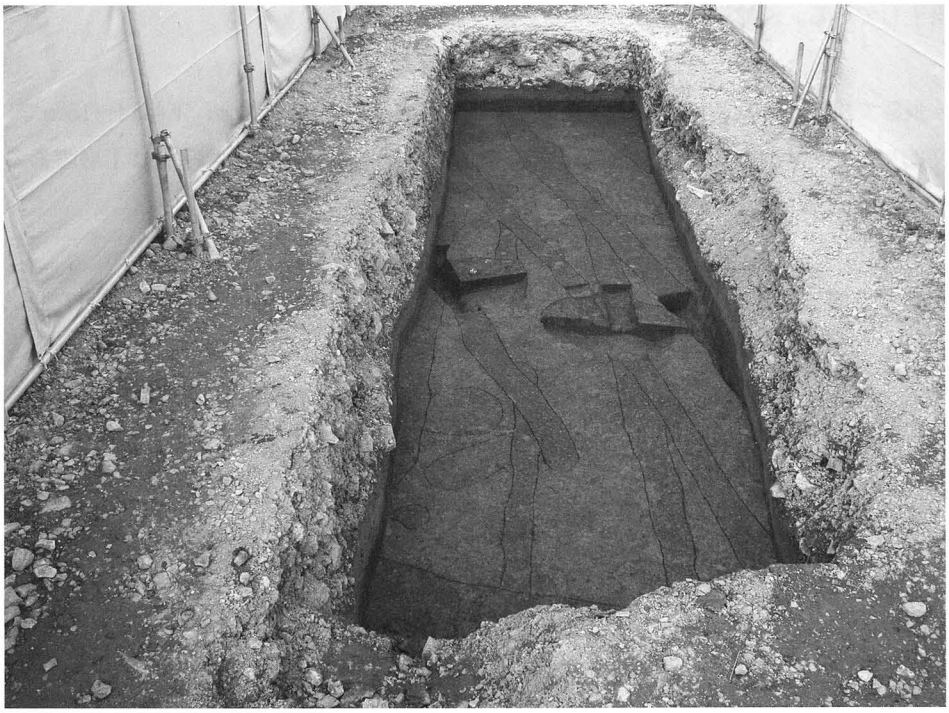
4．SK23完掘状況（南から）

写真図版27　h区南トレンチ



	層位	色　　調	土　　質	備　　考
SK29	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	焼土ブロック多量、酸化鉄多量、灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土ブロックやや多量
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒少量、Ⅴ層ブロック少量
SK30	1	10YR2/3　黒褐色	粘土	炭化物ブロック多量、酸化鉄少量
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	Ⅴ層ブロック極多量
SX25	1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	酸化鉄多量、マンガン粒やや多量
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	上面にマンガン粒集積、炭化物ブロック微量、灰黄褐色（10YR5/2）粘土ブロック多量
SX26	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄少量、マンガン粒多量、焼土ブロックが一部集中
小溝27-1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	酸化鉄微量、マンガン粒少量、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土ブロック少量、Ⅴ層ブロック少量
小溝27-2	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	マンガン粒やや多量、にぶい黄橙色（10YR6/4）粘土ブロック少量、Ⅴ層ブロック少量
小溝27-3	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	炭化物粒少量
	2	10YR4/4　褐色	粘土	Ⅴ層ブロック少量
小溝28-1	1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	炭化物粒少量、Ⅴ層ブロック少量
SD31	1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒やや多量、にぶい黄橙色（10YR4/3）粘土ブロック多量

第39図　h区北トレンチ平・断面図

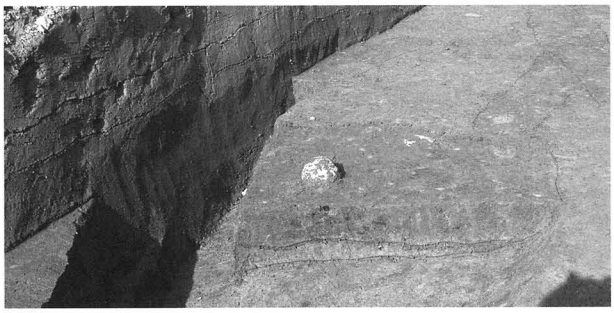


1．調査区全景（南から）

2．SK29検出状況（西から）

3．SK29断面（南西から）

4．SK30検出状況（西から）



5．SK30断面（南東から）

写真図版28　h区北トレンチ

ど小片２点が出土している。SK23土坑、SD22溝跡を切っている。

SD22溝跡

南トレンチ拡張部で検出された、南北方向に縦走する溝跡である。上幅約20cm、下幅14～15cmで、深さは４cmである。方向はN-23°-Wで、断面形は扁平な蒲鉾形を呈し、底面は平坦である。堆積土は１層である。SK23土坑を切り、SD21溝跡に切られている。

小溝状遺構群19

南トレンチを南北方向に縦走する溝跡群で、4条検出された。上幅15～30cmで、方向はN-17～23°-Wである。小溝状遺構群19-2より内面黒色処理された非ロクロ土師器の坏片が１点出土している。

南トレンチではその他、小溝状遺構群19に切られ、SX20性格不明遺構を切る、南北方向の小溝跡が２条検出されている。さらに、小溝状遺構群19に切られる東西方向の溝跡が１条検出されている。

SK29土坑

北トレンチの中央やや南寄りで検出された。南北1m、東西1.1m以上のやや不整な円形を呈する。深さは15～20cmで、断面形は不整形である。堆積土は２層で、第１層は暗褐色のシルト質粘土層であり、焼土をブロック状に多量に含んでいる。第２層はにぶい黄褐色のシルト質粘土層で、基本層のⅤ層をブロック状に少量含んでいる。遺物は出土していない。小溝状遺構群27、28に切られている。

SK30土坑

北トレンチの中央西部、SK29土坑の北西に隣接して検出された。南北80～90cm、東西60～80cmの不整方形で、深さは約15cmである。断面形は扁平な蒲鉾形を呈すると考えられる。堆積土は２層で、第１層は黒褐色の粘土層であり、炭化物をブロック状に多量に含んでいる。第２層は暗褐色のシルト質粘土層で、基本層のⅤ層をブロック状に非常に多く含んでいる。遺物は第１層より土師器片が少量出土したほか、第２層より非ロクロ土師器のC-2甕（第40図2）が出土している。この甕片は表面の磨滅が著しいが、外面には須恵器甕の平行叩き目に似た調整が施されている。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群27、28に切られている。

SX25性格不明遺構

北トレンチ南端で検出された。東西、南側は調査区外に延びているため、規模、形状は不明である。堆積土は２層である。小溝状遺構群27、28を切っている。

SX26性格不明遺構

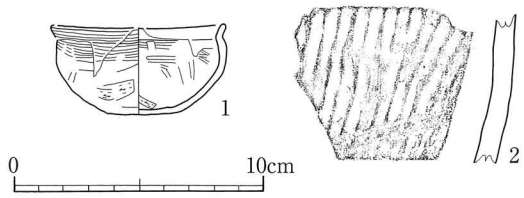
北トレンチ北東隅で検出された。南東、北西方向へ調査区外に延びているため、規模、形状は不明である。堆積土中に焼土の集中部が認められる。

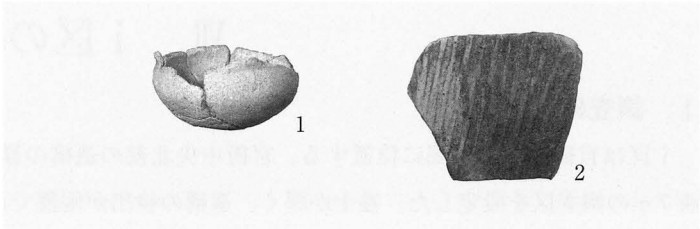
SD31溝跡

北トレンチ中央部を東西方向に横断する溝跡である。上幅25～40cmで、方向はE-0°-Nである。小溝状遺構群27、28に切られている。

小溝状遺構群27

北トレンチを北西から南東方向へ斜走する溝跡群であり、３条検出された。土坑の調査に伴い、一部掘下げを行った。上幅20～50cm、下幅８～20cmで、深さは10～20cmである。方向はN-22～28°-Wで、断面形はU字形である。堆積土は暗褐色の粘土層１層である。小溝状遺構群27－3にのみ下部に第２層として褐色の粘土層が堆積している。遺物については、小溝状遺構群27－1より土師器甕片など小片３点、小溝状遺構群27－3の第１層より、外面にハケメ調整が施された土師器小片が１点出土している。遺構の重複関係としては、SK29、SK30土坑、SD31溝跡、小溝状遺構群28を切り、SX25性格不明遺構に切られている。





No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	法量（cm）	調整・特徴
1	C-1	V層	非ロクロ土師器・小型坏	口径7.0 底径2.4 器高3.6	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ　砂粒・石英・白針少量
2	C-2	SK30・2層	非ロクロ土師器・甕	不明	外面：平行叩き目?、酸化鉄付着　内面：一部ナデ　砂粒・石英・白針を含む

第40図　h区出土遺物（S=1/3）

小溝状遺構群28

北トレンチを南北方向に縦走する溝跡群であり、4条検出された。土坑の調査に伴い、一部掘下げを行った。上幅20～26cm、下幅10～15cmで、深さは10cmである。方向はN-0～16°-Eである。小溝状遺構群28－1では、断面形はやや扁平なU字形で、遺構の重複関係としては、SK29、SK30土坑、SD31溝跡を切り、SX25性格不明遺構、小溝状遺構群27に切られる。

遺構外の出土遺物としては、南トレンチではV層上面で土師器片が少量出土し、北トレンチではV層上面でC－1小型坏（第40図1）や土師器片、須恵器甕片が出土している。

4．まとめ

調査の結果、官衙関連の遺構は検出されなかった。

SX20性格不明遺構については、平面形が不整形であること、カマド等の施設が検出されなかったことから性格不明遺構としたが、堆積土の第６、７層上面と、中央部の基本層位V層の上面が共に硬化していることから、竪穴住居跡の可能性がある。また、SD21、SD22、SD31溝跡は規模や堆積土の状況から、小溝状遺構群と同様の畑の耕作に関わる遺構と考えられる。

Ⅶ．ｉ区の調査

１．調査概要

ｉ区は官衙の中央北部に位置する。官衙中央北部の遺構の様相を把握するために調査を行った。南北6.5m×東西７mの調査区を設定した。盛土が厚く、遺構の検出が困難であった。遺構の検出は南北３m×東西３mの範囲でしか調査を行えなかった。盛土、耕作土を重機で除去し、Ⅲ～Ⅴ層上面でそれぞれ精査を行った。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

２．基本層序

調査地点には盛土が1.5～1.8mあり、それより下にⅠ～Ⅴ層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作土であり、Ⅰa、Ⅰb層に細分される。Ⅱ～Ⅴ層はそれぞれ「Ⅱ層」から「Ⅴ層」に相当する。

３．遺構と遺物

Ⅴ層上面において、小溝状遺構群２群、性格不明遺構１基、ピットが検出された。

小溝状遺構群32

調査区を南北方向に縦走する溝跡群で、３条検出された。上幅25～30cmで、方向はN-5～15°-Eである。小溝状遺構群33を切っている。

小溝状遺構群33

調査区を東西に横断する溝跡群で、３条検出された。上幅20～40cmで、方向はE-2°-NからE-4°-Sである。小溝状遺構群32に切られる。

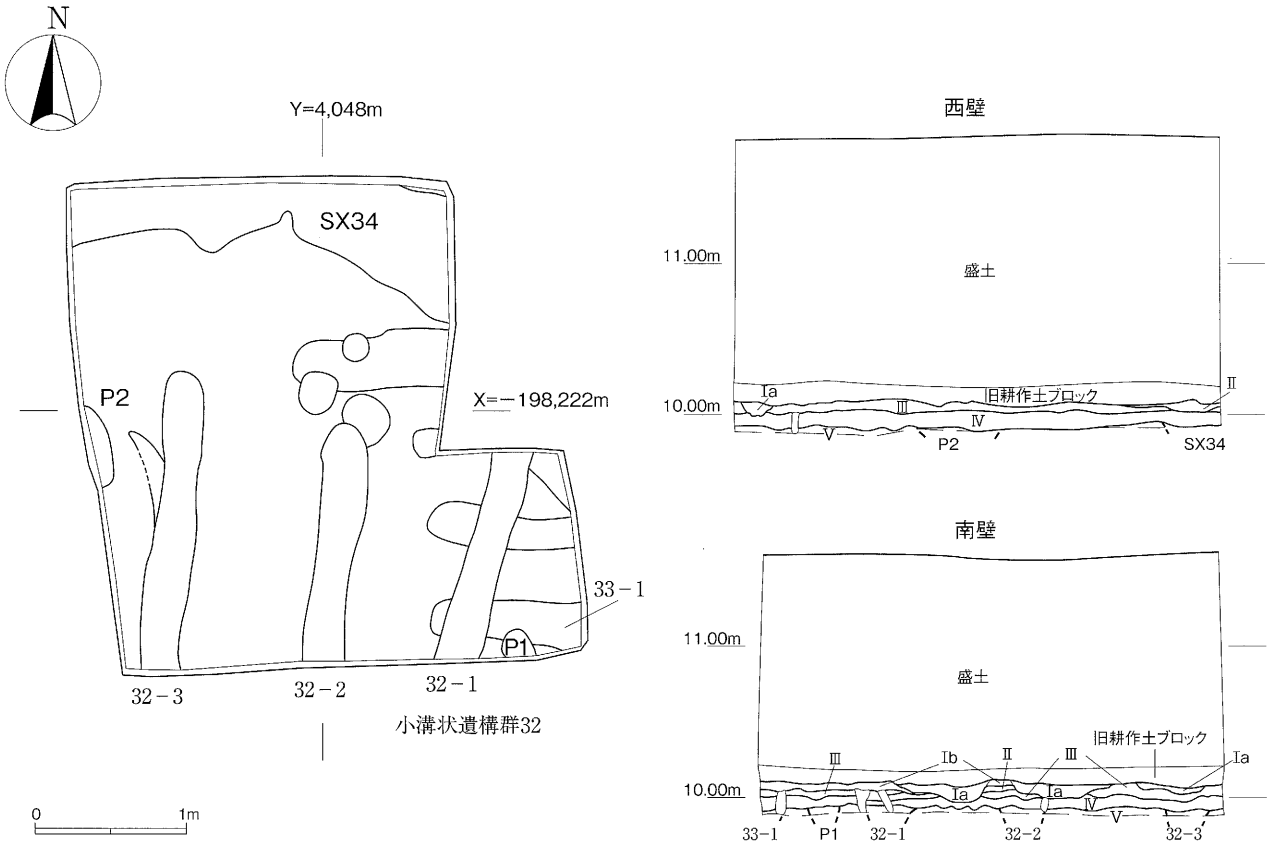
SX34性格不明遺構

調査区北端で検出された。東西、北側は調査区外へ延びており、規模、形状は不明である。他遺構との重複関係も認められなかった。

ピットは６基検出された。また、この調査では遺物は全く出土しなかった。

４．まとめ

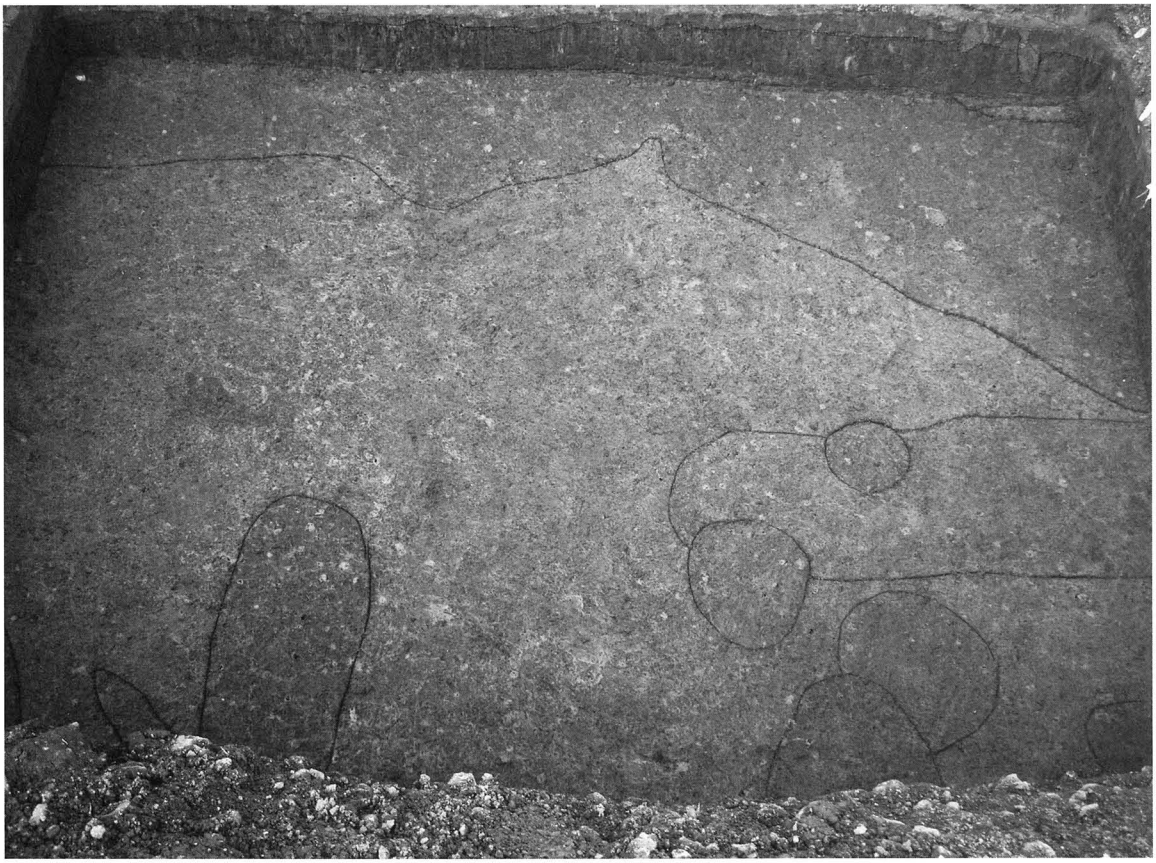
調査の結果、官衙関連の遺構は検出されなかった。



	層位	色調	土質	備考
基本層	Ⅰa	2.5Y4/1　黄灰色	シルト質粘土	旧耕作土、酸化鉄やや多量、マンガン粒微量、下層ブロック少量、部分的に堆積
	Ⅰb	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄集積層、水田床土か
	Ⅱ	10YR3/3　暗褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒少量、部分的に堆積
	Ⅲ	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	酸化鉄極多量、マンガン粒やや多量
	Ⅳ	10YR3/4　暗褐色	粘土	酸化鉄微量、マンガン粒多量（北部では上面に集積）
	Ⅴ	10YR4/4　褐色	粘土	酸化鉄やや多量、マンガン粒少量、シルト少量
小溝32-1	1	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒多量
小溝32-2	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、Ⅴ層ブロック少量
小溝32-3	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、Ⅴ層ブロック少量
小溝33-1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量、Ⅴ層ブロック多量
P1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量
P2	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	マンガン粒やや多量、Ⅴ層ブロック少量
SX34	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒やや多量

第41図　i区平・断面図（S=1/50）

1．i区南部全景（北から）



2．i区北部遺構検出状況（南から）

写真図版29　i区

Ⅷ. ｊ区の調査

１．調査概要

ｊ区は官衙区画溝南西コーナーより西に80ｍの場所に位置する。区画整理事業に伴う調査の大野田古墳群14B2区において、官衙の区画溝跡に平行して南北に延びるSD92溝跡を確認しており、その溝跡がL字に屈曲して、これまで検出された南辺との接続がないか、あるいは別方向の区画溝として官衙の拡大がないかを確認するために調査を行った。調査区は大野田古墳群14B2区に北側が接するように東西７ｍ×南北３ｍの調査区を設定した。重機により表土を除去し、Ⅱ層上面で精査を行った。その結果、SD92溝跡がさらに南へ延びていることを確認した。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

２．基本層序

調査地点には盛土が約80cmあり、それより下にⅠ～Ⅱ層を確認した。Ⅰ層は旧水田耕作土である。Ⅱ層は褐色の粘土層であり、「Ⅴ層」に相当する遺構検出面である。

3. 遺構と遺物

Ⅱ層上面において、溝跡１条、土坑１基、ピットを検出した。

SD92溝跡

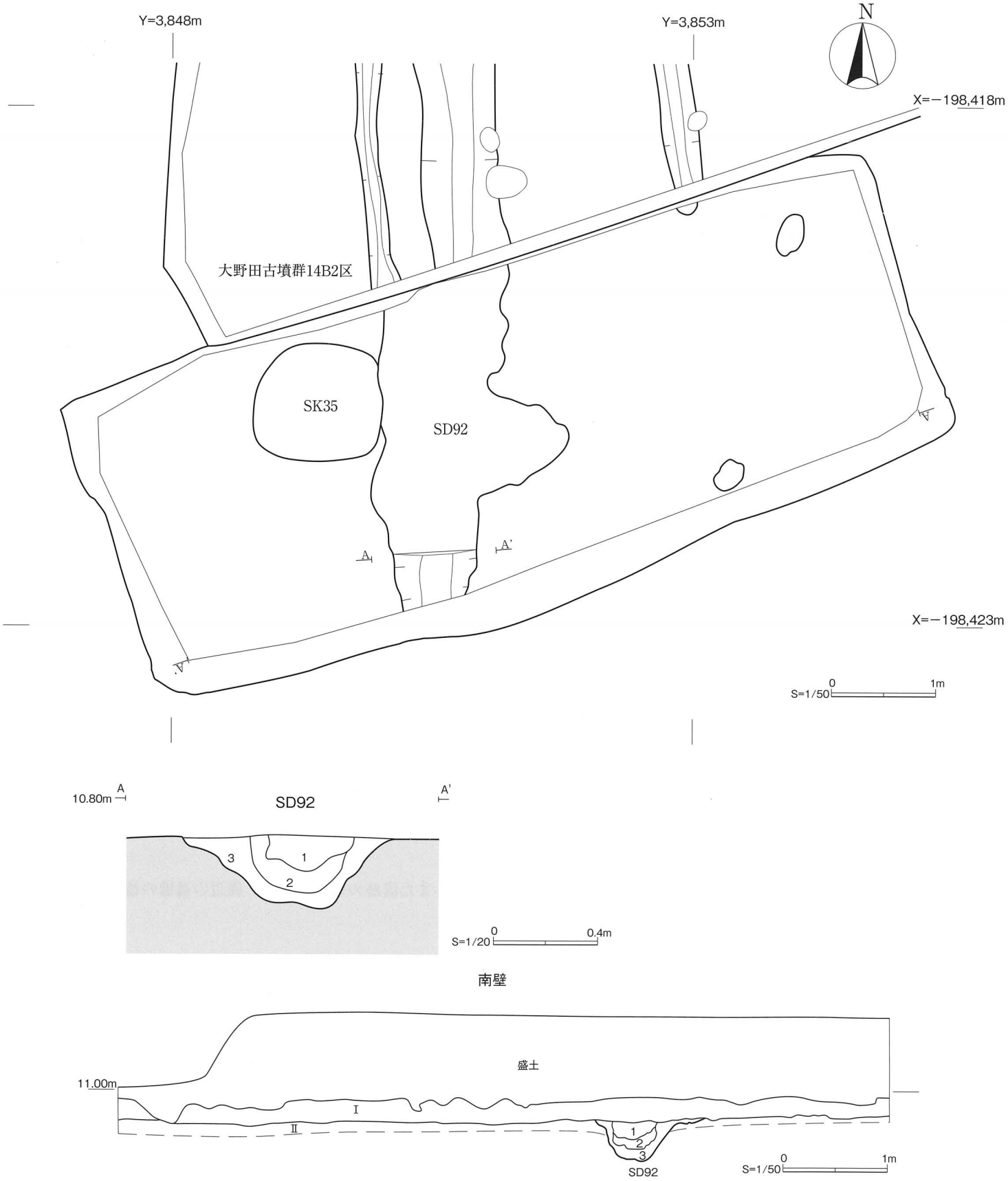
大野田古墳群14B区で確認した溝跡の延長部で、調査区のほぼ中央部を南北に縦走している。上幅60～160cmで、深さ約25cmである。堆積土は３層で、第１層は灰黄褐色の粘土層、第２層は灰黄褐色と褐色の粘土がブロック状に混合している層、第３層はにぶい黄褐色の粘土をブロック状に多量に含む灰黄褐色の粘土層である。第１層中から土師器片が１点出土している。SK35土坑に切られている。

SK35土坑

調査区中央の西寄りに確認した。径1.1～1.4ｍの不整円形で、SD92溝跡を切っている。

4. まとめ

SD92溝跡は、出土している遺物が少なく年代が確定できない。また溝跡の規模や方向、周辺の遺構の様相を見る限りでは、官衙の区画溝と断定することは難しい。



	層位	色　　調	土質	備　　考
基本層	I	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	旧水田層
	II	10YR4/4　褐色	粘土	マンガン粒少量
SD92	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト粒少量
	2		粘土	灰黄褐色（10YR4/2）と褐色（10YR4/4）粘土ブロック（φ5〜10㎜）の混合
	3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土ブロック（φ1〜2㎝）多量、黒褐色（10YR3/2）粘土ブロック（φ5㎜）少量

第42図　j区平・断面図

1．遺構検出状況（南から）

2．遺構掘削状況（北から）

3．SD92断面（南西から）

写真図版30　j区

第４章　総括

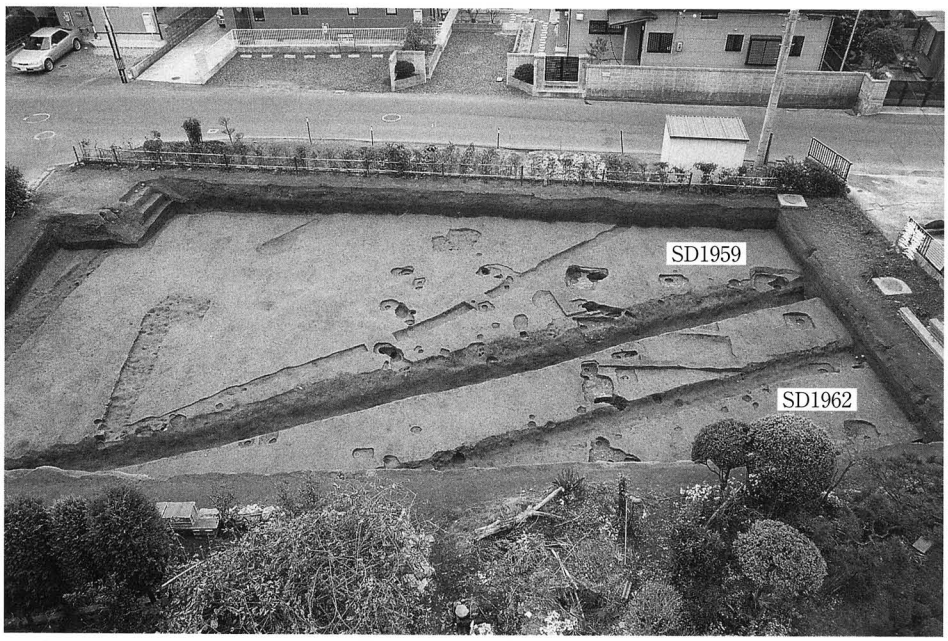
Ⅰ．郡山遺跡

今年度の郡山遺跡の調査は、個人住宅の調査のみであった。まとまった面積の調査でなかったが、以下の３点において今後は留意し、検討して行かねばならない課題を含んでいると考えるものである。

まずⅡ期官衙の外溝のあり方について、北西部と南部の２地点の調査からである。今回調査が実施された第197次調査区は、本来は外溝が南北に通過する地点であった。攪乱により遺構の検出状況が良好でなかったこともあるが、これまで官衙関連の遺構が検出されていた土層がなく、全く異なった土層が堆積していた。周囲の第169次、第170次調査（平成17年度）、第182次調査（平成19年度）でも、ほぼ同様の結果であり、古代の遺構面が分布していない可能性がある。これは今年度まで調査が行われてきた「あすと長町土地区画整理事業」に伴う発掘調査の、郡山遺跡北部の調査地点でも同じような状況であり、広瀬川等の旧河川による削平、それによる異なる土層の堆積のためと考えられる。したがって外溝の北東部におけるコーナー部の検出は不可能な状況であるが、これまでの土地区画整理事業による調査で北西コーナー部を検出し、東に伸長する様相や、第166次調査（平成17年度）や第188次調査（平成20年度）で外溝が北に伸長する様相からは、とりあえず開削された状況を想定しておくことにする。当時の河川との位置関係や、場合によっては接続の可能性も考慮に入れた視点が今後は必要なのかもしれない。

第194次調査では、南の第41次調査（昭和58年度）、第94次調査（平成４年度）で検出されていたSD476溝跡の延長部が検出された。第41次調査の南端からは約57m以上あり、さらに外溝の南辺付近まで延びていく様相である。重複のあるSD2213溝跡との重複など整理する課題は残されているが、SD476溝跡の堆積土上層に灰白色火山灰が含まれていることや、官衙廃絶期以降の遺物が含まれていないこと、地点により上幅が２ｍを越え、深さも80cmに達することからは、官衙の中にあって重要な区画溝になる可能性が考えられる。とくに南方官衙東地区の建物群との関連を、今後は検討して行かねばならない。

第198次調査において、SD2223、2227、2228溝跡を検出した。詳細な年代は不明であるが、形状や方向からは第134次調査（平成12年度）で検出されたSD1959、1962溝跡との関連が考えられる。そうであれば官衙の時期ではなく、古代の末期か、それ以降に開削されたものと推定される。開削の方向が直線的で、SD1959溝跡やSD2223溝跡の規模からは、人為的な開削や計画性があることを想起させる。周辺での城館や屋敷地などとの関連を考慮に入れ、これら溝跡の調査事例の蓄積を待ちたい。



第134次調査（北から）

Ⅱ．大野田官衙遺跡

今年度の調査の結果からは、官衙の東西幅が明らかになったこと、当初想定した官衙内部に３列の建物列が存することは、ほぼないであろうということが考えられた。

区画溝跡については、今年度の調査で四辺が確定し、東西188～196m、南北245～259mで、コーナーの明らかになった南辺で東西長198m（コーナー部外側）である。この遺跡は新旧２時期あることが明らかになっている。ただし地点により掘り直された新しい時期の溝跡は検出される層位に違いがあり、官衙として存続していた時期の遺構か、掘立柱建物跡の建替えに伴うかについては、今後の各地点における整理作業により判断していくべきものと考える。

建物跡の配置については、SB60の南側に南北棟の建物が配置されていた状況は、ａ区ならびに昨年度の袋前遺跡第2次調査区からは想定されないだろうと考えられる。またｂ、ｃ、ｈ区の調査からは、SB64とSB121の中間や北よりに東西棟の存在を考えることはできないであろう。よって官衙内部は、今のところ北部のSB60を除いては、空いていると考えるべきである。なお北と南を遮蔽しているSD57溝跡については、外回りの区画溝との接続や、それらの溝跡の開削された層位等の状況の把握を待って判断したい。

この官衙の様相からは、どのような機能が考えられるのだろうか。改めて発見されている建物跡について特徴を見ると、柱痕跡は直径30～40cm、柱掘り方の大きさ、深さも１ｍを超えているものがある。建物の規模や柱材の太さ、柱材を設置する掘り方など、規模の大きいことが顕著である。方向もほぼ真北（真東西）方向で揃えられている。

これらの建物のうち総柱建物跡であるSB121は、柱痕跡の直径が40cm程あり、掘り方も一辺１ｍを超えている。SB64についても同等の規模である。これらは倉庫と考えてよく、重量物の収納に対応した構造である。

西列で見る限り総柱建物跡のSB64と、南側の側柱建物跡のSB464との間に塀や溝の遮蔽施設がなく、同じ空間に立ち並んでいるように見える。桁行の長い建物跡であるSB464は、本来なら郡庁院を構成するような規模、構造の建物跡である。よってこれらの側柱建物跡は、単なる事務棟と考えるよりは、北の倉庫と関連した倉庫の一種である「屋」と見ることもできる。北のSB64・121（倉庫建物）と同一の敷地空間に立ち並ぶことや、南の区画溝（SD73、253、421）との間に別な官衙ブロックとなるような建物や塀が配置されていないことから、倉庫として伴に立ち並んでいた可能性は見出せないだろうか。

このような側柱建物を倉庫と見る例は、東北地方では東山遺跡（陸奥国賀美郡衙）、関和久遺跡（陸奥国白河郡衙）で正倉と想定された地区で検出されている。また西日本にはなるが下高橋遺跡（筑後国御原郡衙）でも総柱建物跡と側柱建物が一列に並ぶように配置されている。ただし大野田官衙遺跡の場合、これらの遺跡に較べると建物の棟数が少なく、倉庫院として機能していたとまでは言えないと考えられる。

建物の方位や出土遺物の年代からは、郡山遺跡Ⅱ期官衙との関連が考えられないだろうか。Ⅱ期官衙は陸奥国府と考えられることから、国庁に該当する施設のほかに様々な機能が必要とされている。一般には国の行政事務や役所の維持、運営のための機関（曹司）、国司らが宿泊する施設（国司館）、学校や市などもあったと言われている（註１）。

大野田官衙から郡山遺跡までは、北東に1.5km程しか離れていない。Ⅱ期官衙を構成する遺跡群のうち、倉庫風建物は寺院西方建物群に３棟あるのみで、きわめて少ない。Ⅰ期官衙期に中枢部周辺に倉庫群が配置されていたのとは大きく異なっている。このような様相では、物資の集積をする機能を補完する曹司の可能性はないだろうか。曹司は国庁と一体となって置かれる場合が多いが、伯耆国では不入岡遺跡のように、稀に離れて設置される場合もある（註２）。

なお陸奥国には、行方団、白河団、磐城団、名取団、玉造団、安積団、小田団などの軍団があったことが知られ

ている。このうち名取団は胆沢城出土の漆紙文書の中に関連する文書が含まれているという（註３）。軍団の遺構について具体的な様相は明らかになっていないが、練兵場や武器庫、食料庫があることが考えられ、御笠団や遠賀団などの軍団印の存在からは公文書を作成する官舎も存在していた可能性がある。また兵舎として側柱建物跡を見る可能性もあろう（註４）。しかし全国的に見て類例が少ない。例として挙げられている岡山県津山市大田茶屋遺跡でも軍団跡と断定するまでには至っていない（註５）ようである。

なおその他に郡家や駅家などの可能性も考えられるが、以下のことからそれらの可能性は取りあえず少ないと考えておく。大野田官衙遺跡の周囲では，竪穴住居跡や小規模な掘立柱建物跡は発見されているが，官衙や寺院に該当する遺構の広がりは確認されていない。郡家とされる関和久遺跡や根岸遺跡のように南北に諸院が隣接する様相や、泉廃寺、弥勒寺官衙遺跡のように東西に諸院が配置されるような様相ではない。したがって郡衙の本体と見ることは難しいと考えられる。しかしこの地域が名取郡の北部に位置し、名取川以南の地域と区別されることから、郡衙の本体ではないが、郡衙の別院とする見方は可能かもしれない。名取郡は南北朝時代には名取郡北方、南方と、２つの地域に分けて呼ばれており、古代まで遡るなら「北縣」、「南縣」の存在も考慮されるからである。

区画の中に少数の建物群が配置される遺跡としては，「駅家」が挙げられる。遺跡として明らかになった例は少ないが、子犬丸遺跡（山陽道布施駅家）や落地遺跡（　同　野磨駅家）などがある（註６）。それらは70～90m四方を築地で囲み５～７棟の建物が配置されている。主要殿舎となる東西棟の建物が中軸線上にある構造となっている。現在発見されている駅家の類例からは、大野田官衙遺跡が駅家に該当するその可能性は少ないと考えられる。

様々な可能性を取り上げてみたが、今のところ断定しがたいというところである。遺構の様相を明らかにしていくことに努めるとともに、文字資料等の出土に期待していきたい。さらなる検討が必要である。

註１　山中敏史2004a「国府の空間構成」『古代の官衙遺跡』Ⅱ pp.128-129

註２　山中敏史2004b「曹司」『古代の官衙遺跡』Ⅱ　p141の図7参照。

註３　第43号漆紙文書「戸番文書」（平川1989、1994、下向井2005）

註４　岡田茂弘2003「古代の兵舎について」『考古学に学ぶ』Ⅱ pp.427-441

註５　大田茶屋遺跡の報告では官衙の性格について様々な可能性が指摘されており（岡本1998a、b）、下向井龍彦氏が軍団跡に比定している（下向井2005）。

註６　岸本道昭2006『山陽道駅家跡』の「瓦屋赭堊の布勢駅家」（pp.33-68）、「二つの野磨駅家」（pp.69-80）
木本雅康2008『遺跡からみた古代の駅家』のpp.8-20

引用・参考文献

荒井　格　2008 「大野田古墳群他―官衙関連遺構―」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.65-72

大池昭二　1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』11-4　pp.228-235

岡田茂弘　2003 「古代の兵舎について」『考古学に学ぶ』Ⅱ同志社大学考古学シリーズⅧ　pp.427-441

岡本寛久　1998a 「古代の官衙について」『大田茶屋遺跡2、大田障子遺跡、大田松山久保遺跡、大田大正開遺跡、大田西奥田遺跡』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129　pp.300-301

岡本寛久　1998b 「柵列について」『大田茶屋遺跡2、大田障子遺跡、大田松山久保遺跡、大田大正開遺跡、大田西奥田遺跡』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129　p302

小山正忠、竹原秀雄　1989 『新版標準土色帖』1989年版　日本色研事業株式会社

岸本道昭　2006 『山陽道駅家跡』日本の遺跡11　同成社

木本雅康　2008 『遺跡からみた古代の駅家』日本史リブレット69　山川出版社

古泉　弘　2001a 「遺体収納容器」『図説江戸考古学研究事典』 柏書房　pp.143-144

古泉　弘　2001b 「煙管」『図説江戸考古学研究事典』 柏書房　pp.189-190

小口雅史　2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題」『日本律令制の展開』 吉川弘文館

下向井竜彦　2005 「軍団」『文字と古代日本』2　吉川弘文館　pp.296-318

仙台市教育委員会　1981 『六反田遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書34

仙台市教育委員会　1984 「第41次発掘調査」『郡山遺跡』Ⅳ　仙台市文化財調査報告書64　pp.67-69

仙台市教育委員会　1989a 「第79次発掘調査」『郡山遺跡』Ⅸ　仙台市文化財調査報告書124　pp.42-46

仙台市教育委員会　1989b 『富沢遺跡、泉崎浦遺跡』 仙台市文化財調査報告書126

仙台市教育委員会　1993 『郡山遺跡』第94次発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書177

仙台市教育委員会　1999 「第118次発掘調査」『郡山遺跡』ⅩⅨ　仙台市文化財調査報告書234　pp.17-18

仙台市教育委員会　2000 「六反田遺跡第５次調査」『大野田古墳群、王ノ壇遺跡、六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書243　pp.295-394

仙台市教育委員会　2001a 「第134次発掘調査」『郡山遺跡』21　仙台市文化財調査報告書250　pp.21-37

仙台市教育委員会　2001b 『郡山遺跡』第124次発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書251

仙台市教育委員会　2004 「大野田古墳群」『平成16年度宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』pp.17-22

仙台市教育委員会　2005a 「大野田古墳群」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.299-305

仙台市教育委員会　2005b 『洞ノ口遺跡』仙台市文化財調査報告書281

仙台市教育委員会　2006a 「第166次発掘調査」『郡山遺跡』26　仙台市文化財調査報告書296 pp.11-28

仙台市教育委員会　2006b 「第169次発掘調査」『郡山遺跡』26　仙台市文化財調査報告書296 p33

仙台市教育委員会　2006c 「第170次発掘調査」『郡山遺跡』26　仙台市文化財調査報告書296 pp.34-37

仙台市教育委員会　2008a 「第182次発掘調査」『郡山遺跡』28　仙台市文化財調査報告書327 pp.7-8

仙台市教育委員会　2008b 「六反田遺跡、大野田古墳群」『平成20年度宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』pp.99-102

仙台市教育委員会　2009a 「(仮称) 大野田官衙遺跡」『第35回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.242-249

仙台市教育委員会　2009b 「第188次発掘調査」『郡山遺跡』29　仙台市文化財調査報告書347　pp.3-16

仙台市教育委員会　2009c 「(仮称) 大野田官衙遺跡」『郡山遺跡』29　仙台市文化財調査報告書347　pp.98-114

仙台市教育委員会　2009d 「大野田官衙遺跡」『平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』pp.27-32

仙台市教育委員会　2010 「大野田官衙遺跡」『第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.51-58

武田健市　1998 『大日北遺跡』多賀城市文化財調査報告書49
平川　南　1989 『漆紙文書の研究』吉川弘文館
平川　南　1994 『よみがえる古代文書』岩波書店
町田洋・新井房夫　1992 『火山灰アトラス』東京大学出版会
町田洋・新井房夫　2003 『新編　火山灰アトラス』東京大学出版会
町田洋・ほか1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51-9　pp.562-569
山田一郎・庄子貞雄　1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡』昭和57年度発掘調査概報
宮城県多賀城跡調査研究所年報1979　pp.97-102
山中敏史　2004a 「国府の空間構成」『古代の官衙遺跡』Ⅱ 遺物、遺跡編　奈良文化財研究所　pp.128-129
山中敏史　2004b 「曹司」『古代の官衙遺跡』Ⅱ 遺物、遺跡編　奈良文化財研究所　pp.136-143

調査成果の普及と関連活動

1．主な広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当	主催
2009. 4．3	郡山遺跡展示室見学	森田	二軒茶屋歩く会
4．18	郡山遺跡展示室見学	長島	TSSハイキング愛好会
6．10	郡山遺跡展示室・ピロティ見学	齋藤	多賀城観光ボランティアガイド
6．18	郡山遺跡展示室・ピロティ見学	齋藤	仙台を見る・知る・学ぶ会
6．20～21	大野田展	整備活用係	文化財課
7．7	郡山遺跡展示室見学	齋藤	仙台市立東長町小学校
9．12	ＪＲ小さな旅	整備活用係	ＪＲ長町駅
9．14	郡山遺跡展示室・ピロティ見学	長島	明治青年大学里山自然観察会
9．29	郡山遺跡展示室・ピロティ見学	長島・齋藤	横浜歴史博物館（古代史料を読む会）
10．1	郡山遺跡展示室・ピロティ見学	長島	諏訪町内会
11．6	郡山遺跡展示室・ピロティ見学	齋藤	ディスカバー太白
11．21	郡山遺跡ピロティ見学	吉岡・長島	仙台市立郡山中学校保護者会
4．8～（毎月８日）	薬師堂手づくり市	整備活用係	薬師堂手づくり市実行委員会

2．調査指導委員会の開催

大野田官衙遺跡調査現地指導　　平成21年６月３日～４日

平成21年度　第１回　郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会

平成21年８月11日　仙台市役所北庁舎Ｂ棟１階会議室

・平成21年度前半期の調査成果について

平成21年度　第２回　郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会

平成22年３月５日　仙台市役所北庁舎2階会議室

・平成21年度の調査成果について

・平成22年度の調査計画について

3．展示室の利用者

平成21年４月～平成22年３月　　419名

展示室見学風景

薬師堂手づくり市

大野田展

大野田展

報　告　書　抄　録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡30
副書名	郡山遺跡・大野田官衙遺跡　平成21年度発掘調査概報
巻次	30
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第373集
編著者名	長島栄一、森田賢司、森田義史、齋藤義彦、廣瀬真理子、千葉恭彦
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　　TEL022－214-8893～8894
発行年月日	2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間		調査面積（㎡）	調査原因
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山	4100	1003	38° 12′ 58″	140° 53′ 41″	194次	2009・4・20 ～4・28	32.4㎡	個人住宅建築
						195次	2009・6・22 ～6・24	20㎡	
						197次	2009・11・30	18㎡	
						198次	2009・12・2 ～12・11	30㎡	
						199次	2009・12・14 ～12・18	70㎡	
おおのだかんがいせき 大野田官衙遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくおおのだ 太白区大野田	4100	1361	38° 12′ 47″	140° 52′ 45″	2009・4・20 ～ 2009・12・9		689㎡	重要遺跡の範囲確認調査ほか

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡	官衙跡	飛鳥～平安	・柱列・溝跡 ・竪穴住居跡 ・掘立柱建物跡 ・近世墓	・土師器　・須恵器 ・瓦　・キセル ・木製品　・陶器	・Ⅱ期官衙大溝北辺
大野田官衙遺跡	官衙跡	奈良～平安	・溝跡	・土師器　・須恵器 ・弥生土器	・区画溝西辺

要約	郡山遺跡では第194次調査において、南北方向に縦走する溝跡や竪穴住居跡が検出され、南方官衙地区東部における遺構の様相の一端が明らかにされた。第195次調査では、Ⅰ期官衙に関連する可能性が考えられる柱列が検出された。第198次調査では、掘立柱建物跡の柱穴1基や溝跡、近世墓が検出された。第199次調査では、方四町Ⅱ期官衙の大溝北辺が検出された。 大野田官衙遺跡は、これまでの調査で検出された掘立柱建物跡が規則的に配置されること、周囲に溝跡がめぐることから古代の官衙跡と考えられている。また、遺跡の位置関係などから、郡山遺跡との関連も想定されている遺跡である。今年度の調査では、g区において官衙の区画溝の西辺、南西コーナー部を検出したことにより、官衙の範囲が確定した。一方、官衙内部の調査では新たな掘立柱建物跡は発見されず、官衙の構造、性格を明らかにするため、今後、さらなる調査が必要である。

仙台市文化財調査報告書第373集

郡　山　遺　跡　30

平成21年度発掘調査概報
郡山遺跡・大野田官衙遺跡

2010年３月

発行　仙　台　市　教　育　委　員　会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課 TEL 022（214）8893

印刷　モ　リ　タ　印　刷　株式会社
仙台市太白区郡山八丁目20－30
TEL 022（246）0105